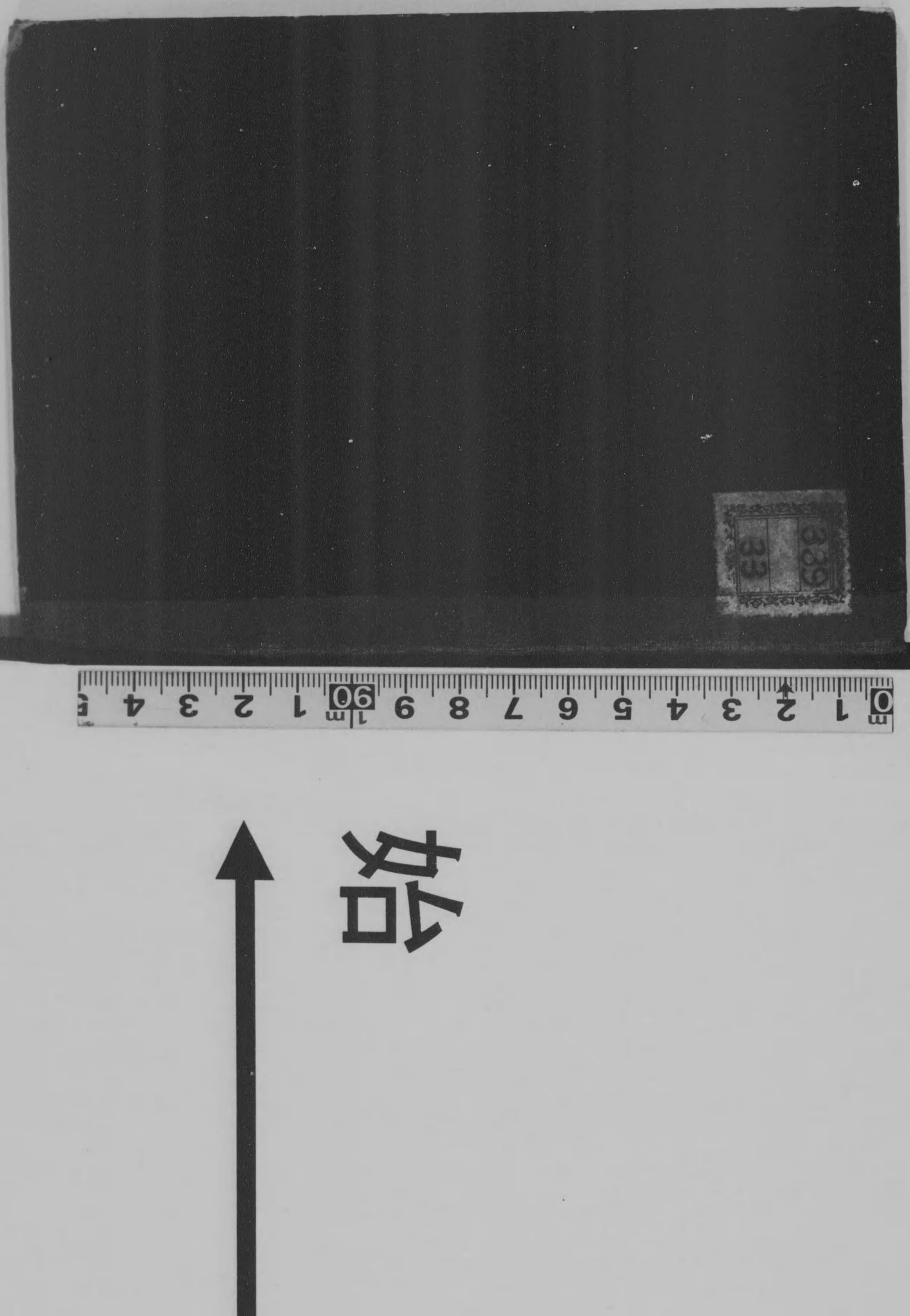
33
389

ゲルヌゼー島のオートヴィル・ハウス

レ・ミゼラブルを書き出しの頃のユーゴーの住居

389-33

ウィクトル・ユーゴー著

レ・ミゼラブル 第二

豐嶋與志雄譯

□新潮社出版□

大正
9. 6. 1
内交

目次（第二卷）

第二部　コゼット（承前）……六八三

第二編　軍艦オリオン號……六八五

一　二四六〇一號より九四三〇號となる……六八五

二　二行の悪魔の詩が讀まるゝ場所……六九〇

三　鐵槌の一撃に壞るゝ足鎖の細工……六九八

第三編　死者への約束の履行……七一三

一　モンフェルメイの飲料水問題……七一三

二　二人に關する完稿……七一八

三　人には酒を要し馬には水を要す……七二七

四　人形の登場……七三二

五　小女たゞ一人……七三五

六　ブーラトリュエルの烱眼を證するもの……七四四

七　コゼット闘中に未知の人と並ぶ……七五二

八　貧富不明の男を宿す不快……七五九

九　テナルディエの策略……七九一
十　最善を求むる者は時に最悪を得……八〇六
十一　九四三〇號再び現はれコゼットその鐵を引く……八一五

第四編　ゴルボー屋敷……八一八

一　ゴルボー氏……八一八
二　梟と鶯との巣……八二八
三　二つの不幸集つて幸福をなす……八三一
四　借家主の眼に觸れしもの……八三九
五　床に落ちし五法の誓き……八四三

第五編　暗がりの追跡に無言の一組……八四九

一　計略の稻妻形……八四九
二　オーステルリッツ橋の荷車……八五五
三　千七百二十七年のパリーの地圖……八六八
四　逃げ道の暗中模索……八六四
五　瓦斯燈にては不可能のこと……八六八
六　謎のはじめ……八七四
七　謎の續き……八七八
八　謎は益々深くなる……八八二
九　鈴をつけたる男……八八五
十　ジャヴェルの失敗の理由……八九五

第六編　プティー・ピクプュス……九〇九

一　ピクプュス小路六十二番地……九〇九
二　マルタン・ヴェルガの末院……九一五
三　謹嚴……九二六
四　快活……九三八
五　いたづら……九三四
六　小修道院……九四五
七　影の中の數人の映像……九四七
八　心の次に石……九五一
九　僧衣に包まれし一世紀……九五四
十　常住禮拜の起原……九六七
十一　プティー・ピクプュスの終り……九六〇

第七編　餘談

一　抽象的觀念としての修道院……九六四
二　歴史的事實としての修道院……九六五
三　如何なる條件にて過去を貴ぶを得るか……九七〇
四　原則の見地より見たる修道院……九七四
五　祈禱……九七六
六　祈禱の絶對善……九七九
七　非難のうちに取るべき注意……九八四
八　信仰——法則……九八五

第八編　墓地は與へらるゝものを受納す……九八九

一　修道院へはひる手段……九八九
二　難局に立つたフォーシュルヴァン……一〇〇三
三　インノサント長老……一〇〇七
四　ジャン・ヴァルジャンとオースタン・カスティルジ＝ーの記事……一〇三〇
五　大酒は不死の靈となるに足らず……一〇四二
六　四枚の板の中……一〇五三
七　札を失くすなといふ言葉の起原……一〇五七
八　審問の及第……一〇七二
九　修道院生活……一〇七八

第三部　マリユス……一〇八五

第一編　バリーの微分子……一〇九五

一　小人……一〇九五
二　その特色の二三……一〇九六
三　その快活……一〇九八
四　その有用な點……一一〇〇
五　その境界……一一〇二
六　その歴史の一瞥……一一〇六
七　その門閥……一一〇九
八　前王の面白き言葉……一一一二
九　ゴールの古き魂……一一一五
十　鼓にバリーあり、鼓に人あり……一一一七

十一　嘲笑し君臨す……一二三五
十二　民衆のうちに潜める未來……一二三六
十三　小僧ガヴローシュ……一二三八

第二編　高等市民……一二三四

一　九十歳と三十二枚の齒……一二三四
二　此の主人にして此の住居あり……一二三七
三　リュク・エスプリ……一二三九
四　百歳の志願者……一二四〇
五　バスクとニコレット……一二四三
六　マニョンとその二人の子供……一二四四
七　規定――晩ならでは訪客を受けず……一二四七
八　二個は必ずしも一對を爲さず……一二四八

第三編　祖父と孫……一二五三

一　昔の客間……一二五三
二　當時の殘存赤黨の一人……一二五五
三　彼等に眠りあれ……一二五九
……一二七〇

四　無頼漢の死……一二八三
五　彈撒に列し革命派となる……一二九〇
六　會堂の理事に逢ひたる結果……一二九五
七　或る甕種……一三〇四
八　花崗岩に對する大理石……一三一四

第四編　ABCの友……一三二四

一　歴史的たらんとせし一團……一三二五
二　フロンドーに對するポシュエの弔辭……一三四八
三　マリユスの驚き……一三五九
四　ミューザン珈琲店の奥室……一三五九
五　地平の擴大……一三七三
六　迫……一三八〇

第五編　傑出せる不幸……一三八六

一　窮迫のマリユス……一三八六
二　貧困のマリユス……一三八九
三　生成したるマリユス……一三九五

四　マブーフ氏……一三〇頁
五　悲慘の隣りの親切なる貧困……一三〇
六　後　繼　者……一三一頁
第六編　兩星の會交……一三二頁
一　綽名――家名の由來……一三三
二　光あり き……一三八
三　春　の　力……一三三
四　大病のはじまり……一三四
五　ブーゴン婆さんの度々の驚き……一三八
六　囚　は　れ……一四一
七　推察のまゝに任せらるゝU文字の事件……一四五
八　老嬢兵と雖も幸福であり得る……一四九
九　日　蝕……一五二

第二部　コゼット（承前）

第二編　軍艦オリオン號

二四六〇一號より九四三〇號となる

ジャン・ヴァルジャンは再び捕へられてゐた。

その痛むべき詳細は、茲に長たらしく述べられない方を讀者は却つて好むであらう。吾人はたゞ、當時の新聞紙に掲げられた次の二つの小記事を書き寫すに止めておかう。それはかの驚くべき事變がモントルーイ・スュール・メールに起つてから數ヶ月後のものである。

此の二つの記事は、むしろ概括的なものである。人の記憶する如く、その頃にはまだガゼット・デ・トリブュノー（法廷日報）がなかつたのである。

第一の記事はドラポー・ブラン紙のである。日附は千八百二十三年七月二十五日としてある。

――パ・ドゥ・カレー郡に於て最近可なり異常な一事件が起つた。マドレーヌ氏と呼ばるゝ

他縣の一人の男が、その地方の古來の工業である黑擬(くろまが)ひ玉及び黑硝子玉の製造を、新らしい製法によつて數年來再興してゐた。彼はそれに依つて、自分の財産を作り、なほ且つその地方を富ました。その功績のために彼は市長に選ばれてゐた。然るに警察では、該マドレーヌ氏は實はジャン・ヴァルジャンといふ男であり、千七百九十六年竊盜のために處刑せられた前科者で監視違反の者であることを發見した。かくてジャン・ヴァルジャンは再び徒刑場に投ぜられた。逮捕せらるゝ前に彼は、ラフィット銀行に預けてゐた約五十萬以上の金額をうまく引出したらしい形跡がある。その上、人の云ふ所によれば、その金額は彼が自分の商賣によつて極めて正當に得たものとのことである。ジャン・ヴァルジャンがツーロンの徒刑場に投ぜられて以來、その金が何處に隱されてゐるか發見せらるゝことは出來なかつた。

第二の記事はジュールナル・ドゥ・パリー紙のであるが、前のよりはやゝ詳しく、日附は同じである。

――ジャン・ヴァルジャンと云ふ一人の放免前科者が、最近ヴァール縣の重罪裁判所に出廷した。その前後の事情は人の注意を惹くに足るものであつた。その惡漢は巧みに警察の眼を遁れ、名前を換へ、北部の或る小都市で市長となるまでに成功した。彼はその都市に可なり顯著な一商業を興したのであつた。然し檢察官の不撓なる熱心のために、彼は遂に假面を剝がれて逮捕せられた。一人の醜業婦の妾があつたが、彼が逮捕せらるゝ折驚きの餘りに死んだ。惡漢は異常なる膂力を有してゐて脫走することを得たが、脫走後三四日にして警察は再びパリーに於て彼を捕へた。丁度首府からモンフェルメイ村(セーヌ・エ・オアーズ縣)へ通ふ小さな馬車に乘つた時に於てゞあつた。然し彼はその三四日の自由な間に、パリーの或る著名な銀行に預けてゐた莫大な金額を手にすることを得た由である。その金額は約六七十萬法だと云ふ。公訴狀によれば、彼はその金を誰にも知られぬひそかな場所に隱匿したらしい、そして何人もそれを見出すことは出來なかつたさうである。それは兎も角として、そのジャン・ヴァルジャンなる者は最近ヴァール縣の重罪裁判に廻された。約八年前、大道にて子供を脅かしその所持品を盜んだといふ罪名によつてゞある。子供といふのは、諸方を渡り歩くかの正直なる少年等の一人であつて、フェルネーの總主教が不朽なる詩に歌つた如く彼等は、

「……サヴォアより年毎に來る。
いみじくもその手は拭ふ

煤けたる高き柱や壁を。」

その盗賊は自ら辯護しなかつた。そして檢察官の巧妙見事なる辯論によつて、その强盗には共犯者があつたこと、及びジャン・ヴァルジャンは南部の盗賊團の一人であつたことが、立證せられた。その結果、ジャン・ヴァルジャンは有罪を宣せられ、死刑の判決を受けた。犯人は上告することを拒んだ。然し國王は非常なる寛容を以て、その刑を減じ無期徒刑に變へられた。それでジャン・ヴァルジャンは、直ちにツーロンの徒刑場に送られた。

ジャン・ヴァルジャンがモントルーイ・スュール・メールに於て宗教上の勤めを缺かなかつたことは、人々の記憶に在つた。で或る新聞は、就中コンスティテュシオンネル紙の如きは、その換刑を以て僧侶派の勝利だとした。

ジャン・ヴァルジャンは徒刑場に於てその番號が變つた。彼は九千四百三十號と呼ばれた。

それからなほ、再び立ち戻つて說くこともあるまいから玆に次のことを附言しておきたい。即ち、モントルーイ・スュール・メールの繁榮はマドレーヌ氏と共に消滅してしまつた。惑亂と逡巡とのかの夜に彼が豫見したことは凡て、事實となつて現はれた。彼が居なくなつたことは、果して魂の無くなつたに等しかつた。彼の失墜後、モントルーイ・スュール・メールには大人物の轉覆後に起るかの利己的な分配が行はれた。それは實に、人類の共同村に於て毎日ひそかに行はれつゝある榮華の必然の分割である。然し史上に只一回記載せられたのは、單にかの有名なるアレキサンドル大王の歿後に起つたからである。將軍等が國王の冠を頂き、小頭等が自ら工場主となるのである。そしてまたそれを羨む競爭者等が現はれて來るのである。今やマドレーヌ氏の大きな工場は閉され、その建物は荒廢に歸し、職工等は分散してしまつた。或者はその地を去り、或者はその職業を去つた。それ以來、凡ては大となるよりも寧ろ小となり、善を事とするよりも寧ろ利得を事とするやうになつた。もはや中心となるものがなく、至る所に競爭があり、苛ら立ちがあつた。マドレーヌ氏は凡てを支配し導いてゐたが、一度彼が失墜するや、各人は私利にのみ汲々として、組織的精神は競爭心と變じ、懇篤の風は苛酷と變じ、凡ての者に對する創立者の慈愛は各人相互の怨恨に地位を讓つてしまつた。マドレーヌ氏の結んだ糸目は亂れて切れてしまつた。人々はその方法をごまかし、製品を粗惡にし、信用を無くした。販路は狹まり、註文は減少した。職工の賃金は低下し、工場は業を罷め、破產が到來した。それからもはや貧しい者等に對する助けも無くなつてしまつた。一切のものが消滅した。

國家の方でも、何處かに何人かゞ居なくなつたのを感じて來た。重罪裁判所がマドレーヌ

氏とジャン・ヴァルジャンとは同一人であることを判定し徒刑場を肥してから、四年もたゝないうちに、モントルーイ・スュール・メールの郡に於ては收稅の費用が倍加した。そしてヴィレール氏は、千八百二十七年二月にそのことを國會で陳述してゐる。

二　二行の惡魔の詩が讀まるゝ場所

さて話を進める前に、丁度その頃モンフェルメイに起つた不思議な一事を多少詳しく玆に述べておきたい。それは檢察官の或る推測といくらか符號する點を有してゐる樣でもある。

モンフェルメイの地方には、ごく古くからの或る迷信があつた。パリーの近くのその地方にかゝる一般に信じられた迷信があることは、丁度シベリアに伽羅の名木があるやうに意外なことで、そのために一層物珍らしく貴重がられてゐたものである。人間は、凡て珍らしいものを珍重するものである。所でモンフェルメイの迷信といふのは次の樣なものであつた。

大昔から惡魔は寶を隱すために森を選んだといふことが人々に信じられてゐる。夕暮の頃、森の奥の方で、或る黑い男に出逢ふことがよくあるものだと、女共は云つてゐる。その男は、荷車挽きか樵夫のやうな顏附をして、木靴をはき、木綿の上衣とズボンとをつけてゐるが、普通の帽子の代りに頭の上には二本の大きい角があるのでそれと見分けられるのださうである。なるほどさういふものがあればよく見分けられる筈である。その男は普通はいつも穴を掘つてゐるさうである。そして彼に出逢つた場合には、三つの方法がある。第一は、彼に近寄つて行つて話しかけることである。するとその男は實は一人の百姓にすぎないことが分る。その姿が黑く見えたのは夕暮のせゐで、また何も穴を掘つてゐたのではなく牛の草を刈つてるのであり、角と思つたのも實は背中に負つてゐる乾草杈であつて、その杈の先が薄暮のために頭から出てるやうに見えたまでゞある。然し彼に話しかけて家に歸つてくると、一週間のうちに死んでしまふ。第二の方法は、その男を遠くから眺めてゐて、彼が穴を掘りその中に物を隱して立ち去つてゆくまで待つてゐて、それから穴の所へ走つてゆき、それを掘り返し、黑い男が隱したに違ひないその「寶」を取つて來ることである。然しさうすると、一月たゝないうちに死んでしまふ。次に第三の方法は、その黑い男に話しかけもせず、見向きもせず、足に任して逃げ出すことである。然しさうすると、一年のうちに死んでしまふ。

右の三つの方法とも皆それ〴〵不幸を來すのであるが、第二の方法は、たとひ一ヶ月でも寶を所有することが出來るので少くともいくらか他のにまさるものだから、最も普通に取られる方法である。それで如何なる機會にも誘はれる大膽な男共は、その黑い男の掘つた穴を發き惡魔の寶を盜まんとしたことが屢々あつたさうである。然し餘り大した仕事にも無らな

いらしい。少くとも、傳説の語る所によれば、また特に、トリフォンといふまやかしのノルマンディーの悪僧がその事について殘した野蠻なラテン語の露骨な詩の二句を信ずるなら、それは一向下らない仕事らしい。そのトリフォンといふ牧師は、ルアンの近くのサン・ジュルジュード。ボシュルヴィルの修道院に埋められたが、その墓からはたゞ蕈が生じたのみだつた。

が兎に角人は非常な努力をする。さういふ穴は通例極めて深い。汗を流し、かき廻し、夜通し骨を折る。夜のうちにしてしまはなければならないのである。襯衣は汗にぬれ、蠟燭は燃えつき、鶴嘴を痛め、そして遂に穴の底まで掘り進み、その「寶」に手をつけてみると、さて何が目附からう、悪魔の寶などと云ふものが何であらう。一枚の銅貨、時には銀貨、それから石くれ、骸骨、血まみれの死體、或は紙入れの中の紙片のやうに四つに疊まれた幽靈、或は何にも無いこともある。不遠慮な好奇な者等にトリフォンの詩が語つてきかせるやうなものにすぎない。

彼は掘り薄暗き穴に隱すなり、
銅貨銀貨石くれ死骸妖怪、或は無を。

今日ではなほその外に、或は彈丸と火藥箱や、或は手垢のついた赤茶けた古いカルタなど、確かに悪魔共の使つたらしい品物が其處に見出されるだらう。トリフォンはこの終りの二品を擧げてゐない、彼は十二世紀の人なのである、そして悪魔も、ロージャー・ベーコンより前に火藥を發明し、シャール六世より前にカルタを發明するだけの知力を持つてゐないものと見える。

その上、もしそれらのカルタを弄ばうものなら、凡てをうち負けて取られてしまふ覺悟がいる、そしてまた箱の中の火藥には、鐵砲をその所有者の顏に向つて發火せしむる特性があるのである。

所で、放免囚徒ジャン・ヴァルジャンはその數日間の逃走の間モンフェルメイの附近に彷徨いてゐたらしく檢察官が睥んでから、其後間もなく、プーラトリュエルといふ或る年取つた道路番人が森の中で「をかしな風をしてる」のが、モンフェルメイの村の人達の眼についた。プーラトリュエルは嘗て徒刑場にはひつてゐた者であるとその地方では信じられてゐた。彼は警察の監視の下に置かれてゐた、そして何處にも仕事が見つからなかつたので、政府の方でガンニーからランニーまでの横道の道路番人として割引した給料で使つてゐた。

プーラトリュエルはその地方の人々から横目で見られてゐた。彼は馬鹿丁寧で、餘り身を卑下してゐて、誰にでもすぐに帽子を取つてお辭儀をし、憲兵等の前では震へながら愛相をし、人々からは多分盗賊團の仲間にはひつてゐるのだらうと云はれて居り、夕方などは森影

に潜んで人を待伏せしてゐると疑はれてゐた。たゞ人間らしい取柄としては、酒飲みであるといふこと位であつた。

人々の眼についたのは次のやうなことであつた。

近頃いつもブーラトリュエルは、道路に砂利を敷いて手入れをする仕事をごく早めに切り上げ、鶴嘴を持つて森の中にはひつてゆくのであつた。夕方など、最も人氣の少い伐木地や最も寂寞たる茂みの中などで、時々穴を掘つたりして何か探し廻つてるやうな彼に、出逢つた者もまゝあつた。其處を通りかゝつた女共は、初めそれをベルゼブル（譯者曰。新譯聖書にある惡鬼の頭）だとさへ思つたが、よく見るとブーラトリュエルであつた。それでも彼女等は少しも心が安まらなかつた。然るにブーラトリュエルはさういふ風に人に出逢ふことを非常に嫌がつたらしかつた。明かに彼は人に見られるのを避けようとしてゐた、そして彼の仕業のうちには何か祕密があるのは明かだつた。

村では種々なことが云はれた。「屹度惡魔が現はれたに違ひない。ブーラトリュエルはそれを見て探してゐるのだ。なるほどあの男なら魔王の金をまき上げる位のことはやりかねない。」ヴォルテール派の懷疑家等はつけ加へた。「ブーラトリュエルが惡魔を捕へるか、惡魔がブーラトリュエルを捕へるかだ。」年老いた女共は幾度も十字を切つた。

そのうちにブーラトリュエルは森の中の仕事を止めてしまつた。彼は道路番人の仕事をまた几帳面にやり出した。人々の噂も他のことに向いていつた。

けれども中にはまだ好奇心を懷いて、恐らくそれには、傳說の荒唐な寶物（たからもの）ではなく惡魔の手形よりはもつと眞面目なもつと實際的な獲物があつて、道路番人は屹度その祕密を半ば嗅ぎ出したのであらうと思つてる者もあつた。そして最も「心を引かれてゐた」者は、小學校の先生と飲食店の主人テナルディエとであつた。特にテナルディエは誰とでも交るのを嫌はないで、ブーラトリュエルとも知り合ひであつた。

「あの男は徒刑場に居たことがある筈だ。」とテナルディエは云つた。「だから一體どんな奴がやつて來たのか、またどんな奴がこれからやつて來るか、分つたもんぢやない。」

或る晩小學校の先生が云ふには、昔であつたらブーラトリュエルが森の中で何をするつもりであつたか官憲の方で調査した筈である、そして彼奴も何とか饒舌らなければならなかつただらう、必要によつては拷問にかけられることもあつたらう、で結局ブーラトリュエルは例へば水責めの拷問には堪へきれなくて白狀したかも知れない。するとテナルディエは云つた、「一つ酒責めにしてみませうや。」

彼等は手段を講じて、その老道路番人に酒を飲ました。然しブーラトリュエルは酒を澤山

飲んで、口は餘り利かなかつた。彼は大酒家の喉と裁判官の用心さとを、如何にも巧みにまた見事な割合に併せて用ゐた。けれどもしつこく問ひたゞして、彼の口から洩れた曖昧な二三の言葉を一緒に繋ぎ合してみて、結局テナルディエと先生とは次のことを探り得たと思つた。

ブーラトリュエルが或る朝夜の明け方に仕事に出かけて行くと、森の片隅の藪の下に鑵と鶴嘴とを見出して驚いたらしい。それは丁度隠されたやうにして置いてあつた。けれども彼は、それを多分水汲み爺さんのシー・ブールの鑵と鶴嘴とであらうと思つて、別に氣にも留めなかつたらしい。けれどもその日の夕方、彼は或る大木の後ろに身を隠して向うの眼を逃れながら、「全く其の邊の者ではないが彼ブーラトリュエルがよく知つてる一人の男」が、道路から森の最も深い方へはひつてゆくのを見たらしい。テナルディエはそれを飜譯して「徒刑場の仲間の一人」だとした。ブーラトリュエルは頑固にその名前を云ふことを拒んだのである。その男は、大きな箱か或は小さな鞄みたやうな何か四角な包みを持つてゐた。ブーラトリュエルは驚いた。それでも「その男」の跡をつけてみようといふ考へを起しはしたが、それも七八分過ぎてからであつたらしい。彼は機を失してゐた。男は既に木立の茂みへはひつてしまひ、あたりは夜になつてゐて、ブーラトリュエルは男を見附けることが出來なかつた。

その時彼は森の入口を番してみようと決心した。「月が出てゐた。」二三時間後に、ブーラトリュエルはその男が森から出て來るのを見た。然しもう小さな鞄は持つてゐず、鶴嘴と鑵とを持つてゐた。ブーラトリュエルは男をやり過し、近づいてみようといふ考へは起さなかつた。なぜなら、彼はその男が自分より三倍も力がある上に鶴嘴を持つてゐることを考へたからである。そして彼が自分を認め、また自分から見られたことを知つたなら、屹度自分を打ち殺すかも知れないと思つたからである。二人の古い仲間がふいに出逢つた場合の考へとしては恐ろしい想像である。然しその鑵と鶴嘴とは、ブーラトリュエルに取つては一道の光明であつた。彼はその朝見た藪の所へ驅けて行つた、すると其處にはもう鑵も鶴嘴も無かつた。それから見ると、男は森の中にはひり込み、鶴嘴で穴を掘り、箱を隠し、鑵で穴を再び埋めたものと、彼は斷定した。然るにその箱は、人間の死體を入れるには餘り小さかつたので、金がはいつてゐたものであらう。それで彼は捜索をはじめた。ブーラトリュエルは森の中を方々探し廻り尋ね歩いた、そして新らしく土地が掘り返されたやうに見える所は何處でも掘つてみた。然し凡て無駄に終つた。

彼は何も「掘りあて」なかつたのである。モンフェルメイではもう誰もそのことを念頭に置かなかつた。唯二三の人の好い饒舌な女達は云つた。「ガンニーの道路番人の爺さんがたゞ

でそんな大騒ぎをするものですか。屹度悪魔が來たのですよ。」

三　鐵槌の一撃に壞るゝ足鎖の細工

同じ千八百二十三年の十月の末に、ツーロンの住民は、軍艦オリオン號が大暴雨に逢つた後損所を修理するために入港してくるのを見た。このオリオン號といふのは、後にはブレストで練習艦として用ゐられたが、當時は地中海艦隊のうちに編入されてゐたものである。

その艦は、荒れた海のためにひどく損んでゐたが、港にはひつて來ると頗る偉觀であつた。どういふ旗を掲げてゐたかは今記憶に無いが、その旗のために港からは規定の十一發の禮砲が放たれ、その一發毎に艦からも答禮砲が返されたため、都合二十二發の大砲が發せられた。凡そ大砲の連發のうちには種々な意味が籠められてゐたのである、王國及び軍國の禮儀、驚然たる阿諛の交換、禮式の信號、海上と砲臺との儀式、毎日凡ての要塞及び軍艦から迎へらるゝ日出と日沒、港の開始と閉塞、其他種々のものが。文明社會は、各地に於て毎二十四時間毎に、無益な大砲を十五萬發も發砲してゐる。一發を六法とすれば、一日に九十萬法が、一年に三億法が、煙となるわけである。そしてそれもたゞ一部の項目だけでさうである。その間に一方では、貧しい人々は饑ゑてゐる。

千八百二十三年は、復古政府が「スペイン戰爭時代」と呼んだ年である。

その戰爭一つのうちには、多くの事變が含まつて居り、多くの特殊な事柄が混入してゐた。ブールボン家に取つては重大な家庭問題。フランス王家はマドリッドの王家を援助し保護して、所謂本家の勤めを盡したこと。北方の諸政府に隷屬服從して一層煩雜を來したフランスの國民的傳統への表面上の復歸。アングーレーム公は、自由派の虐政と想像せられた所のものと爭つてゐた宗教裁判所の實際の古來からの虐政を、いつもの穩和な樣子にも似ず堂堂たる態度を以て抑制して、自由派の諸新聞からアンデュジャールの英雄と呼ばれたこと。革命共和黨はデスカミザドス（譯者曰、襯衣無しといふ意味）の名の下に復活して、有爵未亡人等に恐慌を來さしめたこと。王政は無政府制と綽名せられた進歩に對して障害となつたこと。千七百八十九年の革命の理論は底深く浸潤せんとする途中に俄に中斷せられたこと。フランスの革命思想を親しく見た全歐洲の警戒の聲は世界中に響き渡つていつたこと。フランス皇太子と相並んで、後にシャール・アルベールと云はれた元帥カリンニャン大公は、義勇兵として擲彈兵の赤い絨毛の肩章をつけた民衆を壓伏せんとする諸國主等の企てに加入したこと。帝國時代の兵士等は再び戰場に就いたが、八年間の休息の後をうけて既に老衰し、また白い帽章をつけてゐたこと。三十年前コブレンツに於て白旗が打ち振られたやうに（譯者曰、革命

時代王黨の移住者等が一軍を編成したことを云ふ）三色旗は勇壯なる一群のフランス人によつて外國に於てうち振られたこと。フランスの軍隊に混入した僧侶等。銃劍によつて抑壓せられた自由と新時代との精神。砲擊の下に屈伏させられた主義。その精神によつて爲した所のものをその武器によつて破壞したフランス。之に加ふるに、賣られたる敵の將帥等と、逡巡する兵士等と、數百萬の金によつて包圍せられたる都市。宛も不意を襲はれて占領せられたる火坑に於けるが如く、軍事上の危險の皆無と而も爆發の可能。流血も少く、得られたる名譽も少く、一方には恥辱があり、他方には光榮が無かつたこと。斯くの如きが實に、ルイ十四世の後裔たる諸大公によつて爲されナポレオンの下より輩出したる諸將軍によつて導かれた此の戰爭の實狀であつた。此の戰爭はもはや、かの大戰役をもまたかの大政策をも思ひ起さしめない悲しき運命を荷つてゐた。

軍事上の二三の事蹟は眞摯なるものであり、就中トロカデロの占領は見事なる武勳であつた。然し畢竟するに、吾人はくり返して云ふが、本戰爭の喇叭は錯亂したる音をしか出さなかつた。その全體は曖昧模糊としてゐた。その似而非戰勝の名前を受くるにフランスが困惑を感じたことは、史眼に照して正當である。防禦の任を帶びたスペインの或る將軍等は、明かに餘りに容易く屈伏したらしい。その戰勝は見る人の心に買收の想像を起さしむる。勝利を得たといふよりも寧ろ將軍等を買ひ得たかの觀がある。そして戰に勝つたる兵士等は屈辱を負つて國へ歸つた。軍旗の襞のうちに、フランス銀行の文字を讀み得る所には、實に戰爭の光輝は薄らぐ。

サラゴスの城壁が頭上に恐ろしく倒れかゝる下に在つてなほ泰然たるを得た千八百八年の兵士等は、千八百二十三年には、容易き諸要塞の開城の前に眉を顰め、パラフォス將軍（譯者曰、一八〇八年にサラゴスを護つたスペインの勇將）を惜しみ初めた。己の前にバレステロスを有するよりも寧ろロストプシンを有するを好むのが實にフランス人の氣質である。（譯者曰、前者は當時の敵の將軍、後者はナポレオンのロシア侵入の時モスコーを燒き拂つたロシアの將軍）

なほ一層重大にして玆に力說するが適當である他の一見地より見るならば、此の戰爭は實に、フランスに於て軍國の精神を破壞しながら、他方には民主的精神を激怒せしめたのである。それは一の隷屬の企圖であつた。此の戰役に於ては、民主制の子孫たるフランス兵士の目的は、他人に課すべき軛の獲得であつた。忌むべき矛盾である。フランスは、諸民衆の心を窒息せしめんがためにではなく、反對にそれを覺醒せしめんがために作られたのである。千七百九十二年以後歐洲のあらゆる革命は實にフランス革命の一分子である、自由の精神はフランスより放射してゐる。それは太陽の如く煌々たる事實である。そを見ざる者は盲者

なり！　とは實にボナパルト自身の言葉である。

千八百二十三年の戰爭は、寛大なるスペイン國民への加害であり、從つて同時にフランス革命への加害であつた。その恐るべき暴行を犯した所のものはフランスであつた、而もそれは暴力を以てゞあつた。何故なれば、獨立戰爭を外にしては、凡て軍隊が爲す所のものは暴力を以て爲されるものであるから。絶對服從といふ言葉はそれを指し示すものである。軍隊といふものは、不思議なる狙み合せの傑作であつて、其處に於ては多くの無力の合計より力が生じてくる。人道によつて爲され人道に對抗して爲され人道をふみつけにして爲される戰爭なるものは、實に斯くの如くして初めて說明し得らるゝ。

ブールボン家の人々に就いて云ふならば、千八百二十三年の戰役は彼等にとつては致命的なものであつた。彼等は此の戰を以て成功であるとした。そして彼等は、壓迫を以て一の思想を閉息せしむることには如何なる危險があるかを少しも見なかつた。淺慮なる彼等は謬見を懷いて、罪惡に對する非常なる鈍感を宛も力の一要素でゞもあるかのやうに己の館のうちに導き入れた。待伏陰謀の精神は彼等の政策のうちにはひつて來た。千八百三十年（譯者曰、七月革命の年）は千八百二十三年に芽を出した。スペイン戰爭は彼等の評議會に於て、武力斷行と神聖なる法の暴險とを辯護する論據となつた。フランスは、スペインに專制君主をうち立てながら、自國內に專制君主をよくうち立てるを得た。彼等は、兵士の服從を國民の同意と誤認するの恐るべき誤りに陷つた。そのやうな安心は王位を失はせるに至るものである。毒樹の影には眠る可らず、軍隊の影に隱れて眠る可らず、である。

さてオリオン號に立ち戻つてみよう。

丁度總司令官大公に指揮せられた軍隊が出動してゐる間、一艦隊は地中海を遊戈してゐた。そして前述の通り、オリオン號は暴風に損んでツーロン港に歸つて來たのである。

港のうちに現はれる軍艦は、何かしら群集を引きつけ群集の心を奪ふものである。何故なら、それは一種の偉大さを有つてゐるものであるから、そして群集は偉大なるものを好むものであるから。

戰鬪艦は、人間の膽力と自然の力との最も壯觀なる爭鬪の一である。

戰鬪艦は、最も重きものと最も輕きものとから同時に組立てられてゐる。何故ならばそれは、物質の三形體たる固體液體及び氣體に同時に對抗し、その三つと鬪はなければならないからである。海底の岩石を掴むためには十一本の鐵の爪を有し、雲間の風を捉へるためには胡蝶よりも多くの翼と觸角とを有してゐる。その息は、巨大なる喇叭から出る如くに二十の砲門から出で、忠實に火藥の音を返す。大洋はその一樣なる恐るべき波濤のうちに彼を

迷はさんとするけれども、彼はその心を、羅針盤を有してゐて、常にそれに謀り常に北を教はる。闇夜に於てはその照燈は、星の光りを補ふ。斯くして彼は、風に對しては索繩（なは）と帆布とを有し、水に對しては木材を、岩に對しては鐵と銅と鉛とを、闇に對しては光りを、廣漠に對しては磁針を有してゐる。

全體として一の戰鬪艦を形造つてゐるその巨大なる構造の大凡の概念を得んと欲するならば、ブレストか又はツーロンの港の七階の高さほどもある屋根のついた船渠の一つにはひつてみれば十分であらう。其處では建造中の船が、云はゞ硝子瓶の中にでもはひつてゐるやうに見える。かの巨大なる梁は帆桁である、かの眼の屆く限り長く地上に横はつてゐる大きな木の圓柱は大檣である。船渠の中の根本から雲間の梢までそれを測つてみると、實にその長さ六十尋（ひろ）を算し、その根本の直徑三尺に餘る。イギリス船の大檣は、吃水線上二百十七尺の高さに及ぶものがある。昔の船は麻綱を使つてゐたが、今では鐵鎖を用ゐてゐる。百門の砲を載せる船の錨を積み重ねたゞけでも、高さ四尺長さ二十尺、幅八尺の山が出來る。そしてその船一隻を造るためには何程の木材が必要であるかと云へば、實に三千立方米突にも及ぶのである。正に森が一つ海に浮んでゐるのにも等しい。

そして而も、讀者はよく注意せらるゝがいゝ、茲に云ふのは四十年前の軍艦、一帆船のことに就いてゞある。當時まだ生れ出たばかりであつた蒸汽力は其後、軍艦と稱せらるゝ此の怪物に新らしい奇蹟をつけ加へたのである。現今に於ては、例へば、スクリューのついた折衷式軍艦は、表面三千米突平方の帆と二千五百馬力の釜とによつて動かされる驚くべき機械である。（譯者曰、原書の出版は千八百六十二年なることを讀者は記憶せられたい）

それらの新らしい不思議については云ふも愚かなことであるが、クリストフ・コロンブスやルイテルの昔の船も、人間の偉大なる傑作の一つである。宛も無限がその息吹きに無盡藏であるが如くにそれも力に於て無盡藏であり、その帆には風を藏し、廣漠として窮まりなき波濤のうちにも正確なる方向を失はず、浮びつゝ且つ主宰するのである。

然れども一度時來らば、一陣の颱風はその長さ六十尺の帆桁をも藁屑の如くに碎き、烈風はその高さ四百尺の檣（マスト）をも蘭の如くに折り曲げ、その數萬斤の重さの錨も鮫の顎の中に於ける漁夫の釣針の如くに怒濤の口のうちに捩ぢ曲げられ、その巨大なる大砲の發する訴ふるが如き徒らなる咆吼も颶風のために空虛と闇夜とのうちに運び去られ、その全威力と全威風も更に大なる威力と威風とのうちに呑み去られ終るのである。

廣大なる威力が張られる度毎に、遂にはそれも非常なる微弱さに終りゆくべき運命である に拘らず、人間はいつも夢想に耽るのが常である。斯くして海港に於ては、それらの戰と航

海との驚くべき機械のまはりに、自ら何故かをも明かに知らないで多くの好奇な人々が集つて來るのである。

で毎日朝から夕方まで、ツーロン港の海岸や埠頭や堤防などの上には、閑な人々やパリーで所謂彌次馬など、オリオン號を見るより外に用の無い多くの人が一杯になつてゐた。

オリオン號は既に長い前から損んでゐた。方々への航海中に、貝殻の厚い層が吃水部に附着してゐて、速力の半ばを減じてゐた。で前年にはドックに入れてその貝殻を除き、そしてまた海に出て行つたのである。然しその掃除のために吃水部の釘が損んでゐた。バレアール島の沖では、船腹がゆるんで穴が開いた、そして當時船體の內部は鐵板で覆はれてゐなかつたので、水が漏り初めてゐた。所へ烈しい彼岸嵐に襲はれて、左舷の舳と一舷窓とが壞れ、前檣の索棒が損んだ。そしてそれらの損所のためにオリオン號はまたツーロン港にはひつて來たのである。

オリオン號は造船工廠の近くに碇泊してゐた。そしてなほ艤裝したまゝ修繕されてゐた。船體は右舷では少しも損んでゐなかつた、然しいつもやられる通りに、張板はそこ〻に釘を外されてゐて、船內に空氣を通させる用に供されてゐた。

さて或る日の朝、オリオン號を眺めてゐた群集は一事變を目擊した。

船員等は丁度帆を帆桁に張つてゐた。すると、右舷の大三角帆の一端を括らうとしてゐた水兵が身體の平均を失つた。彼はよろめいた。造船工廠の海岸に集つてゐた群集は叫び聲を上げた。頭を眞先にして水兵は帆桁をぐるりと廻つて、逆樣に深海に向つて兩手を擴げた。落ちる途中に彼は下つてゐる綱を片手で掴み、次に兩手で掴んで、其處にうまくぶら下つた。海は彼の下に、眼を廻すやうな深さに湛へてゐた。彼の墜落の勢のために、綱は鞦韆のやうに激しく動搖した。水兵はその綱の一端に搖り動かされて、丁度石投紐の先につけた石のやうであつた。

彼を助けにゆくには、恐るべき危險を冒さなければならなかつた。水夫等のうちにも、また新たに徵發せられて其處に働いてゐた漁夫等のうちにも、敢てその危險を冒さうとする者は一人もなかつた。そのうちに不運な水兵は弱つてきた。遠いので顏にその苦惱は認められなかつたが、彼が次第に力弱つてゆくことは手足の運動にそれと認められた。差伸された腕は見るも恐ろしいほどびく〳〵震へてゐた。再び攀ぢ上らうとする努力は、ぶら下つた綱の動搖を徒らに增すばかりであつた。彼は力を失ふのを恐れて聲も立てなかつた。もはや彼が綱を離す瞬間を待つばかりであつた。そして人々は彼が落ちてゆくのを見まいとして各瞬間毎に顏を外向けた。綱の一端、一片の棒、一本の木の枝、それが生命それ自身であるや

うな場合があるものである、そして、生あるものが熟した果實のやうにそれから離れて落ちるのを見るのは、實に恐ろしいことである。

その時突然猿のやうな捷さで一人の男が船具を攀ぢ上つてゆくのが見られた。その男は赤い着物を着てゐた。徒刑囚である。青い帽子を被つてゐた。無期徒刑囚である。檣樯の上に達すると、一陣の風がその帽子を吹き飛して、白髪の頭が見られた。青年ではない。

實際船の中で徒刑勞役として働いてゐた一人の囚人が、その事變が起るとすぐに當直士官の所へ駆けてゆき、船員等が躊躇し惑つてゐる中に、凡ての水夫等が震え尻込みしてゐるうちに、彼はたゞ一人生命を堵して水兵を救ひに行くことを許してくれるように士官に願つた。士官の許しの首肯を見て、足の鐵輪についてゐた鎖を彼は鐵槌の一撃にうち壊し、それから一筋の繩を持つて、檣の綱具のうちに上つていつたのである。如何に容易くその足鎖が壊れたかには、その瞬間誰も氣がつかなかつた。人々がそのことを思ひ浮べたのはずつと後のことであつた。

瞬くまに彼は帆桁の上に達した。彼は數秒の間立ち止つて、帆桁を目で見計らつてゐるらしかつた。そのうちにも風は綱の先端の水兵を吹き動かしてゐて、見物してゐる人々にはその數秒が數世紀の長い時間ほどにも思はれた。遂に囚人は眼を空に上げ、そして一歩ふみ出した。群集は溜息をもらした。見ると、彼は帆桁の上を走つていつた。その先端に達するや、彼は持つてゐた繩の端を其處に結へ、他の端を下に垂らし、それから兩手でその繩に傳つて下り初めた。玆に於て人々の心痛は名狀すべからざるものとなつた。今や深淵の上にぶら下つてゐるのは一人ではなく、二人となつたのである。

云はゞ蜘蛛が蠅を捕へに來たやうなものであつた。たゞその場合、蜘蛛は死をでなく生を持ち來つたのである。數萬の視線はその二人の上に据ゑられた。一言の叫びをも言葉をも發する者はなく、皆一樣に身を悚めながら眉根を寄せてゐた。人々の口は呼吸をも押し止め、宛も二人の不幸なる男を搖つてゐる風に少しの息をも加へまいと氣遣つてゐるかのやうであつた。

そのうちに囚人は水兵の近くに身を下げることを得た。危い時間であつた。今一分も遲ければ、その水兵は疲れ切つて絶望し、深淵のうちに身を落す所であつた。囚人は一方の手で繩に身を支へながら、他方の手で水兵をその繩にしかと繫ぎとめた。見ると、遂に彼は帆桁の上にまたよぢ上り、水夫を引き上げてしまつた。彼は其處で一寸力を恢復させるために水兵を抱きとめ、それから彼を小脇に抱え、帆桁の上を横木の所まで歩いてゆき、そこから更に檣樯までいつて、其處で彼を仲間の人々の手に渡した。

その時群集は喝采した。老看守のうちには涙を流す者も居た。女達は海岸の上で相抱いた。一種の感極つた昂奮した聲で「あの男を許してやれ！」と皆異口同音に叫ぶのが聞えた。

そのうちに彼の方では、また勞役に從事するために、義務として直ちに其處から下り初めた。早く下に着くために、彼は綱具のうちを滑り下り、それから下の帆桁の上を走り出した。人々の眼は彼の後を追つた。所が或る瞬間に人々ははつと恐れた。疲れたのか又は眼が廻つたのか、彼は一寸躊躇しそしてよろめいたやうであつた。と突然群集は高い叫び聲を上げた。囚人は海中に落ちたのである。

その墜落は危險であつた。軍艦アルゼジラス號が丁度オリオン號と並んで碇泊してゐた、そして憐れな徒刑囚はその間に落ちたのであつた。彼は兩艦の何れかの船底に卷き込まれる恐れがあつた。四人の男が急いでボートに飛び乘つた。群集は彼等に聲援した。心痛は人々の心のうちにまた新たになつた。その男は水面に浮きらなか上つた。宛も石油樽の中に落ち込んだがやうに、彼は一波をも立てずに海中に消え失せてしまつた。人々は水中を探り、また潜つてみた。然し無益であつた。夕方まで捜索は續けられた。けれども死體さへも見附からなかつた。

翌日、ツーロンの新聞は次の數行を掲げた。

――千八百二十三年十一月十七日――昨日、オリオン號の甲板で勞役に從事してゐた一囚徒は、一人の水兵を救助して歸り來る折海中に墜落し溺死した。死體は發見するを得なかつた。察する所、造船工廠の尖端の杭の間に絡まつたものであらう。その男の在監番號は九千四百三十號で、ジャン・ヴァルジャンといふ名前である。

第三編　死者への約束の履行

一　モンフェルメイの飲料水問題

モンフェルメイは、リヴリーとシェルとの間に位し、ウールクとマルヌ兩河を距てゝゐる高臺の南端に在る。今日では可なり大きな町で、一年中白堊の別莊で飾られ、日曜日には華かな市人で飾られるが、千八百二十三年には、其處にはまだ今日ほど多くの白塗りの家もなく、また滿足げな市人も居なかつた。それはたゞ森の中の一村落にすぎなかつた。たゞそこ〻に二三の近世風な別墅などがあつて、その堂々たる構へや、よごれた鐵柵のついた露臺や、閉された眞白な板戸の上に色硝子の種々な綠色が浮いて見える長い窓などで、それと見分けられてゐた。それでもやはりモンフェルメイは一の村落にすぎなかつた。引退した吳服商や、轉地する商事裁判代人なども、まだ此の地を見出してゐなかつたのである。それは平和な麗しい場所であつて、何れへの往還にも當つてゐなかつた。豐富な氣象い田舍生活をも、安價で送ることが出來てゐた。たゞ土地が高いので、水が不自由であつた。

可なり遠くまで水を取りに行かなければならなかつた。ガンニーの方へ面した村の一端では、森の中にある多くの美しい池から水を汲んでゐた。會堂をとり圍んでシェルの方へ面した他の一端では、シェルへ行く道の側に村から約十五分もかゝる山腹の所にある小さな泉までゆかなければ、一切飲料水は得られなかつた。

それでどの家でも、水を得ることは可なり骨の折れる仕事であつた。大きな家、上流階級、テナルディエの飲食店もそのうちにはひるのであるが、それらの家では一桶について五厘づゝで水を買つてゐた。水汲みを職業としてゐるのは一人の老人であつて、彼は村の水汲みの仕事で一日に八錢ばかりづゝ得てゐた。けれどもその老人は、夏には七時まで、冬には五時までしか働かなかつた。それで一度夜になると、一階の窓の戸が一度閉まる頃になると、水を絶やした家では、自分で汲みにゆくか、又は水なしで我慢をするかしなければならなかつた。

恐らく讀者も忘れないでゐるに違ひないかの憐れな娘、小さなコゼット、彼女が非常に恐れてゐたのはそのことであつた。讀者の思ひ起す如くコゼットは二つのことでテナルディエの者等に有用であつた。彼等は母親から金をしぼり取ると共に、また子供をこき使つてゐたのである。それで、前の各編に述べておいたやうな理由で、母親の方から全く金が來なくなつ

た時にも、テナルディエの者等はコゼットを家に置いてゐた。彼女は下女の代りになされてゐたのである。水の入用な時にそれを汲みに走つて行くのは、下女としての彼女であつた。夜に泉の所までゆくことは考へても身震ひがするほど恐れてゐた娘は、それで家の中に決して水を絶さないやうに非常に注意してゐた。

千八百二十三年のクリスマスは、モンフェルメイでは特に賑かであつた。その冬の初めも至つて温和で、まだ霜も降りなければ、雪も降らなかつた。香具師等がパリーからやつて來て、村長の許しで村の大きな通りに假小屋を建て、また旅商人の一隊も同じく許しを得て、會堂の廣場からブーランゼーの小路まで露店を建てつらねた。多分讀者も記憶してゐるであらうが、そのブーランゼーの小路にテナルデェエの飲食店はあつたのである。それらの騒ぎのために宿屋や飲食店などは一杯になり、その靜かな田舎は樂しく賑かに活氣立つた。なほまた忠實なる史家として吾々は、玆につけ加へておかなければならない一事がある。即ち廣場の上に並んだ見世物のうちに、一つの動物小屋があつた。その中で、身には襤褸をつけて何處からやつて來たとも分らない汚い道化者等が、その千八百二十三年にモンフェルメイの百姓共に、かの恐ろしいブラジルの禿鷹の標本を一つ見せたのである。それは王室博物館にも千八百四十五年までは無かつたものである。標本の眼には三色の帽章がつけられてゐた。

博物學者はその鳥をカラカラ・ボリボロスと呼んでゐると記憶する。それはアビシデの部門にはひるもので、禿鷹類に屬するものである。村に退いてゐるボナパルト派の人のいゝ老兵士等が數人、その鳥を熱心に眺めてゐた。その三色の帽章の眼は、此の動物小屋のために有難い神樣の御手に特別に爲された他に見られない圖であると、道化者共は說き立てゝゐた。

そのクリスマスの晩に、テナルディエ飲食店の天井の低い廣間の中では、馬方や行商人など數人の男が、四五の燭臺のまはりに陣取つて酒を飲んでゐた。その廣間は何處の居酒屋にも見られるやうなもので、食卓、錫の瓶、酒壜、それから酒を飲んでる男や、煙草をふかしてる男、中はうす暗くて、而も騒然たる音を立てゝゐた。けれども千八百二十三年といふ年には、特に著しく市民階級の間に流行してきた二つの物があつた。即ち百花鏡と木目模樣の鍼力のランプとである。この廣間にもその二つが卓子の上にのつてゐた。そしてテナルディエの上さんは、赤く熾つた火の上に煮立つてゐるスープの番をして居り、亭主の方は、客達と酒を飲みながら政治を論じてゐた。

スペイン戰爭やアングーレーム公を中心にした政治談の外に、なほ地方的の種々な事柄に關する談笑もあつた。次のやうな言葉も聞かれた。

「ナンテールやスュレーヌの方では葡萄酒がえらく出來たぜ。十樽位かと思つてると十二樽

もあるんだ。壓搾器のために液汁が多く取れたんだ。――だが葡萄はまだ熟しちやゐなかつたらうぢやねえか。――なにあちらぢや、熟すまで置きやしねえ。熟してから採つたんぢやあ、葡萄酒は桝になると粘つちまわあ。――それぢやあ薄い葡萄酒だね。――さうとも、此の邊に出來るのよりももつと薄いや。兎に角葡萄は青いうちに採るに限るぜ。」

其他種々の話。

それからまた粉屋はこんなことを云つてゐた。

「俺達は袋の中のものに責任を負へるかい。澤山の穀類がはひつてるのを、一々選り分けてをられるものぢやねえ。たゞ挽臼の中につぎ込むばかりだ。どくむぎ、あたますき、なでしこむぎ、はとまめ、やはずゑんどう、たいま、いぬすぎな、その外いろんなものがはひつてやがるんだ。また馬鹿に石の多い麥があるのは云ふまでもねえ。とりわけブルターンニュの麥はひでえや。俺はブルターンニュの麥を挽くなあ全く御免だ。篩の多い梁を鋸でひくのが嫌だといふが、もつと嫌なもんだ。そんな下等な麥でどんな粉が出來るもんか。それなのに粉の苦情ばかり云つてやがる。云ふ方が無理なんだ。粉が悪いつたつて何も俺達の罪ぢやねえんだ。」

二つの窓の中程の所には、一人の草刈人夫が地主と一緒に食卓について、春に爲すべき牧場の仕事の賃金を相談せられてゐたが、彼はこんなことを云つてゐた。

「草が濡れるなあ悪かありません。刈りよくなるだけでさあ。露はいゝですよ、旦那。だがそれはともかく、あの草は、旦那の草は、まだ若いんで刈り悪いですよ。柔いうちはどうも大鎌の下にしなつてかなひませんからね。」

其他種々。

コゼットはいつもの通り、料理場の卓子の横木の煖爐に近い所に腰掛けてゐた。彼女は襤褸の着物を着て、素足のまゝ木靴をはき、そして爐の火の光りでテナルディエの娘等のために、毛糸の靴足袋を編んでゐた。一匹の小さな仔猫が椅子の下で戯れてゐた。二人の子供の鮮かな笑ひ興ずる聲が隣りの室から聞えてゐた。それはエポニーヌとアゼルマとであつた。

煖爐の隅には、一本の革の鞭が釘に下つてゐた。

時とすると、家の何處かに隱れてゐるごく小さな子供の泣聲が、酒場の騒ぎの間に聞えてきた。先年の冬テナルディエの上さんが設けた男の兒である。「どうしたんだらう、餘り寒いから子供が出來たのかも知れない。」などゝ上さんは云つてゐた。もう今では三歳餘りになつてゐた。彼女はその子供を育てゝはゐたが、少しも可愛がつてゐなかつた。小供の激しい泣聲が餘り煩くなると、亭主は云つた、「小供が泣いてる、行つてみてやれよ。」すると母親

はいつも答へた、「構ふもんですか！　私はくさ〳〵しちまふ。」そして顧みもせられない小供は、暗闇の中に泣き續けるのであつた。

二　二人に關する完稿

讀者は本書に於て、テナルディエ夫婦についてはその横顔しか見てゐない。が今や、二人のまはりを廻つて、前後左右から眺むべき時となつた。

亭主の方は丁度五十の坂を越したばかりであつた。女房の方は四十臺に近かつた。四十と云へば男の五十に當る。それで二人の間に年齢の不釣合ひはなかつたわけである。

脊が高く、金髪で、赫ら顔で、脂ぎつて、肥滿して、角張つて、ばかに大きく、そしてすばしこいテナルディエの上さんを、讀者は多分彼女が始めて舞臺に現はれて以來記憶してゐるであらう。前に云つておいた如く彼女は、髪に櫛を一杯さして市場を氣取つて歩くやうなかの野蠻な大女の仲間に屬してゐた。家の中のことは凡て一人でやつた、寢所を拵へ、室を片附け、洗濯をし、料理をし、何でも手當り次第にやつてのけた。そして唯一の下女としてはコゼットが居た、象に使はれてる一匹の小鼠みたいなコゼットが。彼女の聲の響きには家中のものが、窓硝子も道具も人間も皆震へ上つた。赤痣で凸凹の大きい顔は、網杓子に似てゐた。髪まで生えてゐた。全く市場の人夫の理想的な型で、たゞ女の着物を着てるだけであつた。その怒鳴る聲は素敵なものだつた。胡桃をも一擧に手で叩き破ると云つて自慢してゐた。小説を讀んだので時とすると、その食人鬼のやうな姿の下から變に洒落女の樣子が現はれて來ることがあつたが、それがなかつたら、女だと云つても誰も本當にしなかつたかも知れない。先づ娼婦を土方女に接木して出來たといふ位の所であつた。口を利いてるのをきくと憲兵かとも思はれ、酒を飲んでる所を見ると馬方かとも思はれ、コゼットをこき使つてる所を見ると鬼婆とも思はれるほどだつた。休息してる時には、齒が一本口から覗き出てゐた。

亭主のテナルディエの方は、脊の低い、痩せた、色の蒼い、角張つた、骨張つた、微弱な、見た所病氣らしいが實は頗る頑健な男であつた。彼のまやかしは先づ第一にさういふ身體つきから初まつてゐた。いつも用心深くにや〳〵してゐて、誰にでも丁寧であり、一文の錢をもくれてやらぬ乞食にさへ丁寧であつた。眼附は鼬のやうでゐて、顔附は文人のやうな風をしてゐた。ドリーユ師（譯者曰、よく變六などをやつてる男を歌つた詩人）の描いた人物などに似通つた所が多かつた。よく馬方などと一緒に酒を飲んで機嫌を取つてゐた。けれど誰も彼を醉はせることは出來なかつた。いつも大きな煙管で煙草をふかしてゐた。廣い上着をつけて、そ

の下に黒つぽい古い着物を着込んでゐた。文學に趣味があり、また唯物主義の味方である、と自稱してゐた。何でも自分の說を支へるために屢々口にする二三の名前があつた、それはヴォルテールとレーナルとパルニーと、それから妙ではあるがセント・オーガスティンとであつた。自分は「一の哲學」を持つてゐると斷言してゐた。が少くとも、非常なまやかし者で、尻學者（ケツガクシヤ）であつた。哲學者をもぢつて尻學者と稱し得らるゝ位の男はさらに在るものである。また讀者は記憶してゐるであらうが、彼は軍隊にはひつてゐたことがあると自稱してゐた。彼が頗る大袈裟に吹聽する所によると、彼はワーテルローに於て或る輕騎兵の第六とか第九とかの聯隊の軍曹であつて、プロシア驃騎兵の一中隊に一人で立ち向ひ、霰彈の雨下する中に、「重傷を負つた一將軍」を身を以て蔽ひ、その生命を救つたさうである。壁にかゝつてゐる眞紅な看板と、「ワーテルローの軍曹の旅屋」といふその地方の呼名とは、それから由來したのである。彼は自由主義者で、古典派で、またボナパルト黨であつた。彼はシャン・ダジールに名を連ねてゐた。（譯者曰、フランスの追放者歸休兵等によつて當時アメリカに建てられてゐた殖民地）村人の話しでは、彼は牧師になるために學問をしたさうであつた。

吾人の信ずる所によれば、彼はたゞ宿屋になるためにオランダで學問をしたゞけのことである。そして混合式の惡黨である彼は、その變通性によつて、フランドルでは或るリール生れのフランドル人となり、パリーではフランス人となり、ブラツセルではベルギー人となつて、うまく二つの國境を跨いで歩いてゐた。彼の所謂ワーテルローの武勇については、讀者の既に知る通りである。云ふまでもなく彼はそれを誇張して人に話してゐたのである。變轉、彷徨、冒險、それが彼の一生の重な出來事であつた。內心の分裂は生活の不統一を來す。そして實際、千八百十五年六月十八日の騷亂の時に當つてテナルディエは、かの酒保兼盜人の仲間にはひつてゐた。それら一群の者共は前に述べた如く、戰場をうろつき、或者には酒を賣りつけ、或者からは所持品を掠奪し、男も女も小供も皆一家族一つになつて、變なびつこの車にのり、本能的に勝利軍の方へくつつき、進擊する軍隊の後について彷徨するのである。さういふ戰爭に參加して、自稱する如くいくらか「錢を儲け」て、それから彼はモンフェルメイに來て飲食店を開いたのであつた。

その錢（ゼニ）なるものも、死骸を時いた畑から收穫時にうまく刈り取つた、金入れ、時計、金の指輪、銀の十字勳章、などにすぎなくて、大した金高にもならなかつた。そしてそれだけでは、飲食店になつたその從軍商人を長く支へることは出來なかつたのである。

テナルディエの樣子のうちには何となく謹嚴らしいものがあつて、きつぱりと口を利く時には軍人らしい趣きがあり、十字を切る時には神學校生徒らしい趣きがあつた。話が上手

で、學者と思はれることもあつた。けれども、小學校の先生は彼の「言葉尻の訛り」に氣がついた。彼は旅客への勘定書を書くことに妙を得てゐた。けれども、馴れた眼で見ると往々綴りの誤りが見出された。彼は、狡猾で、强慾で、なまけ者で、而も利口であつた。彼は下女共をも輕蔑しなかつた。そのために女房の方では下女を置かなくなつた。その大女は至つて嫉妬深かつた。彼女には、その痩せた黄色い小男が誰からでも惚れられさうに思へたのである。

テナルディエは特に瞞着者で落ち着いた男であつて、まあ穩かな方の惡黨であつた。けれどもそれは最も性質のよくないやつである、なぜなら僞善が交つてくるからである。

かと云つて、テナルディエとても女房のやうに怒氣を現はす場合がないわけではない。でもそれは極めて稀であつた。そしてさういふ時には、彼は人間全體を惡んでゐるやうであつた。自分のうちに憎惡の深い釜を持つてゐるやうであつた。絶えず復讐の念を懷いてゐて、自分に落ちかゝつて來たことは凡て眼の前のものゝ罪に歸し、生涯の不幸破産災難の凡てを正當な不平のやうにいつも誰にでもなげつけようとしてゐるかのやうだつた。凡ての鬱積した感情が心のうちに起つてきて、口と眼とから沸き立つて來るかのやうだつた。さういふ時彼は實に恐るべき樣子になるのであつた。さういふ彼の激怒に出逢つた人こそ災難である！

其他種々な性質の外にテナルディエはまた、注意深く、炯眼であり、平素は無口で時には非常な饒舌であり、そしていつも極めて聰明であつた。望遠鏡を覗くに馴れた船乘りのやうな眼附を持つてゐた。彼は一種の政略家であつた。

その飲食店に初めてやつて來た者は誰でも、テナルディエの上さんを見て、「あれが此の家の主人だな」と思ふのだつた。然しそれは間違つてゐた。否彼女は一家の主婦でさへもなかつた。主人でありまた主婦であるのは、亭主の方であつた。女房の方は仕事をした、そして亭主の方はその方針を定めた。彼は、一種の眼に見えない絶えざる磁石のやうな働きによつて凡てを指導してゐた。一言で、また時には一つの手眞似で、もう十分であつた、そして怪物のやうな女房はそれに從つた。女房はたゞ何故となく、亭主を特殊な主權的な者のやうに感じてゐた。彼女は自己一流の道德を持つてゐた。何かのことに「主人テナルディエ」と意見が合はぬことがあつても、否實際さういふことはあり得ないことではあつたがまあさう假定するとしても、彼女は決して何事に限らず人前で亭主をやりこめることをしなかつたであらう。屢々女がやりたがるかの過ち、嚴かな言葉で所謂「夫の尊嚴を汚す」といふやうな過ちを彼女は決して「人樣の前で」犯すことはしなかつたであらう。彼等の同意はその結果

悪事ばかりを産み出すものではあつたが、テナルディエの女房が自分の夫に服従してる趣きのうちには、一寸人を考へさせるやうなものがあつた。その大聲とでつぷりした肉體とを持つてる山のやうな女は、小柄なその專制君主の指一本の下に動いてゐた。それは實に、その低劣な可笑しな一面から覗いてみたる普遍的な偉大な事實、精神に對する物質の尊敬、であつた。或る醜悪も、永遠の美といふ深淵のうちにその存在の理由を持つてゐることがあるものである。テナルディエのうちには或る不可解なものがあつた。彼がその女房の上に絶對の力を有することは、其處から來つたことである。或る時は、彼女は彼を燃えてゐる蠟燭のやうにうち眺め、また或る時は、彼女は彼を恐ろしい爪のやうに感じた。

その女は實際恐るべき動物で、自分の子供をしか愛せず、自分の夫をしか恐れてゐなかつた。彼女はたゞ哺乳動物であるから母親になつたまでゞあつた。その上、彼女の母親なる情愛もたゞ自分の女の兒に對してだけで、何れ後に述べるであらうが、男の兒にまでは擴がらなかつた。それから亭主の方ではたゞ一つの考へしか持つてゐなかつた、即ち金持ちになるといふこと。

然し彼はその點には成功しなかつた。その偉大なる才能に足るだけの舞臺が無かつたのである。テナルディエはモンフェルメイに於て零落しつゝあつた、もし零落といふことが無財產にも可能であるならば。これがスイスかビレネー地方ででもあつたら、この無一文の男も百萬長者になつてゐたかも知れない。然し宿屋の亭主では一向うだつがあがらない。

固より玆では、宿屋の亭主といふ言葉は狹い意味に使つたのであつて、全般に亘つてのことではない。

この千八百二十三年には、テナルディエは督促の激しい千五百法ばかりの負債を負つてゐて、それに心を惱ましてゐた。

如何に運命に酷遇されやうともテナルディエは、最もよく、最も深く、また最も近代的に、或る一事を了解してゐた。一事といふのは即ち、野蠻人のうちでは一の德義であり、文明人のうちでは一の商品であるかの歡待といふことであつた。それからまた彼は、巧みな密獵者で、小銃の上手なことは評判になつてゐた。彼は一種の冷かな靜かな笑ひを持つてゐたが、その笑ひがまた特に危險なものであつた。

宿屋の主人としての彼の意見は、時として稻妻のやうに彼の口から迸り出た。彼は專門的な金言を持つてゐて、それを女房の頭にたゝき込んでゐた。或る日彼は低い聲で激しく彼女に云つた。「宿屋の主人たる者が爲すべきことは、次のやうなことだ。やつて來た者には誰にでも、食物と休息と燈火と火と汚い敷布と女中と蚤と世辭笑ひとを賣りつけることだ。通り

がかりの者を引留め、小さい財布ならそれをはたかせ、大きい財布ならうまく輕くしてやり、一家族の旅客なら丁寧に泊めてやり、男から摑み取り、女からむしり取り、子供から剝ぎ取ることだ。開けた窓、閉めた窓、煖爐の隅、肱掛椅子、普通の椅子、床几、腰掛、羽蒲團、毛蒲團、藁蒲團、何にでもきまつた金を掛けておくことだ。鏡に映つた影でも、それがどれだけ鏡をすりへらすかを見ておいて、ちやんと金を掛けておくことだ。その外どんな下らないものにも、客に金を拂はせ、客の犬が食ふ蠅の代までも出させることだ！」

此の夫婦は、實に狡猾と熱中とが一緒に結婚したやうなものだつた。忌むべき恐ろしい一對であつた。

亭主の方が種々計劃をめぐらしてる間に、女房の方では、其處に居ない客のことなんかは考へず、昨日のことも明日のことも氣にかけず、たゞ現在のことにばかりに熱中して日を暮してゐた。

さういふのが二人の人物であつた。コゼットは彼等の間に在つて、二重の壓迫を受け、臼に挽かれると同時に釘拔で狹まれてる者のやうな有樣であつた。夫婦の者は各自異つたやり方を持つてゐた。コゼットは打たれた、それは女房の方のであつた。コゼットは冬も跣足で歩いた、それは亭主の方のであつた。

コゼットは、梯子段を上り下りし、洗濯をし、拭き掃除をし、馳けまはり、飛びまはり、息を切らし、重い荷物を動かし、そして虛弱な身體にも拘らず荒い仕事をしてゐた。少しの慈悲をもかけられなかつた。殘忍な主婦と非道な主人とであつた。テナルディエの飲食店は宛も蜘蛛の巢のやうなものであつて、コゼットはそれに絡まれて震へてゐた。理想的な迫害は、實にその奸惡なる家庭によつて實現せられてゐた。宛も蜘蛛に仕へてゐる蠅のやうな有樣であつた。

憐れな娘は、何事をも忍んで默つてゐた。

世の少女にして未だ小さく裸のまゝなる人生の曙より、斯くの如く大人のうちに置かるゝ時、神の膝を離れたるばかりの彼女等の心のうちには、凡そ如何なることが起るであらうか？

三　人には酒を要し馬には水を要す

四人の新らしい旅客が到着してゐた。

コゼットは悲しげに物を考へてゐた。

彼女はまだ八歳にしかなつてゐなかつたが、種々な苦しいめに逢つたので、宛も年取つた

女のやうな痛ましい様子で考へに耽つてゐたのである。

彼女の眼瞼は、テナルディエの上さんに打たれたゝめに黒くなつてゐた。そのために上さんは時々こんなことを云つてゐた、「眼の上に汚點なんか拵へて、何て醜い兒だらう！」

コゼットは考へてゐた、もう夜になつてる、眞暗な夜になつてる、それにふいにやつて來たお客の室の水差しや壜には間に合せに水を入れなければならないし、水槽にはもう水が無くなつてしまつてる。

たゞ少し彼女が安堵したことは、テナルディエの家では誰も餘り水を飲まないことであつた。喉の渴いた人達が居ないといふわけではなかつたか、その渴きは水甕よりも寧ろ好んで酒瓶をほしがるやうな類ひのものであつた。酒杯の並んでる中で一杯の水を求める者は、皆の人から野蠻人と見做される恐れがあつたのである。けれどもコゼットが身を震はすやうな時もあつた。テナルディエの上さんは竈の上に煮立つてゐるソップ鍋の蓋を取つてみ、それからコップを手にして、急いで水槽の所へ行つた。彼女はその差口を廻した。娘は頭をもたげて、彼女の様子をぢつと見守つてゐた。少しの水がたら〳〵と差口から流れて、コップに半分ばかりたまつた。「おや、」と彼女は云つた、「もう水がない！」それから彼女は一寸口を噤んだ。娘は息もつかなかつた。

「いゝさ、」と上さんは半分ばかりになつたコップを見ながら云つた、「これで間に合ふだらう。」

でコゼットはまた仕事にかゝつた。けれども十五六分ばかりの間は、心臟が大きな毬のやうになつて胸の中に踊つてるやうな氣がした。

さういふ風にして過ぎ去つてゆく時間を數へながら、彼女は早く明日の朝になればいゝがと思つてゐた。

酒を飲んでゐた一人の男は、時々表を眺めては大きい聲を出した、「釜の中みてえに眞暗だ！」或はまた、「今頃提灯なしに外を歩けるなあ猫位のもんだ！」それを聞いてコゼットは震へた。

突然、その宿に泊つてゐた行商人の一人がはひつて來た、そして荒々しい聲で云つた。

「私の馬には水をくれなかつたんだな。」

「やつてありますとも。」とテナルディエの上さんは云つた。

「いやお上さん、やつてないんだ。」と商人はまた云つた。

コゼットは卓子の下から出て來た。

「いえやりましたのよ！」と彼女は云つた。「馬は飲みましたよ。桶一杯みんな飲みました

よ。どの私が水を持つていつて、馬に口を利きながらやつたのですもの。」

それは本當ではなかつた。コゼットは嘘を云つてゐた。

「この女郎、拳ぐれえなちつぽけなくせに、山のやうな大きな嘘をつきやがる。」と商人は叫んだ。「馬は水を飲んでゐねえんだ、鼻つ垂らしめ！　水を飲んでゐねえ時には息を吹く癖があるんだ。俺はよく知つてるんだ。」

コゼットは云ひ張つた、そして心配のために聲を嗄ちして聞きとれない位の聲でつけ加へた。

「そしてまた大變よく飲んだのですよ。」

「もういゝや、」と商人は怒つて云つた、「愚圖々々云ふない。俺の馬に水をやるんだ。早くしちまへ！」

コゼットはまた卓子の下にはひり込んだ。

「ほんとにさうですとも。」とテナルディエの上さんは云つた。「馬に水をやつてないなら、やらなければいけません。」

それから彼女はまはりを見廻した。

「そしてまた、あの畜生め何處へ行つた？」

彼女は身を屈めて、卓子の向うの端に殆んど酒を飲んでる人達の足の下に蹲つてゐるコゼットを見付け出した。

「出て來ないか。」と上さんは叫んだ。

コゼットは隱れてゐたその穴から出て來た。上さんは云つた。

「この祿でなしめ、馬に水をおやりつたら。」

「でもお上さん、」とコゼットは弱々しく云つた、「水がありませんもの。」

上さんは表の戸を押し開いた。

「では行つて汲んでくるさ！」

コゼットは頭を垂れた、そして煖爐の隅に行つて空の桶を取り上げた。

その桶は彼女の身體よりも大きく、中に坐つても樂なくらゐであつた。

上さんは竈の所へ戻り、ソップ鍋の中のものを木の匙でしやくつて、味をみながら、ぶつぶつ云つてゐた。

「水は泉に行けばいくらでもある。あんな性の惡い兒つたらありはしない。あゝこの球葱はよせばよかつた。」

それから彼女は引出しの中をかき廻した。其處には貨幣だの胡椒だの大蒜だのがはひつて

ゐた。

「ちよいと、おたふくさん、」と彼女はつけ加へた「歸りに麵麭屋で大きい麵麭を一つ買つておいで。そら、十五錢だよ。」

コゼットは胸掛のはじに小さなポケットを一つ持つてゐた。彼女は物も言はずにその銀貨を取つて、ポケットの中に入れた。

それから彼女は、手に桶を下げ、開いてゐる戸を前にして、ぢつと立つてゐた。誰か助けに來てくれる人を待つてるがやうであつた。

「行つといでつたらー」とテナルディエの上さんは叫んだ。

コゼットは出て行つた。戸はまた閉された。

四　人形の登場

露店の列が食堂の所からテナルディエの宿屋の所まで擴つてゐたことは、讀者の記憶する所であらう。町の人達がやがて夜中の彌撒のために其處を通るので、それらの露店は、紙で拵へた漏斗形の臺の中に點火された蠟燭の光りで明るく輝らされてゐた、そして、その時テナルディエの家の食卓についてゐたモンフェルメイの小學校の先生の云つた如く、「幻燈のやうな有樣」を呈してゐた。その代りに、空には一點の星影も見えなかつた。

それらの露店の一番端のものは、丁度テナルディエの家の人口と向ひ合ひに建てられてゐて、金ぴかのものや硝子のものや鍼力製の綺麗なものなどで輝いてゐる玩具屋であつた。その玩具棚の一番前の棚には、白い布の臺の上に高さ二尺もあらうといふ大きな人形が一つ据ゑられてゐた。その人形は薔薇色の紗の着物をき、頭には金色の麥の穗をつけ、本物の毛髮がついてゐて、眼には琺瑯が入れてあつた。通りがゝりの十歳以下の小供は、その珍らしい人形に吃驚して終日その前に引きつけられてゐたが、それを小供に買つてやるだけ金を持つた時間もそれに見とれてゐた、そしてまた實際コゼットまでがそつとそれを覗きに行つた位であつた。

桶を手に持つて外に出た時コゼットは、非常に悲しくまたがつかりしてゐたけれど、それでもその素敵な人形の方へ眼を擧げないではをれなかつた。彼女はその人形を自ら奧樣と呼んでゐた。憐れな彼女はその前に釘付にせられたやうに立ち止つた。彼女はその時までそれをまぢかに見たことがなかつたのである。彼女には、その店全體が或る宮殿のやうに思へた。そして人形は、もう一人の人形ではなくて幻影であつた。それは、喜悅と光耀と富貴と

幸福とであつて、陰惨な冷たい辛苦のうちに深く閉されてゐたその不幸なる少女にとつては、夢のやうな光彩のうちに浮んで見えた。コゼットは、子供らしい無邪氣なまた悲しい智惠を搾つて、自分とその人形とを距てゝゐる深淵を測つてみた。女王かまた少くとも王女でなければあのやうな「もの」は手にすることが出來まいと思つた。彼女はその薔薇色の綺麗な着物やその滑かな美しい髪毛を眺めた、そして考へた、「あの人形はどんなにか仕合せだらう！」彼女はその夢のやうな露店から眼を離すことが出來なかつた。そして見れば見るほどそれに心を奪はれた。宛も樂園を見るやうな氣がした。その大きい人形の後ろには幾つも他の人形があつて、それが妖精や精靈のやうに思はれた。店の奥を往き來してゐる商人は、何だか天の父であるかのやうに思はれた。

そして心を奪はれてるうちに、彼女は凡てを忘れ、云ひつかつた用事までも忘れてしまつてゐた。と突然、テナルディエの上さんの荒々しい聲が彼女を現實の世界に呼び覺した。「おや、馬鹿娘、まだ行かなかつたのか。ぢつとしておいで、今にひどい目に逢はしてやる。其處で何をしてたんだ。このお化め、おゆきつたら！」

上さんはちらと外を覗いて、ぼんやり心を奪はれて立つてるコゼットの姿を見附けたのであつた。

コゼットは桶を持つて、出來るだけ大急ぎで逃げ出した。

五　小女たゞ一人

テナルディエの宿屋は村のうちで會堂に近い方の森の中の泉に水を汲みに行かなければならなかつた。

彼女はもう他の店は一軒も覗いて見なかつた。そしてブーランゼーの小路から會堂の近くまで行く間は、露店の燈火が道を輝らしてゐたが、やがて一番終りの店の燈火も見えなくなつてしまつた。憐れな娘は暗闇のうちに在つて、その中をつき進んだ。或る一種の恐怖に囚へられてゐたので、彼女は歩きながら桶の柄を力限り動かしてゐた。そしてそれから發する音が彼女の道連れであつた。

進めば進むほど闇は益々濃くなつていつた。途には一人の人も居なかつた。がたゞ一人の女に出逢つた。その女は彼女の通りすぎるのを見てふり返り、立ち止つて口の中で呟いた。

「一體あの子は何處へ行くんだらう？狼に化けた魔法使ひの兒のやうだが。」そのうちに女はそれがコゼットであることに氣がついた。

「まあ、」と女は云つた、「雲雀娘だつたのか！」

斯くの如くしてコゼットはシェルの方に面したモンフェルメイの村外れの曲りくねつた人氣の無い小路の入り亂れた中を通つて行つた。そして道の兩側に人家やまたはたゞ壁だけでもある間は、可なり元氣に進んでいつた。時々彼女は、鎧戸の隙間から蠟燭の光りが洩れるのを見た。それは光明であり生命であつて、其處には人が居たのである。彼女はそれに安堵することが出來た。けれども、先へ行くに從つて彼女の歩みも殆んど機械的に遲くなつていつた。最後の人家の角を通り過ぎた時、コゼットは立ち止つた。最後の露店の所から其處まで行くのは、既に困難なことであつたが、今やその最後の人家から先へ行くことは、殆んど不可能のやうであつた。彼女は桶を地面に置き、髪の中に手を差入れて、靜かに頭をかき初めた。それは怖ぢ恐れて決斷に迷つてゐる子供によく見る態度である。もはや其處はモンフェルメイの村ではなく、野の中であつた。暗い寂しい擴がりが彼女の前に在つた。彼女はその闇黑を絶望の眼で見やつた。其處には一人の人影もなく、獸の姿があり、また恐らく化物の姿もあつた。彼女はぢつと透し見た。草の中を歩き廻る獸の足音が聞えた。また樹木の間をうろついてる化物の姿がはつきり見えた。その時彼女はまた桶の柄を手に取り上げた。恐怖は彼女を大膽になしたのである。「構やしない！」と彼女は云つた、「水は無かつたと云つてやらう。」そして彼女は意を決してまたモンフェルメイの村の中に戻つて行つた。

百歩ばかり引き返すと、彼女はまた立ち止つて、頭をかき初めた。此度はテナルディエの上さんの姿が彼女の頭に浮んできた。その恐ろしい姿は、山犬のやうな口をして、眼は怒りに燃え立つてゐた。娘は自分の前と後ろとを悲しい眼附で見やつた。どうしたらいゝだらう？　自分はどうなるだらう？　どちらへ行つたものだらう？　前にはテナルディエの上さんの姿があり、後ろには夜と森とのいろんな化物が居た。が遂に彼女はテナルディエの上さんの姿の前から後退りをした。彼女はまた泉へ行く道を取つて、走り出した。走りながらモンフェルメイの村を出で、走りながら森の中にはひり、もう何にも眺めず、何にも耳を貸さなかつた。息が切れた時漸く走るのを止めたが、なほ續けて進んだ。彼女は無我夢中でたゞ前へと進んでいつた。

走つてゐるうちに彼女は、泣きたくなつてゐた。

森の夜の震へが全く彼女をとり圍んでしまつた。彼女はもう何にも考へなかつた、何にも見なかつた。廣漠たる夜がその少女に顏を合してゐた。一方は一切の影、一方は渺たる一原子にすぎなかつた。

森の縁から泉までは僅か七八分の距離であつた。コゼットは屢々晝間通つたことがあるので、その道をよく知つてゐた。で不思議にも道に迷ひはしなかつた。本能の一部が殘つてゐ

て、彼女を漠然と導いたのである。その間彼女は、右にも左にも眼を向けなかつた、木の枝や茂みの中に何かゞ出て來はしないかと恐れたので。そして彼女は泉の所へ達した。

それは赤土交りの地面に水で掘られた深さ二尺ばかりの天然の狹い水溜りであつた。まはりには苔が生え、アンリ四世の襟飾りと呼ばるゝ長い縞のある草が茂り、また幾つかの大きな石が鋪いてあつた。一條の水が、靜かなさゝやかな音を立てゝ其處から流れ出てゐた。

コゼットは息をつく間も待たなかつた。眞暗であつたけれども、彼女はその泉には來馴れてゐたのである。いつも身の支へにする泉の上にさし出た若い樫の木を、彼女は暗闇のうちに左手で探つて、その一本の枝を見つけ、それにつかまつて身を屈め、そして桶を水の中につけた。その時彼女は非常に氣が昂(たかぶ)つてゐて、平素の三倍も力が出てゐた。然るにさうして身を屈めてゐるうちに、胸掛のポケットの中のものを泉の中に落したのに氣が附かなかつた。十五錢銀貨は水の中に落ちた。コゼットはそれを見もしなければ、その落ちる音をも耳にしなかつた。彼女は殆んど一杯になつた桶を引き上げて、それを草の上に置いた。

それをしてしまふと、彼女はすつかり疲れ切つたのを感じた。すぐにも立ち去りたかつたけれど、桶に水を汲むことに餘り骨折つたので、もう一歩も踏み出す力もなかつた。仕方なしに其處に坐つてしまつた。草の上に身を落して、そのまゝぢつと蹲つてしまつた。

彼女は眼を閉ぢた。それからまた眼を開いた。なぜか自分でも分らなかつたが、他に仕樣もなかつたのである。

彼女の側には、桶の中に搖られてゐる水が輪を描いて、それが鍼力の蛇のやうに見えてゐた。

頭の上には、煙の髮のやうな廣い黑雲が空を蔽うてゐた。陰影の悲慘な面が漠然と娘の上に蔽ひ被さつてくるがやうであつた。

木星は彼方の空に沈みゆかうとしてゐた。

娘は途方にくれた眼をあげて、名も知らぬその大きな星を眺め、そして恐れを懷いた。實際その遊星は、その時地平線のごく近くにあつて、靉いた深い霧を透してみると、恐ろしい赤い色に見えてゐた。そしてまた變に赤く染められた霧は、その星を一層大きく見せてゐた。丁度眞赤な傷口のやうな樣であつた。

寒い風が平野の上を渡つてきた。森は眞闇で木の葉の戰ぎもなく、夏のやうな漠然たる爽かな明るみもなかつた。大きな枝が恐ろしくつき出てゐた。痩せた變な形の藪が木立の薄い所で音を立てゝゐた。高い叢は刺すがやうな北風の下に靡いてゐた。蕁麻(いらくさ)はよぢれ合つて、餌食を求めてゐる爪を具へた長い腕のやうであつた。一握りの枯れた雜草が風に吹かれて逃

にわきを飛んでいつたが、何か逐つてくるものゝ前を恐れて逃げてゆくがやうであつた。何れを見ても、たゞ廣漠たる痛ましい有様であつた。

闇黒は人の心を惑はすものである。人には光りが必要である。誰でも畳に相反するものゝ中に身を投ずる者は、心をしめつけられる思ひがする。眼に闇黒を見る時、精神は惑はしを見る。日蝕のうち、夜のうち、文目を分たぬ暗がりのうちには、最も強い人々にとつてさへ不安がある。夜たゞ一人森の中を歩いて戰慄しない者は無い。影と樹木、二つの恐ろしい密層。現實の幻がその朧ろなる深みのうちに現はれてくる。信じ得べからざるものが、スペクトラムの如き明かさを以て數歩前の所に浮出してくる。眠れる花の惡夢の如き或る漠然たる捕捉すべからざるものが、空間のうちに或は自分の頭のうちに浮んでくるのが見える。地平線には恐ろしい姿のものが居る。眞黒な大きい空洞の氣が胸にはひつてくる。自分の後ろが恐ろしくなつてふり返りたくなる。夜の空虛、荒々しい姿になつた事物、進むに從つて消散する默々たる物の横顔、髪をふり亂したやうな眞暗なもの、苛ら立つた叢、蒼白い水溜り、死滅のうちに漂ふやうな陰鬱、默々たる無限の墓場、實際に居るかも知れない見も知らぬ變化、傾いてゐる不思議な木の枝、恐ろしい樹木の胴體、震へてゐる一掴みの長い雜草、さういふものに對しては誰も身を護る術が無い。如何に大膽なる者も、身を震はさぬ者はなく、恐ろしいものゝ身に迫つてゐるのを覺えない者はない。宛も自分の心が影と融け合つたかのやうに、人は或る嫌惡すべきものを感ずる。そしてかく心の底まで闇黒に侵されることは、子供にとつては特に名狀すべからざる陰慘の氣を與ふるものである。

森は天の默示である。そして小さな靈魂の翼の羽ばたきも、その奇怪な森の圓天井の下には苦惱の音を發する。

何を感じてゐるのかコゼットは自分でも分らなかつたが、たゞ自分は廣大な闇黒から掴まれてゐるやうな氣がした。彼女を囚へてゐたものはもはや單に恐怖のみではなかつた。恐怖よりもなほ恐ろしい何かであつた。彼女は震へ上つた。彼女を心の底まで凍らしたその戰慄は如何に異常なものであつたか、それを云ひ現はすには言葉も到底及び難い。彼女の眼は異様の様に變つてゐた。彼女は、翌日も屹度また同じ頃に其處に戻つて來ないではおれないだらうといふやうな氣がしてゐた。

その時一種の本能から、その譯の分らない然し恐ろしい不思議な狀態から脱れるために、彼女は大きい聲で、一、二、三、四、と十まで數へ初めた。そしてそれが終るとまた初めからくり返した。そのために彼女は漸く、周圍の事物の本當の有様を見ることが出來た。水を汲む時に濡らした手に寒さを感じた。彼女は立ち上つた。とまた恐ろしくなつてきた。抑ゆ

ることの出來ない自然の恐怖の念がまた襲つてきた。彼女はもう只一つの考へきり持たなかつた。逃げ出すこと。森を通りぬけ、野を横ぎり、人家のある所まで、窓のある所まで、火のともつた蠟燭のある所まで、足に任して逃げのびること。前に在る桶が彼女の眼にはひつた。彼女は非常にテナルディエの上さんを恐がつてゐたので、水の桶をすてゝ逃げ出すことはなし得なかつた。彼女は兩手に桶の柄を掴んだ。そして漸くのことでそれを持ち上げた。

そのやうにして彼女は十歩餘り進んだが、桶は水が一杯で重かつたので、それをまた地に下さなければならなかつた。彼女は一寸息をついた。それからまた桶を持ち上げて、再び歩き出したが、此度は前よりも少し長く歩くことが出來た。けれどもなほやはり立ち止らなければならなかつた。暫く休んだ後にまた歩き出した。前の方に身を屈めて、頭を垂れて、老人のやうにして歩いた。桶の重さは、彼女の痩せた腕を引つぱり硬ばらした。鐵の柄は、彼女の小さな濡れた手を麻痺させ凍えさしてしまつた。時々彼女は立ち止らなければならなかつた。そして立ち止る度毎に、桶からこぼれる冷たい水は彼女の露はな脛の上に流れた。そしてそれも、森の奥で、夜中に、冬に、人の眼を遠く離れた所に於てであつた。そして彼女は僅か八歳の子供であつた。その悲しい有樣を眺めてゐたのは、その時たゞ神のみであつた。

そしてまた屹度彼女の母も、嗚呼！

なぜかならば、墳墓の中で死者の眼を開かしむるやうなことも、世にはあるものである。

彼女は一種の痛ましい嗄れた音を立てゝ息をしてゐた。歔欷がこみ上げてきて喉がつまりさうであつた。けれども彼女は泣くこともなし得なかつた。それほど彼女は、遠くに居てもテナルディエの上さんを恐がつてゐた。テナルディエの上さんがいつも眼の前に居るやうに考へるのは、彼女の習慣となつてゐた。

彼女はそんな風で道をはかどることが出來なかつた。彼女は少しづゝ進んでゐた。立ち止る時間を少くし、その間々を出來るだけ長く歩かうと、いくらつとめても駄目だつた。こんな風ではモンフェルメイまで戻るには一時間以上もかゝるだらう、そしてテナルディエの上さんに打たれるだらう。彼女はさう考へては心を痛めた、そしてその心痛は、夜たゞ一人で森の中に居るといふ恐怖の情に交つてゐた。もうすつかり疲れ切つてゐたのに、まだ森から出ても居なかつた。そしてかねて見識つてゐた古い栗の木の側まで來た時、よく休むために最後に一度少し長く立ち止つた。それから全力をよび起して、桶を取り、元氣よく歩き出したけれども絶望的な憐れな少女は、思はず聲を立てないではをれなかつた、「おう神樣！　私の神樣！」

その時、彼女は俄に桶が少しも重くないのを感じた。非常に大きいやうに思はれた一つの手が、桶の柄を掴んで、勢よくそれを持ち上げたのであつた。彼女は頭を上げた。眞直につき立つた黑い大きい姿が、暗闇の中を彼女に並んで歩いてゐた。それは彼女の後からやつて來た一人の男で、その近づいて來る足音を彼女は少しも耳にしなかつたのである。男は一言も口を利かないで、彼女の持つてゐる桶の柄に手をかけてゐた。

人生の如何なる出來事にも相應ずる本能もある。少女は別に恐怖も感じなかつた。

六　ブーラトリュエルの烱眼を證するもの

千八百二十三年のその同じクリスマスの日の午後、パリーのオピタル通りの最も寂しい所を、可なり長い間一人の男がうろついてゐた。その男は住宅を探してゐるやうな樣子であつて、町外れのサン・マルソーのその荒廢した片隅にある最も質素な人家の前に好んで足を止めるやうな風であつた。

果してその男が、その寂しい町に部屋を一つ借りたことは、後に述べることにしよう。

その男は、服裝から見ても人柄から見ても、高等乞食とでも稱し得るやうな型を具へてゐた。卽ち、非常な貧困と共にまた非常な清潔さを。さういふ一致は餘り見られないものであつて、極めて貧しい者に對する敬意と極めて立派な者に對する敬意と、二重の敬意を心あ

る人々には起させるものである。彼は、ごく古いがよくブラシをかけた圓い帽子をかぶり、粗末な黃色い布地のすつかり糸目まで擦り切れてしまつたフロック型の上衣をつけてゐた。その當時黃色の服はちつとも變ではなかつたのである。ごく古い型のポケットがついたチョッキ、膝の所は灰色になつてる黑いズボン、黑い毛糸の靴下、眞鍮の留金がついた厚革の短靴。何だか外國移住から歸つて來た良家の古い家庭教師と云つた姿である。その眞白な髮や、皺よつた額や、蒼白い脣や、生の疲れと倦怠とが露はれてゐる顏附などを見ると、もう六十歳のずつと上であるやうに思はれた。けれども、ゆつくりではあるがしつかりした歩き方や、その一々の動作に現はれてゐる特別な元氣などを見ると、漸く五十歳位かとも思はれた。顏の皺はうまくついてゐて、注意して見る者にはいゝ感じを與へるやうであつた。脣の合さり目には妙な襞が出來てゐて、嚴酷さうであつたが、實は謙讓であつた。その眼附の奥には、何とも云へない悲しげな清澄さがあつた。左手にはハンカチで括つた小さな包みを持ち、右手には、何處かの籠からでも切り取つて來たやうな杖らしいものをついてゐた。その杖はいくらか念入りに拵へられてゐて、餘り不恰好なほどではなかつた。節の所はうまく削られてゐて、珊瑚まがひの赤蠟の杖頭がついてゐた。一本の棒にすぎなかつたが、一寸見

た所立派なステッキのやうであつた。

その通りは人通りの少い處で、特に冬はさうであつた。けれどもその男は、別に目立つほどでもないが、通行人を求めるよりも寧ろ避けてゐるやうであつた。

その頃國王ルイ十八世は、殆んど毎日のやうにシュアジー・ル・ロアに行つてゐた。其處は彼の好きな遊歩地の一つであつた。大抵いつも二時頃には、國王の馬車と騎馬の行列とが大厩けでオピタル通りを通るのが見られた。

それは、その邊に住む貧しい人々にとつては懐中時計や柱時計の代用をしてゐた。彼等は云つた、「もう二時になる、チュイルリー宮殿へ御歸りだから。」

そして馳せつけて來る者もあれば、其處に立ち並ぶ者もあつた。なぜなら、國王の通御は常に人を騒がせるものである。その上、ルイ十八世の出入は、パリーの町々に或る影響を與へてゐた。その通過は速かではあつたが、然し堂々たるものであつた。不具の王は馬の大厩けを好んでゐた。自ら歩くことは出來なかつたが、走ることが好きであつた。跛者なる彼は、好んで馬を急速に驅けさした。拔剣のうちに護られて、落ち着いた厳めしい顔をして通つていつた。戸口には大きい百合の枝が畫かれすつかり金箔を着せられた彼の大きな四輪箱馬車は、騒がしい音を立てゝ走つた。ちらと見るまにもうそれは通りすぎてゐた。馬車の奥の右の隅に、白い繻子の綴ぢた褥の上に、しつかりした大きな赤ら顔、王鳥式に新らしく鉛白をぬつた額、高慢な厳つい鋭い眼、文人のやうな微笑、市民服の上にゆらめいてゐる絢總の二つの大きな肩章、それからトアゾン・ドール勳章とサン・ルイ勳章とレジオン・ドンヌール勳章とサン・テスプリ騎士團の銀章、大きな腹、青い大きな勳章の紐、さういふものが見られた。それが王であつた。パリーの外では、白い鳥の羽の帽子を、イギリス風の大きなゲートルを卷いた膝頭にのせてゐたが、市内にまたはひつてくると、その帽子を頭に被り、挨拶もあまりしなかつた。彼は冷然と人民を眺め、人民の方でも冷然と彼を見上げた。彼が初めてサン・マルソーの方面に姿を見せた時、彼の成功と云つてはたゞその郊外の一人の男が次の言葉を仲間に云つたことばかりであつた。「あの大きな男が此度の政府だよ。」

所でその國王が大抵毎日缺かさず同じ時刻に通ることは、今ではオピタル通りの日常の事件となつてゐた。

黄色いフロックを着てうろついてるかの男は、明かにその邊の者ではなく、また多分パリーの者でもなかつたらう。なぜなら、彼はその國王通過のことを少しも知つてゐなかつたから。二時に、銀モールをつけた近衛騎兵の一隊に取り卷かれた王の馬車が、サルペートリエール救濟院の角を曲つてその通りに現はれた時、彼は驚いたやうで、殆んど恐れをさへ懐い

たやうに見えた。丁度その横通りには彼の外誰も居なかつた。彼は急いで或る家壁の角に身を避けた。それでも彼はアヴレ公の眼を逃れることが出來なかつた。アヴレ公はその日護衛の騎兵の隊長として、王と向ひ合つて馬車の中に坐つてゐた。彼は陛下に云つた、「向ふにあまり人相のよくない男が居ます。」國王の通路を警戒してゐた警官等も同じくその男を認めた。そのうちの一人は彼を追跡せよとの命令を受けた。然し男は、その郊外の寂しい小路のうちに身を隱した。その上、日光も薄らぎかけてゐたので、警官は彼の姿を見失つてしまつた。そのことは、國務大臣で警視總監のアングレー伯爵へその日の夕方差出された報告のうちに書いてあつた。

黄色いフロックの男は、警官をまいてしまつた時、足を早めたが、それでももう追跡せられてゐないことを確めるために度々ふり返つて眺めた。四時十五分に、即ち全く日の淺した時に、彼はポルト・サン・マルタン座の前を通つた。その日の芝居は二人の囚人といふのであつた。劇場の反照燈に輝らされたその看板が彼の眼を引いた。彼は早く歩いてゐたにも拘らず、立ち止つてそれを讀んだ。それからぢきに彼はプランシェットの袋町にゆき、プラ・デタンといふ家にはひつて行つた。當時其處にランニー行きの馬車の立場があつたのである。その馬車は四時半に出發することになつてゐた。馬はもうつけられて居り、旅客等は馭者に呼ばれて、馬車の高い鐵の梯子を大急ぎで登つてゐた。

男は尋ねた。

「席がありますか。」

「一つあります。私の側の馭者臺の所ですが。」と馭者は云つた。

「それを願ひませう。」

「お乘りなさい。」

けれども出かける前に、馭者はその客の賤しい服裝と小さな荷物とをぢろりと見やつて、金を先に拂はした。

「ランニーまで行くのですか。」と馭者は尋ねた。

「さうです。」と男は答へた。

彼はランニーまでの馬車賃を拂つた。

一同は出發した。市門を出た時、馭者は種々話しをしようとしたが、男は一二言の短い答を返すのみであつた。馭者は仕方なしに口笛吹いたり、馬を叱り飛したりした。

馭者は外套に身を包んだ。非常に寒かつた。けれども男はそれを氣にもしてゐないやうであつた。そのやうにしてグールネーを過ぎ、ヌイリー・スュール・マルヌを過ぎた。

晩の六時頃にはシェルに着いた。馭者は馬を休ませるために、國立修道院の古い建物のうちにあつた驛宿の前で馬車を止めた。

「私は此處で下りる。」と男は云つた。

彼は包みと杖とを取り、馬車から飛び下りた。

間もなく彼の姿は見えなくなつた。

彼は宿屋にはひつたのではなかつた。

四五分後に馬車がまたランニーに向つて進み出した時、彼の姿はシェルの大通りのうちにも見えなかつた。

馭者は馬車の中の乘客等の方へふり返つて云つた。

「今の男はこの邊の者ではありませんよ。私は見たこともないから。一錢の金も無ささうだつたが、金のことなんかは考へてもゐないと見えます。ランニーまでの金を拂つておきながらシェルまで來て下りてしまつたのです。もうすつかり夜で、家は皆閉つてゐるのに、あの男は宿屋にはひりもせず、また姿も見えません。地の中へでももぐり込んだのでせう。」

が男は地の中へもぐり込んだのではなかつた。彼は闇の中を急いでシェルの大通りを大股に歩いてゆき、それから會堂の所まで行く前に左へ曲つて、モンフェルメイへ通ずる村道を進んで行つた。宛もその邊の地理には明るく、また前にも來たことがあるものゝやうであつた。

彼は足早にその村道を歩いて行つた。ガンニーからランニーへ行く古い並木道がそれと交叉してゐる點まで達した時、數人の通行人がやつて來る足音が聞えた。彼はすばやく溝の中に身を伏して、その人達が遠ざかるのを待つた。が固よりそんな用心は殆んど無用なことであつた。前に述べておいた通り、それは眞暗な十二月の夜だつたのである。空には辛うじて二三の星影が見えるきりだつた。

丁度その邊から丘への上り道になつてゐた。男はモンフェルメイへゆく道へははひらなかつた。彼は右へ曲つて、野を横ぎり、大股に森の中へはひつて行つた。

森の中まで來ると、彼は足をゆるめて、一歩々々進みながら樹木を一々注意深く眺めはじめた。宛もたゞ彼一人が知つてゐる祕密な道を探してそれを辿つてゐるかのやうであつた。時としては、道に迷つたやうで心を決しかねて立ち止ることもあつた。遂に彼は漸々に道を探つて、或るうち開けた所に達した。其處には仄白い大きな石がつみ重ねてあつた。彼はよくそれらの石の方へ進んでゆき、宛も檢閲するかの如くに夜の靄を透して注意深くそれらを調べた。植物の疣である瘤が一杯出來てる一本の大木が、その石の山から數歩の所に在つ

た。男はその木の所へ行つて、その幹の皮を手でなで廻した、丁度その疣を一々觸つてみてそれを數へようとしてるがやうであつた。

それは秦皮の木であつたが、それと向合つて一本の栗の木が立つてゐた。皮を剝がれたために弱つてゐて、繃帶として亞鉛の板が打ち附けてあつた。男は爪先で伸び上つて、その亞鉛の板に觸つてみた。

それから彼は、その木と石の山との間の地面を暫く足で踏んでみてゐた。宛も土地が新らしく掘り返されはしなかつたかを確かめてみてるやうであつた。

それがすむと、彼は方向を定めて森の中を歩き出した。

コゼットが出逢つたのは卽ちその男であつた。

茂みの中をモンフェルメイの方へ進んでゆくと、彼は小さな人影を認めた。その人影は溜息をつきながら動いてゐて、或る荷物を地面に置いてはまたそれを取り上げ、そしてまた進み初めるのであつた。近寄つてみると、大きな水桶を持つたごく小さな子供であることが分つた。すると男は子供の所へ行つて、無言のまゝ桶の柄を持つてやつたのである。

七　コゼット闇中に未知の人と並ぶ

前に云つた通りコゼットは恐がらなかつた。

男は彼女に言葉をかけた。重々しい低音であつた。

「これはお前さんには餘り重すぎるやうだね。」

コゼットは頭を擧げて、そして答へた。

「えゝ。」

「かしてごらんな、」と男は云つた。「私が持つていつて上げよう。」

コゼットは桶を離した。男は彼女と並んで歩き出した。

「なるほど隨分重い。」と彼は口の中で云つた。それからまたつけ加へた。

「お前さんは幾歳になる？」

「八歳です。」

「そしてこんなものを持つて遠くから來たのかね。」

「森の中に在る泉の所から來ました。」

「そしてこれから行かうとする所は遠いのかね。」

「こゝから十五分ばかりかゝる所です。」

男は一寸口を噤んだが、それから突然口を開いた。

「でお母さんは居ないのか。」
「知りません。」と子供は答へた。
男が何か云はうとする間もなく彼女はつけ加へた。
「居ないのでせう。他の人は皆お母さんを持つてゐますが、私は持つてゐません。」
そして一寸默つた後で、彼女はまた云つた。
「私には一度もお母さんはなかつたやうですの。」
男は立ち止つて、桶を地面に下し、身を屈めて、子供の兩肩に手を置き、暗闇の中にその姿を眺めその顏を見ようとした。
コゼットの痩せた弱々しい顏が、空の薄ら明りのうちにぼんやり浮き出して見えた。
「お前さんは何といふ名前だ？」と男は云つた。
「コゼットといふの。」
男は宛も電氣に打たれたやうであつた。彼はまた彼女をよく見、それから兩手をその肩から外し、桶を取り、そして歩き出した。
間もなく彼は尋ねた。
「お前さんは何處に住んでる？」
「御存じかどうか知りませんが、モンフェルメイといふ所です。」
「こちらへ行けば其處へ行くんだね。」
「えゝ。」
彼はなほ一寸言葉を切つたが、また云ひ出した。
「一體誰が今時分森の中まで水を汲みにやらしたんだ。」
「テナルディエのお上さんです。」
男はまた尋ねた。彼は出來るだけ平氣な聲を裝はうとしてるらしかつたが、なほ不思議な震へがその中には籠つてゐた。
「テナルディエのお上さんといふのは何をしてるんだ。」
「うちのお上さんです。」と子供は云つた。「宿屋をやつてゐるのです。」
「宿屋？」と男は云つた。「では私は今晩そこへ行つて泊らう。案内しておくれ。」
「私達は其處へ行つてるのですよ。」と子供は云つた。
男は可なり早く歩いた。がコゼットは平氣でついて行つた。もう疲れも感じなかつた。時時彼女は眼を擧げて、云ひ難い一種の安心と信頼との念で彼を見上げた。嘗て彼女は、神といふものに心を向けることも祈りをすることも教はらなかつた。けれども今や、希望と喜悅

とに似た何かを心のうちに感じ、天の方へさし向けらるゝ何かを心のうちに感じた。

數分過ぎ去つた。男は云つた。

「テナルディエの上さんのうちには女中は居ないのかね。」

「居ません。」

「お前さん一人なのか。」

「えゝ。」

それからまた言葉が途切れた。コゼットは口を開いた。

「でも娘は二人あります。」

「何といふ娘だ。」

「ボニーヌとアゼルマといふのです。」

子供は、テナルディエの上さんが好きな小說的な二人の名前を、そんな風に簡短にして呼んでゐたのである。

「ボニーヌとアゼルマと云ふのは、どういふ人達だ。」

「テナルディエのお上さんのお嬢さん達です。まあその娘達です。」

「そして何をしてる？　その人達は。」

「そりやあ種々なものを持つてゐます、」と子供は云つた、「美しい人形だの、金のついたものだの種々なものがあります。遊んで喜んでゐます。」

「一日中？」

「えゝ。」

「そしてお前さんは？」

「私は、働いてゐます。」

「一日中？」

子供は大きな眼を擧げた。夜で見えはしなかつたが、それには涙が宿つてゐた。子供は靜に答へた。

「えゝ。」

一寸默つた後に彼女は云ひ續けた。

「時々は、用がすんで許される時には、私も遊びます。」

「どうして遊ぶ？」

「勝手なことをして。何でもさしてくれます。けれど私は玩具を餘り持つてゐませんの。ボニーヌとアゼルマとは私に人形を貸してくれません。私はたゞ鉛の小さな劍を一つ持つて

るきりですの、これ位の長さの。」

子供は自分の小指を出して見せた。

「切れないんだらう。」

「切れますよ、」と子供は云つた。「茶つ葉だの蠅の頭なんかは切れます。」

二人は村に達した。コゼットはその見知らぬ男を案内して通りを歩いていつた。彼等は麵麭屋の前を通つた、けれどもコゼットは買つてゆくべき麵麭のことは忘れてゐた。男はもう種々なことを尋ねるのを止めて、陰鬱に默り込んでゐた。それでも會堂の所を通りすぎて、露天の店が並んでるのを見ると、男はコゼットに尋ねた。

「おや市場だね。」

「いゝえ、クリスマスですよ。」

彼等が宿屋に近づいた時、コゼットはおづ〳〵と男の腕につかまつた。

「あなた。」

「なんだ？」

「家の近くに來ました。」

「それで？」

「これから私に桶を持たして下さいませんか。」

「なぜ？」

「他の人に桶を持つて貰つてるのが見つかると、お上さんに打たれますから。」

男は彼女に桶を渡した。それからすぐに二人は、宿屋の戸口の所に來た。

八　貧富不明の男を宿す不快

コゼットは我知らず、玩具屋の店に並べてある大きな人形の方をぢろりと眺めた。それから家の戸を叩いた。戸は開かれて、テナルディエの上さんが手に蠟燭を持つて出て來た。

「あゝお前か、この乞食娘が！　何だつてこんなに長くかゝつたんだ。どつかで遊んでゐたんだらう。」

「お上さん、」とコゼットは身體中震へ上つて云つた、「あのお方が泊めて貰ひたいつて來てゐられてます。」

上さんは、宿屋の主人がいつでもするやうに、邪慳な顏附をすぐに和げた、そして新來の客の方を貪るやうに眺めた。

「あなたですか。」と彼女は云つた。

「左樣です。」と男は答へながら、帽子に手をあてた。

金のある旅客はそんな丁寧なことはしないものである。その身振りを眺め、またその男の服裝と荷物とを見て取つて、テナルディエの上さんの和らいだ顏附はまた慳貪になつた。彼女は冷やかに云つた。

「おはひりなさい、お爺さん。」

「お爺さん」は中にはひつた。上さんはまたぢろりと彼の姿を眺め、すつかり擦り切れたフロックと破れかゝつた帽子とに特に眼を留め、それから、頭をつんと擧げ鼻頭に皺を寄せちらりと瞬きをして、亭主の意向を探つた。亭主はやはり馬方等と一緒に酒を飲んでゐたが、ちらと人さし指を動かしてそれに答へた。さういふ場合それは眼らした脣と共に、「一文なしだ」といふ意味であつた。それを見て上さんは叫んだ。

「お前さん、大變お氣の毒だが、室が開いてませんよ。」

「どこでもいゝから泊めて下さい、」と男は云つた。「物置きでも、厩でも宜しいです。一室分の代は拂ひますから。」

「四十錢ですよ。」

「四十錢。承知しました。」

「ではよどさんす。」

「四十錢だと！」一人の馬方が上さんに低く囁いた。「普通は二十錢だけぢやないか。」

「あの男には四十錢だよ。」と上さんは同じく低く答へた。「それより安くちや貧乏人は泊められない。」

「その通りだ。」と亭主も靜かに口を添へた。「あんな男を泊めると家が惡くなるからね。」

その間に男は、腰掛けの上に包みと杖とを置き、一つの卓子に向つて席についた。コゼットは急いで其處に葡萄酒の瓶と杯とを並べた。水桶を云ひつけた商人はそれを自分で馬の所へ持つて行つた。コゼットはまた料理場の卓子の下のいつもの場所に戻つて、編物を初めた。

男は、杯に注がした葡萄酒に脣を浸したかと思ふと、すぐに異樣な注意でコゼットを眺め出した。

コゼットは醜かつた。然し、樂しい生活をしてゐたなら恐らく綺麗だつたかも知れない。その小さな陰鬱な顏附は既に前に述べて置いた。が、なほ云へば、彼女は痩せて蒼ざめてゐた。もうすぐ八歳にならうとするのに、漸く六歳位にしか見えなかつた。窪んで一種の深い影を湛へてゐる大きな眼は、多くの涙のために殆んどその光りを失つてゐた。脣の角には、凶人や重病人などに見らるゝやうな不斷の苦しみから來た曲線が出來てゐた。兩手は、母親

がかつて推察した通り「凍傷にくずれて」ゐた。その時丁度彼女を輝らしてゐた火のために、骨立つた角々が浮き出して、痩せてゐるのが特に目立つてゐた。いつも寒さに震へてゐたので、兩膝をきちつと押しつけ合ふ癖がついてゐた。着物は破れ裂けて、夏には可哀相に思はれ、冬には恐ろしく思はれた。身につけてゐるのは、穴のあいた綿布ばかりで、一片の毛織の布もなかつた。所々に肌が覗いてゐて、その何處にも青い斑點や黑い斑點が見えてゐた。それはテナルディエの上さんに打たれた跡であつた。露はな兩脛は赤くかぢかんで細かつた。鎖骨の上が深く凹んでゐるのを見ると、可哀相で涙がこぼれるほどだつた。娘の全身、その歩き方、その態度、聲の調子、一言云つては息を引く樣、その眼附、その沈默、その一寸した身振り、それらはたゞ一つの思ひを現はし示してゐた、即ち恐怖を。

恐怖の念が彼女の全身に現はれてゐた。云はゞそれに蔽はれてゐるがやうであつた。恐怖のために彼女は、兩肱を腰につけ、踵を裾着の下に引つ込ませ、隅つこに出來るだけ小さくちゞこまり、漸く生きてるだけの息をついてゐた。そしてその恐怖の樣子は殆んど彼女の身體の癖となつてゐて、いつも同じやうで、たゞその度が次第に高まつてゆくだけであつた。その瞳の底には驚いたやうな影があつて、恐懼の念が見えてゐた。

さういふ恐怖の念が強くコゼットを支配してゐたので、彼女は今歸つて來て、着物が濡れてゐたにも拘らず、火の所へ行つてそれを乾かさうともせず、そのまゝ默つて仕事を初めたのであつた。

八歳のその小娘の眼附は、普通は如何にも陰鬱で、時には如何にも悲壯であつて、どうかすると、白痴か又は惡魔にでもなるのではないかと思はれるほどだつた。

前に云つた通り、彼女は嘗て祈禱の何たるやを知らず、また嘗て會堂に足をふみ入れたこともなかつた。「どうしてその閑があるものか。」とテナルディエの上さんは云つてゐた。

黄色いフロックの男は、コゼットから眼を離さなかつた。

突然テナルディエの上さんは叫んだ。

「おゝそれから麵麭は？」

コゼットは、お上さんが高い聲を出す時にいつもするやうに、すぐに卓子の下から出て來た。

彼女はすつかり麵麭のことは忘れてゐたのである。それで、絶えず脅かされてる子供特有の方便を持ち出して、嘘を云つた。

「お上さん、麵麭屋の店は閉つてゐましたの。」

「戸を叩けばいゝぢやないか。」

「叩きましたの。」
「そして？」
「誰も開けてくれませんでした。」
「本當か嘘か明日になれば分るさ。」と上さんは云つた。「もし嘘だつたら酷い目に逢はしてやる。それから十五錢の銀貨をお返し。」
コゼットは胸掛のポケットに手を差入れて、眞青になつた。十五錢銀貨は其處にはひつてゐなかつた。
「これ！　私の云ふことが聞えないのか。」と上さんは云つた。
コゼットはポケットを裏返した、が何もなかつた。あの金は一體どうなつたのであらう？
不幸な娘は口を利くことも出來なかつた。彼女は石のやうに固くなつてしまつた。
「お前はあの十五錢銀貨を失くなしたのか。」と上さんは聲を荒らげた。「それとも盜もうとしてるのか。」
それと共に彼女は、煖爐の所に下つてゐる鞭の方へ腕を伸した。
その恐ろしい身振りを見て、コゼットは始めて漸く叫んだ。
「御免下さい、お上さん、お上さん、もう仕ませんから。」
上さんは鞭を取り下した。
その間に黄色いフロックの男は誰も氣附かぬうちに、胴衣の隱しの中を探つた。固より他の旅客等は、酒を飲んだりカルタをしたりして、他のことには一切注意を向けてゐなかつたのである。
コゼットは恐れて煖爐の隅に縮こまり、半ば露はな小さな手足を引込めて隱さうとした。
上さんは鞭の手を上げた。
「一寸、お上さん。」と男は云つた。「今その娘さんの胸掛のポケットから何か落ちて轉つてきましたよ。多分それぢやありませんか。」
と同時に彼は身を屈めて、一寸床の上を探すやうな風をした。
「それ、こゝにありました。」と彼は身を起しながら云つた。
そして彼は一片の銀貨を上さんに差出した。
「さう、これです。」と彼女は云つた。
實はそれではなかつたのである。それは二十錢銀貨だつた。けれども上さんはそれで得をすると思つた。彼女は銀貨をポケットに入れて、たゞ恐ろしい眼附を娘の上に投げて云つた。
「またこんなことをすると承知しないよ。」

コゼットは、上さんの所謂「自分の巣」の中に戻つた。そして見識らないその旅客をぢつと見つめた彼女の大きい眼には、これまで嘗てなかつたやうな表情が浮んできた。それはなほ只の驚きの情にすぎなかつたが、何となく一種の信頼の情が交つてゐた。

「所で夕御飯はどうします。」と上さんは旅客に尋ねた。

彼は答へなかつた。深く何かに思ひ耽つてるやうであつた。

「一體何といふ男だらう。」と上さんは口の中で呟いた。「ひどく貧乏人と見える。夕御飯の代も持つてゐない。宿錢だけでも拂へるかしら。でもまあよく床に落ちてた金を盗もうとしなかつたものだ。」

そのうちに扉が開いて、エポニーヌとアゼルマとがはひつて來た。

二人共全く綺麗な小娘であつた。田舎娘といふよりも寧ろ町娘と云ひたい位で、可愛らしかつた。一人は艶のいゝ栗毛の髪を束ね、一人は長く編んだ髪を脊中に下げて、二人共活潑で、身綺麗で、肥つて、生々(いきゝ)として、丈夫さうで、見る目も心地よいほどだつた。暖かさうに着物を着込んでゐたが、その澤山重ねた着物も彼女等の愛らしい姿を害はないようにとつとめた母親の注意が見えてゐた。冬の裝ひも春の清々しさを消さないようにとつくろつてあゐた。二人は光明から出て來たがやうであつた。その上二人は何でも我儘にされてゐた。その服裝(みなり)や、快活さや、騒ぎ廻つてる様のうちには、皆から大事に奉られてる様子が現はれてゐた。二人がはひつて來た時テナルディエの上さんは、鐘愛の情に滿ちたわざと小言を云ふやうな調子で云つた。「あゝお前達もこゝに來たのかえ！」

それから一人づゝ膝の上に引寄せて、髪の毛をなでつけてやり、リボンを結び直してやり、そして母親特有の優しい仕方で手を離して、云つた。「ほんとにふしだらな人達だね。」

二人は煖爐の隅に行つて坐つた。人形を一つ持つてゐて、それを膝の上にひねくり廻しながら、嬉しさうに囁き合つてゐた。時々コゼットは編物から眼を上げて、二人が遊んでるのを悲しさうな様子で眺めた。

エポニーヌとアゼルマとはコゼットの方へは眼もくれなかつた。コゼットは二人にとつては犬も同様であつた。それら三人の小娘は、皆の年齢を合しても二十四にしかならなかつたが、既に人間の社會の有様を凡て現はしてゐた。一方に羨望と、他方に輕蔑と。

テナルディエの娘等の人形は、もうよほど色褪せ古ぼけてゐて方々壞れてはゐたが、それでもなほコゼットには立派なもののやうに思はれた。彼女は人形といふものを、凡ての子供によく分る云ひ方をすれば本當の人形といふものを、生れてまだ一度も持つたことが無かつたのである。

室の中を往つたり來たりしてゐたテナルディエの上さんは、コゼットがぼんやりして仕事もしないで、二人の娘の遊ぶのを見入つてゐるのを、ふと見て取つた。

「あゝこれ！」と彼女は叫んだ。「それで仕事をしてるのか。覺えておいで、鞭で打つても働かしてやるから。」

初めてかの旅客は、椅子に坐つたまゝ上さんの方へふり向いた。

「お上さん、」と彼はおづ〳〵したやうな風で微笑みながら云つた、「まあ遊ばしておやりなさい。」

もしさういふことが、夕食の時に一片の燒肉を食ひ二本の葡萄酒を傾けひどい貧乏人の樣子をしてゐない旅客から云はれたのであつたら、一の命令と同樣な力になつたかも知れない。けれども、そんな帽子を被つた男が希望を申し出でたり、そんなフロックを着た男が意志を表白したりすることは、テナルディエの上さんには許す可からざることのやうに思へたのであつた。彼女は慳貪に言葉を返した。

「仕事をさせないわけにはゆきません。御飯を食ひますからね。何もさせないで食はしておくことは出來ませんよ。」

「一體何を拵へさしてるのですか。」と男はやさしい聲で云つた。その言葉は、彼の乞食のやうな服裝と人夫のやうな肩幅とに妙な對照をなしてゐた。

上さんは兎も角も答へた。

「靴下ですよ。私の娘共の靴下です。もう大抵無くなつてしまつて、間もなく跣足にならなくてはならない所ですからね。」

男はコゼットの眞赤になつてる可愛さうな足を眺めた、そして云つた。

「どれ位かゝつたらあの娘はその靴下を仕上げるでせうか。」

「まだ三四日はたつぷりかゝるでせうよ、怠けものだから。」

「そしてその一足の靴下が出來上つたらいくら位になるんです。」

上さんは輕蔑の眼でぢろりと男を見た。

「安くみても三十錢位ですね。」

「ではそれを五法で賣つてくれませんか。」と男は云つた。

「なんだ！」とそれをきいてた一人の馬方が大聲に笑ひながら叫んだ、「五法だと。べらばうだ。鐵砲玉五つだと！」

亭主のテナルディエも、もう口を出すべき時だと思つた。

「宜しうございます。さういふことがしてみたいんなら、その靴下一足を、五法で差上げませ

う。お客の仰言ることは斷るわけにゆきませんからな。」

「すぐに金を拂つて頂きませう。」と上さんは、いつもの簡單確實なやり方で云つた。

「ではその靴下を買ひますよ。」と男は答へた。そしてポケットから五法の貨幣を取出して卓子の上に置きながら、つけ加へて云つた、「代を拂ひますよ。」

それから彼はコゼットの方へ向いた。

「もうお前さんの仕事は私のものだ。勝手にお遊びよ。」

馬方は五法の貨幣に驚いて、杯をすてゝやつて行つた。

「いやほんとだー」と彼はその貨幣を檢べながら叫んだ。「本物の大きいやつだ、贋造ではないわ。」

テナルディエは其處に近づいていつて、默つてその金をポケットに納めた。

上さんは一言もなかつた。彼女は脣を嚙んで、顏には憎惡の表情を浮べた。

でもコゼットは震へてゐた。そして思ひきつて尋ねてみた。

「お上さん、本當ですか。遊んでもいゝのですか。」

「お遊びー」と上さんは恐ろしい聲で云つた。

「あり難うございます、お上さん。」とコゼットは云つた。

そして口ではテナルディエの上さんに禮を云ひながら、彼女の小さな心は旅客に禮を云つてゐた。

テナルディエはまた酒をのみ初めた。女房は彼の耳に囁いた。

「あの黃色い着物の男は一體何者でせう。」

「わしは大金持ちがあんなフロックを着てるのを見たことがある。」とテナルディエは嚴かに答へた。

コゼットは編物を其處に放り出した。けれどもその場所からは出て來なかつた。コゼットはいつも出來るだけ身を動かさないやうにしてゐた。彼女は今自分の後ろの箱から、古い襤褸と小さな鉛の劍とを出した。

エポニーヌとアゼルマとは、あたりに起つたことには少しの注意も拂つてゐなかつた。二人は丁度極めて面白いことを初めた所であつた。猫を一匹捉へたのである。二人は人形を下に投り出してしまつてゐた。そして年上の方のエポニーヌは、猫が泣き喚くのもかまわずに、赤や靑の布(きれ)や襤褸でそれに着物をきせようとしてゐた。その大變なまたむづかしい仕事をやりながら、妹に子供特有のやさしい見事な言葉で話しかけてゐた。さういふ言葉の優しさは胡蝶の翼の顫きにも似たもので、摑もうとすれば遠くに逃げ去るものである。

「ねえ、この人形の方があれよりよつぽど面白いわよ。動いたり、泣いたりして、温いのよ。ねえ、一緒に遊びませう。これは私の小さな娘よ。私があなたの所へ遊びにゆくと、あなたがこの娘を見るの。そのうちあなたは髯を見つけて喫驚するのよ。それからあなたは、耳を見つけ出し、こんどはまた尾を見つけ出して、喫驚するのよ。そしてあなたは私に云ふの、あらまあ！　つて。すると私が云ふの、え、奥さん、これが私の小さな娘ですよ、今時の小さな娘はみんなかうですよ。」

アゼルマは感心したやうにエポニーヌの言葉を聞いてゐた。

一方では酒を飲んでゐた連中が、卑猥な唄を歌ひ出して、家が揺れるほど笑ひ興じてゐた。テナルディエは彼等を煽て、彼等に調子を合してゐた。

小鳥は何でゞも巣を拵へてしまふやうに、子供はどんなものをも人形にしてしまふものである。エポニーヌとアゼルマとが猫に着物をきせてる間に、コゼットの方では剣に着物を着せてゐた。それをしてしまふと、彼女はそれを腕に抱へて、寢つかせるために靜に唄を歌つた。

人形は、女の兒が一番欲しがるもの〻一つで、また同時にその最も可愛い〻本能を示すもの〻一つである。世話をやき、下衣を着せ、飾り立て、着物を着せ、また着物をぬがしたり着せたりし、云ひきかせたり、少しは小言を云つたり、搖り、可愛がり、寢せつけ、そしてそれを生きてるもの〻やうに考へる、それらのことのうちに女の未來が含まれてゐる。夢想したり饒舌つたりしながら、小さな道具や戸棚を作りながら、小さな着物や胴衣や下着を拵へながら、子供は若い娘になり、若い娘は大きな娘となり、大きな娘は人妻となるのである。そして最初に產む子供は、最後の人形となるのである。

人形を持たない小娘は、子供の無い婦人と同じく不幸で、また同じく不自然なものである。

コゼットはそれで、劍を人形となしてゐた。

テナルディエの上さんは、黄色い着物の男に近寄つてみた。「家の人の云ふ通りだ、」と彼女は考へた、「これはラフィットさんかも知れない。金持のうちには可笑しな人もあるものだから。」

彼女はその男の卓子の所へ行つて肱をかけた。

「旦那……。」と彼女は云つた。

その旦那といふ言葉に、男はふり向いた。上さんはそれまで彼を、お前さんとか、お爺さんとか呼んでゐたのであつた。

「あの、旦那、」と彼女はやさしさうな樣子をして云つた。その樣子は彼女の恐ろしい姿よりもなほ一層嫌味なものであつた。「私はあの兒を遊ばしてやりたいのでございますよ。決してそれを不承知ではございません。一度くらゐは宜しうございますとも、旦那が御親切に云つて下さいますから。でもあの兒は何にも持たないのでございますよ。仕事はさせないわけには參りませんのです。」

「それではあなたの兒ではないのですか、あの娘は。」と男は尋ねた。

「いゝえ、どうしまして旦那。あのやうにして慈善のために引取つてやつてる貧乏な兒でございますよ。馬鹿な兒でございますよ。頭の中には水でもはひつてゐるのでせう。御覽の通り大きな頭ばかりしてゐます。私共も出來るだけのことはしてやつてるのでございますが、何分にも私共は貧乏でございますからね。いくら國許の方へ手紙を出しましても、もう六月といふもの返事もございません。屹度母親も死んだに違ひありません。」

「あゝー」と男は云つて、何か考へに沈み込んでしまつた。

「その母親といふのも大した者ではございません。」と上さんはつけ加へた、「子供を捨てゝいつた位なんですから。」

さういふ會話の間、コゼッドは自分のことを話されてるのだと或る本能から感じたらしく、テナルディエの上さんから眼を離さなかつた。彼女はぼんやりきいてゐた、そして時々二三言をきゝ取つた。

そのうちに酒を飲んでゐた連中は大抵醉つ拂つて、以前にも增した上機嫌さで下等な唄をくり返し歌つてゐた。聖母や小兒イエスなどが出て來る道化た卑猥な唄であつた。テナルディエの上さんまでが、その仲間に加はつて笑ひ騷いだ。コゼットは例の卓子の下で火を見つめてゐた。眼の中には火が赤く映じてゐた。彼女はそれから自分が拵へた赤ん坊をまた搖り初めた。さうしながら低い聲で歌つてゐた。「お母さん死んだ、お母さん死んだ、お母さん死んだ！」

黃色い着物の「大金持ち」は、上さんがまたうるさく勸めるので、遂に食事を取ることにした。

「何を差上げませう。」

「麵麭と乾酪（チーズ）とを。」と男は云つた。

「なんだこれはてつきり乞食に違ひない。」と上さんはまた考へた。

醉つ拂ひの連中はなほ唄を續けて居り、卓子の下の娘もまた自分の唄を歌つてゐた。

と俄にコゼットは唄を止めた。テナルディエの娘達の人形が、猫のために放り出されて、料

理場の卓子から數歩の所に轉つてゐるのを、彼女はふり返つて認めたのであつた。

すると彼女は、自分の心を十分滿さなかつたその着物をきせた劍をすて〻、靜に室の中を見廻した。テナルディエのお上さんは亭主に何か小聲で話しながら金を數へてゐた。ポニーヌとアゼルマとは猫と戯れてゐた。旅客等は食つたり飲んだり歌つたりしてゐた。誰もこちらを見てる者は無かつた。彼女はその機を逸しなかつた。彼女は膝と手とで卓子の下から匍ひ出て、誰も見てゐないことをも一度確かめて、それから急に人形の所まで匍つていつてそれを摑んだ。そしてすぐに自分の場所に戻り、其處に坐つて身動きもしないで、たゞ腕に抱いた人形を自分の影に隱さうとするやうに身を屈めた。本當の人形を持つて遊ぶといふ幸福は滅多に知らないことだつたので、彼女は今快樂とも云へるほどの非常な喜びを感じたのであつた。

誰も彼女を見てる者は無かつた、たゞ粗末な食物をゆる〳〵と食べてるかの旅客の外は。

コゼットのその喜びは凡そ十五分間許り續いた。

けれども非常に注意はしてゐたもの〻、コゼットは人形の片足が出てゐることに氣附かなかつた、そして煖爐の火がその足をはつきり照らし出してることに。影の所から出てゐるその薔薇色の輝いた足が、突然アゼルマの眼についた。彼女はエポニーヌに云つた。「あら！姉さん！」

二人の娘は遊びを止めて呆然とした。コゼットが大膽にも人形を取つてゐる！

エポニーヌは立ち上つて、猫を持つたまゝ母親の所へ行つて、その裾を引つ張つた。

「うるさいね！」と母親は云つた。「どうしようと云ふんだい。」

「お母さん、まあ御覽よ！」と子供は云つた。

そして彼女はコゼットの方を指した。

コゼットの方は人形を持つたことに有頂天になつて、もう何にも見も聞きもしなかつた。

テナルディエの上さんの顏には特殊な表情が浮んだ。それはこの世の恐しさと下らなさとが一緒になつた表情で、所謂悍婦と稱する型の表情であつた。

今や彼女の自尊心が傷けられたのでその憤怒は一層激しくなつてゐた。コゼットはあらゆる制限を越えてゐたのである。「お孃さん達」の人形に手をつけてゐたのである。

一人の百姓が皇子の青い大授章に手をつけた所を見るロシア女帝の顏も、恐らくそれと等しい有樣を呈するかも知れない。

彼女は憤怒に潤れた聲を搾つて叫んだ。

「コゼット！」

コゼットは大地が足下に震動したかのやうに震へ上つた。そしてふり返つた。

「コゼット！」と上さんはくり返した。

コゼットは人形を取り、恭敬と絶望とを交へた態度でそれを靜に下に置いた。それからなほ人形から眼を離さないで、兩手を組合した。そしてそれ位の年頃の子供には云ふも恐ろしいことではあるが、その兩手を捻り合した。それから、その日の種々な恐ろしいこと、森の中に行つたことや、水の一杯な桶の重かつたことや、金を失くしたことや、鞭をつきつけられたことや、またテナルディエの上さんの口から聞いた恐ろしい言葉など、そんなことに逢つてもまだ出て來なかつたものが今彼女から出て來た、即ち涙が。彼女は獻欷を初めた。

その間にかの旅客は立ち上つた。

「どうしたのです。」と彼は上さんに云つた。

「分りませんか。」と上さんは云つて、コゼットの足下に横はつてゐる罪證物件を指で差し示した。

「で、あれがどうしたのです。」と男は云つた。

「あの乞食娘が家の子供の人形に手をつけたのです。」と上さんは答へた。

「それでこんな騒ぎですか！」と男は云つた「であの兒が人形で遊んだのがどうしたといふんです。」

「あの汚い手で觸つたのです、」と上さんは云ひ張つた、「あの身震ひが出るほど汚い手で。」

その時コゼットは更に激しく獻欷いた。

「靜にしないか！」と上さんは叫んだ。

男は眞直に表の戸口の方へゆき、それを開いて出て行つた。

彼が出てゆくと、上さんはその間に乘じて、卓子の下のコゼットをひどく蹴りつけた。それで娘は大聲を上げた。

戸はまた開かれた。男は兩手に夢に見るやうなかの立派な人形をかゝへて其處に現はれた。その人形のことは前に云つておいた通りで、村の子供等が朝から眺めてゐた所のものである。男は人形をコゼットの前に据ゑて云つた。

「さあ、これがお前さんのだ。」

彼は其處に來て一時間以上にもなるが、その間何やら考へ込みながら、かの玩具屋の店がランプや蠟燭の光りで眩しいほどに輝らされて、其の宿屋の窓硝子起しにイリュミネーションのやうに見えてゐるのを、ぼんやり眺めてゐたものと思はれる。

コゼットは眼を上げた。男が人形を持つて自分の方へやつて來るのを太陽が近づいて來る

のを見るやうにして彼女は眺めた。これがお前さんのだといふ異常な言葉を彼女は聞いた。彼女はその男を眺め、人形を眺め、それからそろそろと後退りをして、卓子の下の壁の隅に深く隱れてしまつた。

彼女はもう泣きもしなければ、聲も立てなかつた。ぢつと息までもつめたやうな樣子であつた。

テナルディエの上さんと、エポニーヌとアゼルマとは、みな其處に立ち悚んでしまつた。酒を飲んでた連中までもその手を休めた。室の中は嚴肅な沈默に滿された。

上さんは石のやうになつて默つたまゝ、また推測をはじめた。「この爺さんは一體何者だらう。貧乏人かしら、大金持ちかしら。きつとその兩方かも知れない、と云へばまあ盜棒だが。」

亭主のテナルディエの顏には、意味ありげな皺が寄つた。强い本能がその全獸力を以て現はれる時に人間の顏の上に寄つてくる皺である。亭主は人形と旅客とを交る代る見比べた。彼は宛も金袋を嗅ぎ出さうとするやうにその男を嗅いでるやうであつた。尤もそれはほんの一瞬の間であつた。彼は女房の方へ近づいて、低く囁いた。

「あの品は少くとも三十法はする。馬鹿には出來ねえ。あの男の前に膝を下げろよ。」

下等な性質と無邪氣な性質とは只一つの共通點を持つてゐる、卽ち直ちに掌を返すが如き點を。

「さあコゼットや。」とテナルディエの上さんはやさしくしたつもりの聲で云つた。けれどもそれは惡婆の酢つぱい蜜から成つてる聲だつた。「人形を頂かないのかい。」

コゼットは思ひきつて穴から出て來た。

「コゼット。」とテナルディエも甘やかすやうな聲で云つた、「旦那が人形を下さるんだ。頂けよ。その人形はお前のだ。」

コゼットは一種の驚駭の情を以てその見事な人形を眺めた。その顏はなほ涙にまみれてゐたが、その眼は曙の空のやうに、喜びの云ひ難い輝きに滿ちてきた。その時彼女は、「娘よ、お前はフランスの皇后樣だ」と突然云はれでもしたやうな感情を覺えてゐた。

もしその人形に觸りでもしたら、それから雷でも飛び出しはすまいかといふやうな氣がした。

それは或る點まで實際のことであつた。なぜなら、もしさうしたらテナルディエの上さんが自分を叱りつけはすまいか、また自分を打ちはすまいか、と彼女は考へたのである。

けれども人形に引きつけられる力の方が强かつた。彼女は遂にその方へ寄つて行つた。そ

して上さんの方へふり向いてこは〳〵口の中で云つた。

「宜しいんでせうか、お上さん。」

その時の彼女の同時に絶望と恐怖と歡喜との籠つた様子は、如何なる文字を以てしても書き現はすことは出來ないものであつた。

「いゝとも！」と上さんは云つた。「お前のだよ。旦那がお前に下さるのだから。」

「本當でございますか、あなた。」とコゼットは云つた。「本當でございますか、私のでございますか、この奥様は。」

男の眼には涙が溢れてゐるらしかつた。彼は感情の高頂に達してゐて、涙を流さないために口も利けないやうな狀態に在るかとも思はれた。彼はたゞコゼットに首肯いてみせて、その「奥様」の手をコゼットの小さな手に握らしてやつた。

コゼットは急に手を引込めた。宛も奥様の手が彼女の手を燒いたかのやうに。そして床の上を見つめた。なほその時彼女は不作法に舌を吐き出したことをも、吾人はつけ加へざるを得ない。それから彼女は突然向き直つて、ひしと人形を掴んだ。

「私はこれにカテリーヌといふ名をつけませう。」と彼女は云つた。

コゼットの襤褸の着物が、人形のリボンと生々した薔薇色のモスリンとに並んで押しつけられてゐるのは、頗る異様な様であつた。

「お上さん、」と彼女はまた云つた、「これを椅子の上に置いてもようございますか。」

「あゝいゝよ。」と上さんは答へた。

此度はエポニーヌとアゼルマとがコゼットを羨しさうに見てゐた。

コゼットはカテリーヌを椅子の上に置いた。それから自分はその前の地面に坐つて、ちつと見入つてゐるやうな様子をして默つたまゝ身動きもしなかつた。

「さあお遊び、コゼット。」と男は云つた。

「いえ遊んでゐますのよ。」と娘は答へた。

天からコゼットの所へ遣された者のやうなその見ず知らずの不思議な男を、テナルディエの上さんはその時世に最も憎むべき者のやうに思つた。けれども自ら抑へなければならなかつた。彼女は何事にも夫を眞似ようとしてゐたので、假面を被ることにはよく馴れてはゐたが、それでもその時の感情には殆んど堪へ難いものがあつた。彼女は急いで自分の娘等を寢床に追ひやつた。それからコゼットをも寢かすことをその黄色い着物の男に許可を願つた。今日は大變疲れてゐますからなどと母親らしい様子でつけ加へた。で、コゼットは、腕にカテリーヌを抱いて寢に行つた。

上さんは時々、室の向うの端の亭主の所へ行つた。心を安めるためにと自ら云つてゐた。彼女は亭主と一寸言葉を交はした。それは大聲に云へないだけ一層苛ら立つたものであつた。

「あの糞爺め！　何と思つてゐるんだらう。こゝにやつて來て私共の邪魔をするなんて！あの小さな餓鬼を遊ばしたがつたり、人形をやつたり、それも四十錢の價値もない犬女郎に四十法もする人形をやつたりしてさ！　も少ししたら、ベリーの御妃にでも云ふやうに陛下なんて云ひ出すかも知れない。正氣の沙汰か、氣が狂つたのか、あの變な老耄めが。」

「なぜかつて、分つてるぢやないか。」とテナルディエは答辯した。「なにそれが奴には面白いんだ！　お前にはあの兒が働くのが面白いやうに、奴にはあの兒が遊ぶのが面白いのさ。それはあの男の權利だ。客となりやあ、金さへ出せば何でも勝手に出來るんだからな。あの爺さんが慈善家だつたとしても、それでお前にどうしたといふわけはないぢやねえか。もし馬鹿者だつたとした所で、お前に關係したことぢやねえ。何もお前が口を出すことはねえや、向うには金があるんだからな。」

亭主としての言葉、宿屋の主人としての理論、それは何れも抗辯を許さない所のものであつた。

男は、卓子の上に肱をついて、また何か考へ込んだやうな樣子をしてゐた。商人や馬方や凡ての他の旅客等は、少し遠くに身を退けて、もう唄も歌はなかつた。彼等は一種の畏敬の念を以て男を遠くから眺めてゐた。あんな見すぼらしい着物をつけながら、平氣で大い貨幣をポケットから引き出し、木靴をはいた小婢に大きな人形を奢つてやるその男は、確かに素敵なまた恐ろしい爺さんに違ひなかつた。

かくて數時間すぎ去つた。夜半の彌撒も唱へられ、夜食も終り、酒飲みの連中も立ち去つてしまひ、酒場の戸も閉され、その天井の低い廣間にも人が居なくなり、火も消えてしまつたが、不思議な男はなほ同じ席に同じ姿勢でぢつとしてゐた。時々彼は身をもたしてる肱を右左と變へてゐた。たゞそれだけであつた。コゼットが去つてからはもう彼は一言も口を利かなかつた。

テナルディエ夫婦だけが、作法と好奇心とからその廣間に殘つてゐた。「夜通しあんな風にしてゐるつもりかしら。」と女房は呟いた。午前の二時が鳴つた時、彼女は遂に閉口して亭主に云つた。「もう寢ますよ。好きなやうになさるがいゝわ。」亭主は片隅の卓子に坐つて、蠟燭をつけ、クーリエ・フランセー紙を讀み初めた。

さういふ風にして一時間餘りたつた。見事な主人は少くとも三度位はくり返してクーリ

エ・フランセー紙をその日附から印刷者の名前まで讀み返したが、男は身を動かさうともしなかつた。

テナルディエは、身體を動かし、咳をし、唾を吐き、鼻をかみ、椅子をがた〳〵いはしたが、それでも男は身動きもしなかつた。

「眠つてるのかしら。」とテナルディエは思つた。が男は眠つてゐるのではなかつた。然し何物も彼を起すことは出來なかつた。

遂にテナルディエは帽子をぬぎ、靜に近寄つていつた、そして思ひ切つて彼に云つてみた。

「旦那お休みになりませんか。」

寢ませんかといふ言葉でも彼には十分でまた親しいものに思はれたかも知れなかつた。が休むといふ言葉には贅澤の氣味があつて、敬意が含まれてゐるのであつた。それらの言葉は翌朝の勘定書の數字を大きくする不思議な驚くべき性質を持つてるのである。寢る室が二十錢なら、休む室は二十法するのである。

「やあ、なるほど、」と男は云つた。「厩は何處にあるのです？」

「旦那、」とテナルディエは微笑を浮べて云つた、「御案内申しませう。」

亭主は蠟燭を取り、男は包みと杖とを取つた。そして亭主は彼を二階の室に導いた。特別に立派な室で、マホガニー製の道具が備へてあり、高い寢臺と赤いキャラコの帷とがついてゐた。

「これは一體何ですか。」と旅客は云つた。

「私共の結婚の時の室でございます。」と主人は云つた。「今では私共二人は他の室に寢るやうにしてゐます。一年に三四度しか誰もはひらないのです。」

「私には厩でも同じだつたのに。」と男は無造作に云つた。

テナルディエは、その餘り愛相の無い言葉を耳にしなかつたやうな風をした。

彼は煖爐の上に在る新らしい二本の蠟燭に火をともした。爐の中には可なりよく火が燃えてゐた。

煖爐棚の上には硝子枠の下に、銀糸とオレンジの花とのついた女の帽子が一つあつた。

「そしてこれは、何ですか。」と男は云つた。

「旦那、それは家内が結婚の時の帽子でございます。」とテナルディエは答へた。

旅客はそれを眺めたが、「ではあの怪物にも處女の時代があつたのかな」とでもいふやうな眼附であつた。

だがテナルディエは嘘を云つたのである。その家を借りて飲食店にしようとした時から、室は今の通りであつた。彼はそれらの道具やオレンジの花の中古の帽子などを買ひ取つた。それで「自分の配偶者」には優雅な光りが添ふことになり、さうしておけばこの家もイギリス人の所謂掠い趣きも來たすことになると、彼は考へたのであつた。

旅客がふり返つた時には、亭主はもう其處に居なかつた。テナルディエは翌朝うまく金を搾り取つてやるつもりのその男には餘り親しい口を利かないがいゝと思つて、挨拶もせずにひそかに逃げ出してしまつたのである。

亭主は自分の室に退いた。女房は床には就いてゐたが、眠つてはゐなかつた。亭主の足音が聞えた時彼女はふり向いて云つた。

「私明日になつたらコゼットを叩き出してしまひますよ。」

テナルディエは冷かに答へた。

「さうか。」

彼等は其他の言葉を交さなかつた。そしてやがて蠟燭は消された。

旅客の方では、室の片隅に杖と包みとを置いた。亭主が出て行くと、肱掛椅子に坐つて暫く考へ込んだ。それから靴をぬぎ、蠟燭の一本を手に取り一本を吹き消し、扉を押し開き、何かを探すやうな風であたりに眼を配りながら室を出て行つた。廊下を通つて階段の所へ達した。其處で、子供の息のやうな極めてやさしい小さな音を耳にした。その音に引かれて彼は、階段の下に作られてる――といふよりも寧ろ階段で出來てゐる一種の三角形の押入れみたいな所へやつて來た。それは階段の下の隙間にすぎなかつた。其處に、古籠や古壜などの間に、埃りや蜘蛛の巣などの中に、一つの寢床があつた。尤も寢床と云つても、穴があいて中の藁が見えてゐる蒲團と、下まで見通せるほど穴だらけの掛け物とにすぎなかつた。敷布もなかつた。そしてそれだけのものが床石の上にぢかに置かれてゐた。その寢床の中に、コゼットが眠つてゐた。

男はそこに近づいて、彼女を眺めた。

コゼットは深く眠つてゐた。着物もきたまゝであつた。冬には、なるべく寒くないやうに着物もぬがないで眠るのであつた。

彼女はしつかと人形を抱きしめてゐた。人形の大きく開かれた眼は闇の中に光つてゐた。時々彼女は眼を覺しかゝつてるやうに大きい溜息を洩らしては、殆んど痙攣的に人形を腕に抱きしめた。寢床の側にはたゞ片方の木靴があつた。

コゼットの寢てる物置の側に一つの扉が開いたまゝになつてゐて、其處から可なり廣いほ

の暗い室が見えてゐた。男はそこにはひつて行つた。その奥の方に、硝子のついた扉を通して、一對の小さな白い寢床が見えてゐた。それはアゼルマとエポニーヌとの寢床であつた。その向うに柳の枝で出來た帷もついてゐない搖籠が半ば見えてゐた。中には、その晩始終泣き通しにしてゐた小さな男の兒が眠つてゐた。

男は、その室がテナルディエ夫婦の寢てる室に續いてゐることを察した。そして其處から引返さうとした時、彼の眼はそこの煖爐の上に落ちた。それはよく宿屋に見受けられる大きなやつで、火がある時でもきまつてごく僅かであつて、見ても寒さうに思はれるものだつた。今その煖爐には、火もなければ灰さへもなかつた。けれども彼の注意を引くものが其處に在つた。それは可愛らしい恰好の同じ大きさの二つの子供靴であつた。クリスマスの晩煖爐の中に履物を置いておいて、親切なお爺さんが立派な贈物を持つてきてくれるのを暗闇のうちに待つといふ、かの面白い古くからの子供の習慣を、彼はその時思ひ出した。エポニーヌとアゼルマとはそのことを忘れないで、めい〳〵自分の靴を片方づつ煖爐の中に置いておいたのである。

男は身を屈めて覗いてみた。

お爺さんは、即ち母親は、既にやつて來たと見えて、兩方の靴の中にはそれ〴〵、新らしい立派な十錢銀貨が光つてゐた。

男は立ち上つて去らうとした。その時彼は、爐の奥の方の暗い隅つこの影に、も一つ何かあるのを認めた。よく見るとそれは木靴であつた。不恰好な醜い木靴で、半ば壞れかゝつてゐて、乾いた泥と灰とにまみれてゐた。コゼットの木靴であつた。コゼットは、いくら欺されても決して氣を落さない子供心にかたくそれを信じて、煖爐の中に自分も木靴を置いたのであつた。

絶望の外は何事も知らなかつた子供のうちにもなほ殘つてゐるその希望こそ、實に崇高なまた優しいものではないか。

その木靴の中には何にもはひつてゐなかつた。

男は胴衣の中を探り、身を屈め、そしてコゼットの木靴の中にルイ金貨を一つ入れた。

それから彼は抜き足して自分の室に歸つた。

九　テナルディエの策略

翌朝少くとも日の出より二時間位前に、テナルディエは、酒場の天井の低い廣間で蠟燭の傍に坐つて、手にペンを執り、黄色いフロックの旅客への請求書を認めてゐた。

女房は側に立ちながら半ば彼の上に身を屈めて、ペンの跡を辿つてゐた。彼等は一言も言葉を交さなかつた。一方は深く考へ込んで居り、一方は、人の頭から驚くべきものが生れ現はれてくるのを見る折のかの敬虔な嘆賞の念に満たされてゐた。家の中にはたゞ一つの物音がしてゐた。それは雲雀娘が階段を掃除する音だつた。

凡そ十五分もたつてから、いくらかの添削をした後、テナルディエは次の傑作を拵へ上げた。

一號室御客人への請求書

一、夕　食	三法
一、室　代	十法
一、蠟燭代	五法
一、炭　代	四法
一、雜　用	一法
合　計	二十三法

右の書附のうち雜用といふのは間違つて難用と書いてあつた。

「二十三法！」と女房は多少躊躇の色を浮べながら感心して叫んだ。

大藝術家の如くに、テナルディエはそれでもなほ満足してはゐなかつた。

「なあに！」と彼は云つた。

それは宛も、ウイン會議に於てフランスの賠償金額を定めてゐるカスルレー子爵のやうな調子であつた。

「なるほどさうね。それ位は相當さ。」と女房は自分の娘の居る前で男がコゼットに人形を與へたことを考へながら呟いた。「それで當り前よ。けれど餘り多すぎるやうね。拂ふまいとしやしないかしら。」テナルディエは冷かに笑つた。そして云つた。

「いや拂ふよ。」

その笑ひは、確信と權威とを示すものであつた。そんな風にして云はれたことは屹度その通りになるに違ひなかつた。で女房も云ひ張らなかつた。彼女は卓子を並べはじめ、亭主は室の中をあちこち歩き廻つた。やゝあつて彼はまたつけ加へて云つた。

「少くも千五百法の借りがあるんだな！」

彼は煖爐の隅に行つて腰をかけ、兩足を温い灰の上に差出して考へ込んだ。

「ねえ、」と女房は云つた、「今日はどうあつてもコゼットを叩き出しますよ、よございますか。あの畜生め！　人形を持つてる所を見ると私はむか〳〵してくる。彼奴をこれから一日で

も家に置いとく位なら、此度のルイ十八世の妾にでもなつた方がまだましだわ。」

テナルディエはパイプに火をつけ、煙を吹きながらそれに答へた。

「とにかく勘定書をあの男に渡してくれ。」

さう云つて彼は室から出て行つた。

彼が出てゆくや否や、旅客がはひつて來た。

テナルディエはすぐに客の後ろに現はれて、女房にだけ見えるやうにして半分開いた扉の所にぢつと立ち止つた。

黄色い着物の旅客は、杖と包みとを手に持つてゐた。

「まあこんなに早く！」と上さんは云つた。「もうお發ちですか。」

さう云ひながら彼女は、工合悪さうに勘定書を兩手のうちにひねくつて、爪で折目をつけてゐた。その冷酷な顔には、珍らしく怯懦と疑惑との影が見えてゐた。

どう見ても「貧乏人」としか思はれない男にそんな書附を出すことが、彼女には何だか不安に思はれたのである。

旅客は何かに心を奪はれてぼんやりしてるやうであつた。彼は答へた。

「えゝ、もう發ちます。」

「では、」と上さんは云つた、「モンフェルメイに用がおありではないのですか。」

「いや、たゞ通りかゝつたのです。それだけです。……そして、」と彼はつけ加へた、「勘定は？」

上さんは何とも答へないで、折り疊んだ書附を彼に差出した。

男はそれを擴げて眺めた。然し明かに彼の注意は他の方へ向いてるらしかつた。

「お上さん、」と彼は云つた、「此の土地では儲かりますかね。」

「それがね、旦那。」と上さんは答へながら、男が別に何とも云はないのを見て拍子ぬけがしてしまつた。

彼女は悲しさうな歎くやうな調子で續けて云つた。

「どうも、不景色でございますよ。それにこの邊には金持ちが餘りありませんのです。御覽の通り狹い場所ですから。時々は旦那のやうな金のある慈悲深い旅の方が御出で下さいませんではね。入費も多うございますし。まあの小娘を食はしておくのだつて大抵ではございません。」

「どの娘ですか。」

「いえ、あの御存じの小娘でございますよ、コゼットといふ。この邊では皆さんにアルー

エット（譯者曰、雲雀娘の意）と云はれてゐますが。」

「あゝなるほど。」と男は云つた。

上さんは續けた。

「百姓つてなんて馬鹿なんでございませう、そんな綽名なんかをつけて。あの兒は雲雀といふよりか蝙蝠に餘計似てゐますのに。ねえ旦那、私共は人樣に慈善をお願ひすることなんか致しませんが、また自分で慈善をするだけの力もございませんのです。一向儲けはありませんのに、出すことばかり多うございます。營業稅、消費稅、戶の稅、窓の稅、その外何もかも稅なのです。政府でも大層な金がいると見えまして。それに私には自分の娘共が居るのですから、他人の子供を育てなければならないといふわけもございませんのです。」

男はつとめて平氣を粧つて口を開いたが、その聲はなほ震へを帶びてゐた。

「ではその厄介者を連れていつてあげませうか。」

「誰を、コゼットをでございますか。」

「さうです。」

お上さんの赤い激した顏は醜い喜びの表情に輝いた。

「まあ旦那、御親切な旦那！　あれを引きうけて、引き取つて、連れてつて、持つてつて下さいまし、砂糖づけにして、松露煮にして、飲むなり食ふなりして下さいまし。まあ惠み深い聖母樣、天の神樣、何てあり難いことでございませう。」

「ではさうしませう。」

「本當ですか、連れてつて下さいますか。」

「連れてゆきます。」

「あのすぐに？」

「すぐにです。呼んで下さい。」

「コゼット！」と上さんは叫んだ。

「ですが、」と男は云つた、「勘定は拂はなければなりません。いくらですか。」

彼は勘定書を一目見たが、驚きの樣子を抑へることは出來なかつた。

「二十三法！」

彼はお上さんを眺めて、また繰り返した。

「二十三法？」

さう繰り返した言葉の調子のうちには、一方には驚きと他方には疑惑が籠つてゐた。

それまでには一寸間があつたので上さんはその打擊に應ずることが出來た。彼女はしかと

答へた。

「左様でございます、二十三法です。」

男は卓子の上に五法の貨幣を五つ置いた。

「娘をつれておいでなさい。」と彼は云つた。

その時テナルディエは室の眞中に出て來て、そして云つた。

「旦那には二十六錢でいゝのだ。」

「二十六錢！」と女房は叫んだ。

「室代が二十錢、」とテナルディエは冷かに云つた、「そして夕食が六錢。娘のことについては少し旦那に話がある。席を外してくれ。」

女房はその意外な智惠の閃きを見てすつかり參つてしまつた。千兩役者が舞臺に現はれたやうな氣がした。そして一言も返さないで、室から出て行つた。

二人だけになると、テナルディエは客に椅子をすゝめた。客は坐つた。テナルディエは立つてゐた。そして彼の顏は、人の好さゝうな質朴らしい特殊な表情を浮べた。

「旦那、」と彼は云つた、「まあお聞き下さい。私は全くあの兒を大事にしてゐましてね。」

男は彼をぢつと見つめた。

「どの兒をです？」

テナルディエは續けて云つた。

「不思議にも妙にあれに心を惹かれてゐます。おや、この金はどうしましたのです。まあこれはお納め下さい。で私はその娘をごく大事にしてゐましてね。」

「一體誰のことです。」と男は尋ねた。

「なに、うちのコゼットのことです。旦那はあれを連れてつてやらうと仰言るんでせう。所で正直な所を申上げると、旦那は立派な方だとお見受けはしますが、實は私はそれに不同意なのです。あの兒が居ないと物足りませんでね。ごく小さな時分から育てましたのでね。それは金もかゝりますし、よくない所もありますし、私共に金はありませんし、實際の所あれの病氣にはたゞ一度で四百法餘りの藥代も拂つたことがありますが、神樣のためと思へば少し位はしてやらなければなりません。父親も母親もありませんので、私が手一つで育て上げました。私とてあの兒に食はせまた自分で食ふだけの麵麭は持つて居ります。實際私はあの兒に引かされてゐます。まあ人情が出て來たのです。私は馬鹿者で、一向理窟は分りません。がたゞ可愛いゝのです。家内は活潑な方ですが、やはり可愛がつてゐます。御覽の通り、自分達の兒のやうにしてゐます。あれが家の中で饒舌くつてるのが樂しみでして。」

男はなほ彼をぢつと眺めてゐた。彼は續けた。

「失禮ではございますが旦那、通りがゝりの人に自分の兒をかうして渡してしまふ者もありますまい。私の申すのも道理でございませう。それで、旦那はお金持ちで、お見受けした所ごく立派な方で、それがあの兒のためになるかどうかなどと申すのではありせまんが、それでもよく事情は分つてゐませんではね。お分りでもありませうが、まああれをやるとして、かりに私の人情を犧牲にしますとしても、あれが何處へ行くかぐらゐは知りたいではございませんか。見失いたくありませんのです。何處に居るか位は知つてゐて、時々は逢ひにも行きませうし、またあの兒も、育て親があつて自分を見てゐてくれてることを知るといふわけです。世間には隨分間違つたことも起りますから。それに私は旦那の名前さへ存じませんし、あれを連れてゆかれますとしたら、あゝあのアルーエットは一體何處へ行つたんだらうと、私はたゞ歎息する外はありませんでせうから。何か一すした書き物でも、まあ云はゞ通行券なりと、それを拜見して置きたいと思ひますが。」

男は、云はゞ相手の本心の底までも貫くやうな眼附でぢつと彼を眺めながら、嚴かな確固たる調子で答へた。

「テナルディエ君、パリーから五里位離れるのに通行券を持つてくる者はゐません。コゼットを連れて行くと云つたら、どうしても連れてゆきます。それだけのことです。私の名前も、私の住所も、またコゼットが何處へ行くかをも、君に云ふ必要はありません。私はあの兒を生涯再び君に逢はせまいといふつもりです。私はあの兒の繩を解いてやつて、逃がさうといふのです。それでどうですか、承知ですかそれとも不承知ですか。」

悪魔や妖精などが何かのしるしで自分より勝つた神の居ることを知るやうに、テナルディエは今對手が中々手剛いことを覺つた。それは殆んど直覺であつた。彼はそれを明確怜悧なる敏捷さで覺つた。前夜、馬方等と酒をのみながら、煙草をふかしながら、卑猥なる唄を歌ひながら、彼は猫のやうに窺ひ數學家のやうに研究して、始終その變な男を觀察してゐたのである。彼は同時に自分のためと樂しみと本能とから男を偷み見、宛も金で賴まれたかのやうに偵察してゐたのである。そしてその黄色い上衣の男の一擧手一投足は悉く彼の眼を逃れなかつた。男が明かにコゼットに對する興味を示さない前から、テナルディエは既にそのことを見破つてゐた。その老人の奥深い眼が絶えずコゼットの方へ向けらるゝのを彼は見て取つてゐた。何故にさう興味を持つのだらう？　一體何者だらう？　金入れには一杯金を持ちながら何故にあゝ見すぼらしい服裝をしてるのだらう？　さういふ問題を彼は自ら提出しながら解決が出來ず、苛ら立つてゐた。彼はそのことを夜通し考へた。あの男はコ

ゼットの父親であるわけはない。では祖父でゞもあらうか？　それならばなぜすぐに名乘らないのであらうか？　權利がある者は、すぐにそれを示す筈である。するとあの男は明かにコゼットに對しては何等の權利も持つてゐないに違ひない。すると一體何者だらう？　テナルディエはどう推測していゝか分らなくなつてしまつた。彼は凡てを垣間見たが、遂に何物もはつきり見附け得なかつた。とは云ふものゝ、その男にあれこれと饒舌り立てながら、これには何か祕密があつて男は身分を隱したがつてゐるのだと思つて、彼は自分の强味を感じた。所が男の明晰確乎たる返答に出逢つて、その不思議な男はたゞ不思議なばかりで何等捉ふべき所が無いのを見た時、彼は自分の弱味を感じた。彼は少しもさういふ返答を豫期してゐなかつた。彼の推測は悉く破れてしまつた。彼はあらゆる考へを集中してみた。そして一瞬間考慮をめぐらした。彼は一見して前後の情況を判斷し得るやうな人物であつた。で今や單刀直入に事を運ぶべき場合であると考へた。他人の眼には分らなくともそれと察し得らるゝ危急な場合に大將軍等が決行することを、彼は遂に斷行した。彼は砲門を隱した幕を俄に引き拂つた。

「旦那、」と彼は云つた、「私は千五百法入用なのでございます。」

男は脇のポケットから黑革の古い紙入れを取り出し、それを開き、紙幣を三枚引き出して、卓子の上に置いた。それから、その紙幣の上を大きな親指で押へて、亭主に云つた。

「コゼットをお呼びなさい。」

さてさういふことが行はれてる間に、コゼットは何をしてゐたか？

その朝コゼットは眼を覺すと、木靴の所へ走つて行つた。彼女は其處に金貨を見出した。それはナポレオン金貨ではなく、王政復古のごく新らしい二十法金貨であつて、表には月桂冠の代りにプロシア式の小さな辮髮が刻んであつた。コゼットは眼がくらむやうな氣がした。彼女の運命は彼女を眩惑し初めた。彼女は金貨がどういふものであるか知らなかつた。まだ一度も金貨を見たことが無かつた。彼女はそれを盜みでもしたやうに急いでポケットの中に隱した。けれどもそれは正しく自分のものであることを感じてゐた。誰がそれを自分にくれたかをも察してゐた。けれども彼女は、一種の恐ろしさに滿ちた喜びを感じてゐた。彼女は滿足であつた。といふよりむしろ惘然としてしまつた。斯くも立派な美しい品々は、現實のものとは思へなかつた。人形は彼女を恐がらせ、金貨は彼女を恐がらした。彼女はそれらの驚くべきもの〻前に何となく身を震はした。たゞあの見知らぬ男だけか彼女を恐がらせなかつた。否却つて彼女の心を落ち着けさした。既に前夜から、驚きのうちにまた眠りのうちに、彼女はその小さな子供心にも、年取つて貧乏で悲しさうな樣子をしながら金持ちで慈悲

深いあの男のことを、考へてゐた。その老人に森の中で出逢つてから、凡てが彼女には一變したやうに思はれた。天を飛ぶ一羽の小さな燕よりもなほ不仕合せなコゼットは、母の影に翼の下に身を隠すといふことがどんなものであるか、嘗て知らなかつた。五年この方、即ち記憶に在る限りに於て、憐れな娘はたえず震へ戰ひてゐた。いつも鋭い不幸の寒風の下に裸で曝されてゐた。所が今、彼女は身に着物を纏つたやうな心地がした。以前は彼女の心は凍えてゐたが、今は暖くなつてゐた。彼女はもうテナルディエの上さんをもさう恐れはしなかつた。もはやたゞ一人ではなかつた。誰かゞ其處に居てくれた。

彼女は急いできまつた朝の仕事に取りかゝつた。自分の身につけてるルイ金貨が、前夜十五錢銀貨を落した同じ胸掛のポケットにはひつてゐるルイ金貨が、しきりに氣になつた。彼女は敢てそれに手は觸れなかつた。けれども、五分間もぢつとそれのことを考へてることもあつた、敢て云はなければならないが、舌をだらりと出したまゝ。階段を掃除しながらも、手を休めて其處にぢつと佇み、箒のこともまた何もかも世の中のことを忘れてしまつて、自分のポケットの底に輝いてゐるその星を心で見つめてゐた。

さういふ風にして考へ込んでゐる時であつた。テナルディエの上さんが彼女の所へやつて來た。

亭主の云ひつけで彼女はコゼットを探しに來たのであつた。不思議にも彼女は打ちもしなければ怒鳴りつけもしなかつた。

「コゼット、」と彼女は殆んどやさしく云つた、「すぐにおいで。」

間もなくコゼットは天井の低いかの廣間にはひつて來た。

見知らぬ男は、携へてゐた包みを取り上げて、それを解いた。中には、小さな毛織の着物、胸掛、綿麻（めんあさ）の下着、裾着、襟卷、毛の靴下、靴、凡て八歳の小娘に要する一切の衣裳がはひつてゐた。みな色は黑であつた。

「さあお前、」と男は云つた、「これを持つて行つてすぐに着ておいでなさい。」

日が出やうとする頃、戸を開け初めたモンフェルメイの人々は、見すぼらしい服裝（なり）をした老人が、腕に薔薇色の大きな人形を抱へた喪服の小娘の手を引いて、パリー通りを歩いてゆくのを見た。彼等はリヴリーの方へ進んで云つた。

それはかの旅客とコゼットであつた。

誰もその男を知つてる者はなかつた。またコゼットも今は襤褸を着てはゐなかつたので、多くの者はそれと氣附かなかつた。

コゼットは其處を立ち去りつゝあつた。誰と共に？　自らそれを知らなかつた。何處へ向

つて？　自らそれを知らなかつた。たゞ彼女の知つてゐたことは、今や自分はテナルディエの飲食店を後にしてゐるといふことのみであつた。誰も彼女に別れを告げようとする者も居なかつた、また彼女も誰に別れを告げようとも思はなかつた。自分が惡みまた人々からも惡まれたその家から、彼女は出て行つたのである。

憐れなるやさしき娘よ、その心はこれまでたゞ壓迫をのみ受けてゐたのである！

コゼットは大きな眼を見開き、大空を見ながら、しつかりした足取りで歩いてゐた。彼女は自分の新らしい胸掛のポケットにルイ金貨を入れてゐた。時々身を屈めてはちらとそれを覗き込み、それから老人を見上げた。彼女は宛も慈悲深い神の近くに居るやうな心地がした。

十　最善を求むる者は時に最惡を得

テナルディエの女房は例の通り亭主の爲すまゝに任して置いた。彼女は何か大事を豫期してゐた。男とコゼットとが立ち去つた時、テナルディエは十五分餘りもぢつとしてゐたが、やがて女房をわきに呼んで、千五百法を見せた。

「それだけですか！」と彼女は云つた。

二人が家を持つて以來、彼女が亭主の仕事に批評がましい口を出したのは、それが初めてであつた。

それは見事に的に當つた。

「なるほど、お前の云ふ通りだ。」と亭主は云つた。「馬鹿をやつた。帽子を取つてくれ。」

彼は三枚の紙幣を折つてポケットにつゝ込み、大急ぎで出て行つた。然し彼は方向を間違へて、初め右の方へ行つた。それから近所の者に尋ねて本當の方向を知つた。アルーエットと男とはリヴリーの方へ行くのが見られたさうである。彼はその言葉に從ひ、獨語を云ひながら大股に進んで行つた。

「あの男は黄色い着物を着てるが正しく大金持ちだ。俺は馬鹿だつた。初めに二十錢出し、それから五法、それから五十法、それから千五百法、それも無雜作に出してしまつた。一萬五千法でも出したかも知れない。だが追つつけるだらう。」

それからまた、子供のために前から用意してきた着物の包み、それが不思議だつた。それには何か祕密があるに相違なかつた。祕密を掴んでおいてそれを放すといふことがあるものではない。金持の祕密は金を含んだ海綿と同じである。それを搾る道を知らなければならない。さういふ考へが彼の腦裏に渦卷いた。「俺は馬鹿だつた。」と彼は獨語つた。

モンフェルメイを出て、リヴリーへ行く道が曲つてゐる所まで行くと、その道が高原の上に續いてゐるのが遠くまで見渡される。で彼は其處まで行つたら、男と娘との姿が見えるものと思つてゐた。それで眼の屆く限り見渡してみたが、何にも見えなかつた。彼はまた人に尋ねてみた。その間に彼は時間を失つてゐた。通りがゝりの人々の言葉では、彼が探してる男と子供とは、ガンニーに面した森の方へ行つたといふことであつた。彼はその方向へ急いだ。

二人は先に出かけてゐた。然し子供の足は遲い。そして彼は早く歩いてゐた。その上その邊の地理に彼は精しかつた。

突然彼は立ち上つて、額を叩いた。宛も大事なことを忘れてゐて引返さうとしてる者のやうであつた。

「小銃を持つて來るんだつた！」と彼は獨語つた。

テナルディエは二重の性格を持つた男であつた。さういふ男は屢々、誰も氣附かぬうちに人々の間を通りぬけ、また誰にも認められずに姿を隱してしまふものである。なぜなら、そのたゞ一方面だけをしか見せないやうに出來てるから。多くの者は、さういふ風にして半ば物影に潜んで生活するやうに出來てゐる。平和な普通の場合には、テナルディエは、正直な商人、善良な市民――である、とは云はないが――となるに足るだけのものを持つてゐた。と同時にまた、或る場合になると、底の性質をもたげさせるやうな或る事件が起ると、彼は惡黨たるに足るだけのものを持つてゐた。底に怪物を藏した商人であつた。彼が生活してる家の片隅には、惡魔が時々蹲つて、自分が作つたその醜い傑作の前に思ひに耽つたに違ひない。

一寸躊躇した後、彼は考へた。

「えゝ、愚圖々々してるうちには逃げてしまふ！」

そして彼は眞直に大急ぎで進んでいつた、宛も鵰鴟（しやこ）の群を嗅ぎつけた狐のやうに敏捷に、また殆んど確信があるやうな樣子で。

果して、池の所を通りすぎ、ベルヴュー並木道の右手にある廣い粗林を斜に横ぎつて、シニル修道院の昔の水道の覆ひの上を走つて始んど丘を取り卷いてゐる芝生の小道まで達した時、彼は待ちに待つてゐた一つの帽子が藪の上から見えてゐるのを認めた。それはかの男の帽子であつた。藪は低かつた。テナルディエは、男とコゼットとが其處に坐つてゐるに違ひないと思つた。コゼットの方は小さいので見えなかつたが、人形の頭が見えてゐた。

テナルディエの見當は間違つてゐなかつた。男は實際其處に坐つて少しコゼットを休まして

ゐたのである。テナルディエは藪をまはつて、追ひかけて來たその二人の眼の前に突然現はれた。

「御免下さい。」と彼は息を切らしながら云つた。「こゝにあなたの千五百法を持つて參りました。」

さう云ひながら彼は、三枚の紙幣を男の前に差出した。

男は眼を擧げた。

「それは一體どういふつもりですか。」

テナルディエは丁寧に返事をした。

「旦那、コゼットを返していたゞきたいと申すのでございます。」

コゼットは身を震はして、男にひしと取り縋つた。

男はテナルディエの眼の中を覗き込みながら、一語々々ゆつくりと答へた。

「君が、コゼットを返して貰ひたいのですと？」

「はい、旦那、返して頂きませう。かういふわけでございます。私はよく考へてみました。實際私は旦那に娘をお渡しする權利はありませんのです。御覽の通り私は正直な人間でございます。この娘は私のものではなく、その母親のものでございます。私にこの娘を預けたのは母親ですから、母親にだけしか渡すことは出來ませんのです。母親は死んでゐるではないかと旦那は仰言るでせう。御道理です。で私はこの場合、この人に子供を渡してくれといつたやうな何か母親の署名した書附を持つて參つた人にしか、子供を渡すことは出來ませんのです。さうではございませんでせうか。」

男は何とも答へないでポケットの中を探つた。テナルディエは紙幣のはひつた紙入れがまた現はるゝのを見た。

テナルディエは嬉しさにぞつと身を震はした。

「うまいぞ！」と彼は考へた、「一つ談判を開いてやらう。俺を買收するつもりだな。」

紙入れを開く前に、旅客はあたりを見まはした。全く寂寞たる場所であつた。森の中にも谷間にも一人の人影も見えなかつた。で男は紙入れを開いた。そして中から、テナルデエが待つてゐた一掴みの紙幣ではなく、一枚の小さな紙片を取り出した。男はそれを開いて、テナルディエの前に擴げたまゝそれをつき出して云つた。

「道理です。これを讀んで貰ひませう。」

テナルディエは紙片を取り上げて讀んだ。

モントルーイ・スュール・メールにて、千八百二十三年三月二十五日

テナルディエ様

ファンティーヌ

此の人へコゼットを御渡し下されたく候。細かなる負債は此の人より支拂ひ致す可く候

謹んで御挨拶申上候。

「君は此の署名を覺えてゐませうね。」と男は云つた。

それは如何にもファンティーヌの署名であつた。テナルディエもそれを認めた。

もう何等抗辯の餘地はなかつた。彼は二重の激しい憤懣の情を感じた、望んでゐた買收を諦めなければならない憤懣と。男は續けて云つた。

「その書附は娘を渡したしるしとして納めておくがいゝ。」

テナルディエは整然と退却した。

「この署名は巧みに似せてある、」と彼は口の中で呟いた、「だがまあ仕方がない。」

それから彼は絶望的な努力を試みた。

「旦那、」と彼は云つた、「宜しうございます。あなたがその人ですから。然し『細かな負債』を拂つて頂かなければなりません。だいぶの金額になります。」

男は立ち上つた。そして埃りになつた擦り切れた袖から指先で塵を拂ひながら云つた。

「テナルディエ君、この正月に母親は百二十法君に借りがあると云つてました。所が君は二月に五百法の覺え書を送つてきて、二月の末に三百法と三月の初めに三百法受取つてゐる。その時から九ケ月たつてゐるので、約束の通り月に十五法として百三十五法になるわけです。所が君は前に百法餘計に受取つたので、殘りの金は三十五法になるわけです。それに對して先刻私は千五百法拂つて上げたのです。」

テナルディエの氣持ちは、丁度狼が係蹄にかゝつてその鐵の齒で押へつけられた時のやうなものであつた。

「この畜生、何者だらう？」と彼は考へた。

その時彼は狼と同樣のことをした。彼は飛び上つた。大膽な態度は前に一度成功したのであつた。

「名前も分らない旦那、」と此度は丁寧なやり方をすてゝ決然と彼は云つた、「私はコゼットを連れて歸るまでです。さもなければ三千法頂きませう。」

男は靜に云つた。

「さあおいで、コゼット。」

彼は左手にコゼットの手を取り、右手で地に置いてゐた杖を拾ひ上げた。

テナルディエは、其杖が如何にも大きいことゝ、あたりが寂寞としてゐることゝを認めた。二人が立ち去つてゆく時、男の少し圓くなつた廣い肩とその大きな拳とを、テナルディエは眺めた。

それから彼の眼は、自分自身を顧みて、自分の細い腕と痩せた手との上に落ちた。「俺は實際馬鹿だつた。」と彼は考へた、「小銃も持たずにさ。獵に來たわけなのに！」

それでも彼はなほ獲物を逃さうとしなかつた。

「何處へ行くか見屆けてやれ、」と彼は云つた。そして遠くから二人の跡をつけ初めた。彼の手には二つのものが殘つてゐた。ファンティーヌの署名した紙片の苦々しさと、千五百法の多少の慰藉と。

男はコゼットを連れて、リヴリーとボンディーの方へ行つた。彼は頭を垂れゆるやかに足を運んで、何か考へ續けてゐるやうなまた悲しげな樣子であつた。冬のために森は透し見らるるやうに粗らになつてゐたので、テナルディエは可なり後ろの方遠くに居たがなほ二人の姿を見失はなかつた。時々男はふり返つて、跡をつけられてはしないかを眺めた。すると突然彼はテナルディエを見附けた。彼は俄にコゼットと共に深い木立の中にはひつた。そして二人の姿は見えなくなつてしまつた。「惡魔め！」とテナルディエは云つた。彼は足を早めた。

木立が込んでゐたので、彼は二人に近寄らなければならなかつた。男は最も茂みの深い所に達した時、ふり返つてみた。テナルディエは木の枝の間に姿を隱さうとしたが駄目だつた。彼は男の眼に入らざるを得なかつた。男は不安な一瞥を彼に與へ、それから頭を振つてまた歩き出した。テナルディエはまたその跡をつけた。さうして彼等は二三百歩ばかり進んだ。と突然男はまたふり向いた。彼はテナルディエを認めた。そして此度は極めて凄い顏をしてぢつと睥めた。でテナルディエも、それ以上行つたとて「無益」であると考へた。彼は後へ引返した。

十一　九四三〇號再び現はれコゼットその籤を引く

ジャン・ヴァルジャンは死んだのではなかつた。

海へ落ちた時、否寧ろ自ら海に身を投じた時、彼は前に述べた通り鎖から解かれてゐた。彼は水中をくゞつて碇泊中の或る船の下まで泳ぎついた。一艘の小舟がその船に繫いであつた。彼は晩までその小舟の中に隱れてゐることが出來た。夜になつて再び泳ぎ出し、ブラン岬から程遠からぬ海岸に達した。金は持つてゐたので、其處で着物を手に入れることが出來

た。パラギエの附近に一軒の居酒屋があつて、その當時脱獄囚のために着物を賣つてゐた。非常に儲かる商賣ださうである。それからジャン・ヴァルジャンは、法律の眼と社會の制度とを逃れんとするかの凡ての悲しい脱走人等が爲す如く、ひそかな曲りくねつた道程を取つた。彼はボーセの近くのブラドーに最初の隱れがを見出した。それからブリアンソンの近くのグラシ・ヴィヤールの方面へ進み、上アルプ縣にはひつた。手探りの不安な逃走であつて、分れ途などは全く不明な土龍の穴のやうな道程であつた。後になつて彼の逃走の跡は多少其筋の見出す所となつた、即ち、エーン縣ではシヴリューの土地、兩ビレネー縣ではシャヴェール村の近くのグランジュ・ドゥ・ドーメクと云はれてゐるアコンの片隅、それからペリグーの附近ではシャベル・ゴナゲー區のブリュニー。彼は最後にパリーにはひつた。それから彼がモンシェルメイへ來たのは讀者の既に見た所である。

パリーへ來てからの第一の仕事は、七八歳の小娘のために喪服を購ふことであり、次に住居を求めることであつた。それが濟んで、彼はモンフェルメイへ赴いた。

讀者の既に知る如く、彼はこの前の逃走の時には、モンフェルメイか又はその附近にひそかな旅をしたのであつた。官憲もそのことはうす〳〵知つてゐた。

けれども今や彼は死んだと思はれてゐた。そのために彼を蔽うてゐる暗闇は一層深くなつてゐた。パリーで彼は、自分のことを掲載してゐる新聞を一つ手に入れた。彼はそれで安心を覺え、宛も實際に死んだやうな平和を覺えた。

テナルディエ夫婦の爪牙からコゼットを救ひ出した日の夕方、ジャン・ヴァルジャンは再びパリーにはひつた。夕暮の頃コゼットと共にモンソーの市門からはひつたのであつた。その市門の所で幌馬車に乘つて、天文臺の廣つ原まで行つた。其處で馬車を下りて、馭者に金を拂ひ、コゼットの手を引いて、二人で闇夜の中を、ウールシーヌとグラシエールの兩郭に隣してゐる人氣のない通りを通つて、オビタル通りの方へ進んで行つた。

コゼットに取つては、その日は感慨の深い不思議な一日であつた。寂しい飲食店で買つた麵麭とチーズとを籬の影で食べたこともあつた。度々馬車を代へたり、暫くは徒歩で行つたりした。彼女は少しも不平をこぼさなかつた。けれともだいぶ疲れてゐた。歩きながら次第に彼女が手を引つぱるやうになるので、ジャン・ヴァルジャンもそれに氣がついた。彼はコゼットを脊中に負つた。コゼットは人形のカテリーヌを手に持つたまゝ、頭をジャン・ヴァルジャンの肩につけて、そこに眠つてしまつた。

第四編　ゴルボー屋敷

一　ゴルボー氏

今から四十年ばかり前のことである。一人寂しく歩き廻つて、サルペートリエール救濟院のある奥深い裏通りへはひつて行き、オピタル通りをイタリー市門の方まで進んで行くと、遂にもうパリーの町も盡きたと思はれるやうな一郭まで達するのであつた。其處は、通行人がある所を見ると僻地でもなく、人家や街路がある所を見ると田舍でもなく、田舍の街道のやうに通りには轍の跡があり草が茂つてゐる所を見ると町でもなく、人家がごく高い所を見ると村でもなかつた。では一體どういふ所なのか？　人が住んではゐるが誰の姿も見えない場所であり、ひつそりとしてはゐるがやはり誰かゞ居る場所であつた。それは大都市の一並木街であり、パリーの一街路ではあるが、夜は森の中よりも一層恐ろしく、晝は墓場よりも一層陰氣な所であつた。

それは馬市場といふ古い一郭であつた。

もしその馬市場の壞れかゝつた四つの壁の向うまで進んでゆき、高い壁で圍まれた菜園を右手に過ぎ、大きな海狸の巣に似たタン皮の束が立つてゐる牧場の所を通り、木片や鋸屑や鉋屑などが山となつてその上には大きな犬が吠えて居りまた木材が一杯並べてある庭の所を通り、閉めきつた眞黑な小さい門がついてゐて苔に蔽はれ春には雜草の花が咲く長い低い壞れてしまつた壁の所を通り、貼札を禁ずと大きい字が書いてある朽ちはてた汚い土藏の壁の所を通つて、プティー・バンキエ街を通りぬけるならば、遂にヴィーニュ・サン・マルセル街の角まで行けるのであつた。その邊は餘り人に知られてない所であつた。其處に在る一つの工場の側には、兩方の庭の壁に挾まれて、當時一軒の破家があつた。それは外から見ると百姓家位の小さゝであつたが、實際は大會堂ほどの大きさをしてゐた。切妻壁の側面が通りの方に面してゐて、そのために外觀の狹小を來してゐるのであつた。殆んど家のみ體は通りから隱れてゐた。通りからはたゞ戸口と一つの窓とが見えるのみであつた。

その破家は二階建てゞあつた。

それをよく眺むる時第一に不思議な點は、戸口は單なる破屋の戸口らしい粗末なものにすぎないのに、窓の方は、それがもし荒石の壁の中に開けられてるのでなく切石の中にでも据へられてたら、立派な邸宅の窓としても恥かしからぬほどのものであることだつた。

戸口はたゞ腐蝕した木の板で出來てゐて、その板はいゝ加減に四角に割つた薪のやうな恒木で無雜作に止めてあつた。戸口はすぐに急な階段に續いてゐた。階段は段が高く、白塗りで泥と塵とにまみれ、戸口と同じ幅になつてゐて、梯子のやうに眞直に上つていつて二つの壁の間の影に見えなくなつてるのが通りから見られた。戸口がついてる不樣な壁口の上の方は、狹い薄板で張られ、その薄板の眞中に三角形の小窓が開けられてゐて、全體で軒窓となり、また戸口が閉めらるゝ時には戸口硝子の代りとなつてゐた。戸口の內側には、インキに浸した二筆で五二といふ數字が書いてあり、薄板の上には同じ筆で五〇といふ數字が書きなぐつてあつた。全くどちらが本當か分らなかつた。一體何番地なのか？　戸口の上からは五十番地と云ふし、戸口の中からは反對して、いや五十二番地だと云ふ。三角形の小窓には、塵にまみれた何かの襤褸が旗のやうにして掛つてゐた。

窓は大きくて、高さも十分であり、鎧戸もあり大きな窓硝子には框もついてゐた。たゞそれらの大きな硝子には種々な割目があつて、方々紙で張つて隱してあるので却つて目立つてゐた。鎧戸は留金が外れてぐら〳〵してるので、家の者を保護するといふよりも寧ろ下を通る人々に不安を與へてゐた。日除けの横木が所々取れてゐて、其處には縱の板が打附けてあつた。それで初め鎧戸であつたものが、遂には板戸となつた有樣であつた。

時勢外れのやうなその戸口と壞れてはゐるが相當なその窓とが斯く同じ家に見えることは、丁度不似合な二人の乞食を見るやうなもので、二人は一緒に相並んで歩いてはゐるが、同じやうな襤褸のうちにも各違つた顏附をしてゐて、一人は元來の乞食であるが一人は元一個の紳士であつたらしく思へるやうなものであつた。

階段は建物の一部に通じてゐて、其處は極めて廣く、丁度物置のやうであるが、元は一軒の家であつたらしくも思へる。建物の中には丁度腸のやうに廊下が續いてゐて、それから左右に種々な大きさの部室らしいものがあつたが、それも漸く住まへる位のもので、部室といふよりもむしろ小屋と云つた形である。それらの室は周圍の空地に面してゐた。そしてどれも皆、薄暗く、荒々しく、仄白く、陰鬱で、墓場のやうであつた。隙間が屋根にあつたり扉にあつたりするので、それを通じて冷たい光線が落ちて來たり凍るやうな寒風が吹き込んで來たりした。そのどうかかうか住宅らしい建物のうちで面白い見事な一つの點は、蜘蛛の巢の大きいことであつた。

入口の戸の左手に、往來に面して身長位の高さの所に、塗りつぶした軒窓が一つあつて、四角な壁龕みたいな形をして、通りがゝりの子供等が投げ込んでいつた石が一杯はひつてゐた。

その建物の一部は近頃ではもう壊れてしまつてゐる。けれども今日なほ殘つてるものを見ても、昔はまだ大きかつたことが察せられる。その全部の建物は、まだ殆んど百年の上にはなるまい。百年と云へば、會堂ではまだ青年であるが、人家ではもう老年である。人間の住居は人の短命にあやかり、神の住居は神の永生にあやかるものらしい。

郵便配達夫はその破家を、五十――五十二番地を呼んでゐた。けれどもその一郭では、ゴルボー屋敷といふ名前で知られてゐた。

この呼名の由來は次の通りである。

本草學者が雜草を集めるやうに種々な逸話をかき集め、記憶のうちに下らない日附を針で止めることばかりをやつてる些事輯集家等は、十八世紀に千七百七十年頃に、二人の代言人がパリーのシャートレーに住んでゐたことを知つてる筈である。一人をコルボーと云ひ、一人をルナールと云つてゐた。ラ・フォンテーヌの物語りにある烏（コルボー）と狐（ルナール）との二つの名前である。如何にも會合の席で冷笑（ひやかし）の種となるに適してゐた。そして間もなく、變なもぢりの詩句が法廷の廊下に擴がつていつた。

コルボーさんは椅子に腰掛け、

差押物件を衝へてゐたりぬ。
ルナールさんは匂ひに惹かされ、
斯ういふ話を彼にしぬ、
「まあ今日は！」……云々
（譯者曰、ラ・フォンテーヌの物語りの初めを參考までに書き下す――烏先生は木の上にとまつて、嘴にチーズを啣へてゐた。狐先生はその匂ひに惹かれて、とんな言葉を彼にかけた。「まあ今日は……云々」）

二人の正直な實際家は、さういふ冷評を苦にし、自分の後ろからどつと起る笑聲に少からず威嚴を傷けられて、名前を變へようと決心し、遂に思ひ切つて國王に請願した。丁度一方には法王の特派員と他方にはラ・ローシュ・エーモンの樞機員とが、二人共恭しく跪き、陛下の御前に於て、床から起きて來た御寵愛のデュ・バリー夫人の露はな兩足に、各自上靴をおはかせ申したその日に、歎願書は國王ルイ十五世に差出された。笑つてゐられた國王はそれをみてなほ笑はれて、心地よく二人の僧の方から二人の代言人の方へ向はれ、その二人の法官の名前を殆んど許してやられた。で國王の允許を以て、コルボー氏は名前に濁點を附してゴル

ボーと名乗ることが出來た。またルナール氏の方はプの字を頭につけてプルナールと名乗ることが出來たが、前者ほど仕合せでなかつたといふのは、第二の名前も第一のと殆んど同じ位に悪い響きの名前(譯者曰、慾張りの窓)であつたからである。

所でその邊の云ひ傳へによれば、そのゴルボー氏がオピタル通り五十――五十二番地の破家の所有者であつたさうである。かの立派な窓を拵へさしたのも彼自身であつたとか。

さういふわけでその破家は、ゴルボー屋敷といふ名前を貰つてゐた。

五十――五十二番地の家のすぐ前には、オピタル通りの並木の間に半ば枯れかゝつた大きな楡の樹が立つてゐた。家の殆んど正面にはゴベラン市門の街路が開けてゐた。その街路には當時人家もなく、鋪石もなく、季節によつて綠になつたり泥を被つたりする醜い樹木が植ゑられてゐて、パリーの外郭の壁に眞直に通じてゐた。硫酸の匂ひが、側の工場の屋根から息をついて吹き出てゐた。

市門はすぐ近かつた。千八百二十三年には外郭の壁もまだ殘つてゐた。

その市門は人の心に痛ましい幻を與へるものであつた。それはビセートルへ行く道であつた。帝國及び王政復古の時代に死刑囚等が刑執行の日にパリーへはひつて來たのは、其處からであつた。千八百二十九年頃にかの所謂「フォンテーヌブルー市門の」殺人事件が行はれたのも其處に於てゞあつた。それは實際に不思議な事件で、官憲もその犯人等を發見することが出來ず、全く不明に終つた慘劇で、遂に解決を得なかつた恐ろしい謎であつた。それから數歩進むとかの不吉なクルーバルブ街になつて、其處では宛もメロドラマの中に見るやうにユルバックがイヴリーの羊飼の女を雷鳴のうちに刺し殺したのであつた。なほ數歩進むとサン・ジャック市門の所の頭を切られた嫌な楡の木立の所に達する。かの博愛者等が斷頭臺を隧すに用ゐた所であり、死刑の前にたぢろきながら堂々とそれを廢することも敢てしてそれを繼續することも敢て出來なかつた商人や市人などの階級の、陋劣不名譽なる刑場であつた。

今より三十七年前に、常に恐ろしい殆んど宿命的なそのサン・ジャックの廣場を外にして、此の陰鬱なオピタル通りのうちでの最も陰鬱な所と云へば、五十――五十二番地の破家の在る今日でも餘り人の好まぬその一隅であつた。

町家は其後約二十五年も後にならなければ其處には建て初められなかつたのである。當時その地は極めて陰慘な場所であつた。前に述べたやうな慘劇を思ひ起させる上に、圓屋根が見えるサルペートリエール救濟院とすぐ柵が近くにあるビセートル瘋癲病院との間にはさまつてゐることも感ぜられるのであつた、卽ち女の狂人と男の狂人との間に在ることも。眼の屆く限りたゞ、屠牛場や市の外壁や、所々に兵營や僧院に見るやうな工場の正面などがあ

るばかりであつた。どちらを見ても、板小屋や白堊塗り。喪布のやうな古い黒壁や經帷子のやうな新らしい白壁。どちらを眺めても、平行した並木、直線的な築塀、平面的な建物、冷かな長い線と佗びしい直角。土地の高低もなければ、建築の彩もなく、一つの襞さへもない。全景が、氷のやうで規則的で醜くかつた。均齊ほど冷かなものはない。均齊は卽ち倦怠であり、倦怠は卽ち悲哀の根本である。絶望は欠伸をする。苦惱の地獄よりもなほ恐るべきものがあるとするならば、それは正しく倦怠の地獄であらう。もしさういふ地獄が實際に存在するものであるならば、此のオピタル通りの一郭は正にその入口であるに違ひない。

けれども、夜の幕が下りてくる頃になると、明るみが消え去つてゆく頃になると、特に冬には、夕暮の寒風が楡の最後の霜枯れの葉を吹き拂ふ頃になると、そして或は闇が深く星の光りもない時、或は月光と風とに雲がち切れる時、此のオピタル通りは俄に恐ろしい趣きに變るのであつた。物の直線的な輪郭は、闇のうちに沈み込み姿を隱して、宛も無限の一片のやうに思はれて來る。其處を通る者は、無數の慘劇の云ひ傳へを思ひ出さないわけにはゆがなくなる。多くの犯罪が行はれたその土地の寂寞さのうちには、何か恐ろしいものが籠つてゐる。闇の中には係蹄が張られてゐるやうな氣がしてくる。漠然たる形の物影が皆怪しいやうに思はれる。並木の間に見える長い四角な空隙が墓穴のやうに感ぜられる。晝間は醜く、夕方はもの佗びしいが、夜は陰慘となる。

夏の夕方などは、楡の木の下に雨に朽ちた腰掛の上に坐つてゐる婆さんなどがあちこちに見られた。それらの婆さん等はよく人に施しを求めてゐた。

なほその一郭は、古く寂れてゐるといふよりも寧ろ廢れ切つてしまつたやうな有樣ではあつたが、その當時から次第に面目が變りつゝあつた。既にその頃から、その變化を見んとする者は急がなければならなかつた。日々に全體のうちに何處かゞ消滅しつゝあつた。今日は固よりもう二十年も前から、オルレアン鐵道の終點がその古い場末の横に設けられて、其處を活氣立たせてゐる。菅府の外れに何處か或る鐵道の終點が設けらるゝ時には、その場末の一區は死滅して一つの市街が生れるものである。人民の運動の大中心地たる都市のまはりに於ては、それらの强大なる機械の響きに、石炭を喰ひ、火を噴出すそれらの驚くべき文明の馬の息吹きに、生命の芽に滿ちた土地は震へ動いて口を開き、人間の古い住居を呑みつくし、新らしいものを吐き出すがやうに思はれる。古い家は崩れ落ち、新らしい家が聳えてくる。

オルレアン鐵道の停車場がサルペートリエール救濟院の敷地に侵入して以來、サン・ヴィクトルの濠や動植物園などに沿つてゐる古い狹い街路は、驛馬車や辻馬車や乘合馬車などの群

が毎日三四回激しく往來するために震へ動き、いつしか兩側の人家は左右に蹴飛されてしまつた。全く事實でありながら云ふだにをかしな事柄が世にはあるものである。そして、大都市に於ては太陽は南向きの人家を產み出し大きくなしてゆくといふことが眞實である如くに、頻繁なる馬車の往來は街路を廣くするといふことも確かな事實である。そして今や新生命の徵候が明かに見えてゐる。その田舍風な古い一郭のうちに、最も寂然たる片隅に、まだ餘り通行人さへも無いやうな所にさへ、鋪石が見られ、歩道の區劃も次第に匐ひ伸びようとしてゐる。或る朝、千八百四十五年七月の或る記憶すべき朝、瀝青（チャン）の一杯はひつた黑い釜が煙つてゐるのが其處に突然見られた。その日こそ、文明はそのルールシーヌ街に到着し、パリーはそのサン・マルソー場末まではひつて來たと、始めて云ふことが出來たのであつた。

二　巢と鶯との巢

ジャン・ヴァルジャンが止つたのはそのゴルボー屋敷の前であつた。野生の鳥のやうに、最も寂しい場所を彼は自分の巢に選んだのである。

彼は胴衣（チョッキ）の中を探つて、一種の合鍵を取り出し、戸口を開き、それから注意して再びそれを閉め、コゼットを負つたまゝ階段を上つて行つた。

階段を上りきつて、彼はポケットからも一つの鍵を取り出し、それでまた別の扉を開いた。彼がはひつて、すぐにまた閉めきつたその室は、可なり廣い一種の屋根部屋みたいな有樣をしてゐて、床（ゆか）に敷かれた一枚の疊と、一つの卓子と、數個の椅子とが備へてあつた。火が燃えてゐて外から煖（たき）まで見えるやうなストーヴが一つ片隅にあつた。表通りの街燈が、その貧しい室のうちにぼんやりした明るみを投じてゐた。奥の方に別室があつて、たゝみ寢臺が置いてあつた。ジャン・ヴァルジャンは子供をその寢臺の上に抱へていつて、眼を覺さないようにそつと下した。

彼は燈鎖を打ち合して、蠟燭をともした。さういふものは皆前以て卓子の上に用意されてゐたのである。そして彼は前夜のやうにコゼットの顏を眺めはじめた。その眼附には喜びの情が溢れて、親切と情愛との表情は今にもはち切れさうであつた。小娘の方は極端な強さか極端の弱さかにのみ屬する、かの心許した靜安さを以て、誰と一緒に居るのかも知らないで熟睡し、何處に居るのかも知らないで眠り續けてゐた。

ジャン・ヴァルジャンは身を屈めて、子供の手に、彼は脣を當てたのであつた。

九ケ月前には、同じく眠りについたその母親の手に、その時と同じやうな悲しい痛ましい敬虔な感情が、今彼の心に一杯になつた。

彼はコゼットの寢臺の側に跪いた。

もうすつかり夜が明け放れても、子供はなほ眠つてゐた。十二月の太陽の青白い光りが、その佗びしい室の窓硝子を通して、影と光りとの長い筋を天井に落してゐた。その時突然、重く荷を積んだ荷車が通りの眞中を通つて、その破家を暴風雨(あらし)が襲つてきたかのやうに搖り動かし、土臺から屋根まで震動さした。

「はい、お上さん！」とコゼットと飛び起きて叫んだ。「こゝに居ます、こゝに居ます！」

そして彼女は、まだ眠たさに眼瞼も半ば閉ぢたまゝで、寢臺から飛び下り、壁の隅の方へ手を差出した。

「あゝ、どうしよう、箒は！」と彼女は云つた。

その時彼女ははじめてすつかり眼を開いた、そしてジャン・ヴァルジャンの微笑んでゐる顏を見た。

「あら、さうだつた！」と子供は云つた。「お早うございます。」

子供は天性身自ら幸福と喜悅であるから、すぐに親しく喜悅と幸福とを受け容れるものである。

コゼットは寢臺の下に在る人形のカテリーヌを見つけ、それを取り上げた。そして遊びながら、ジャン・ヴァルジャンへ種々なことを尋ねた。——此處は何處であるか？　パリーとは大きな町であるか？　テナルディエの上さんの居る所から遠いのか？　上さんがまたやつて來はしないか？　其他種々なことを。それからふいに彼女は叫んだ、「ほんとに此處は綺麗ですこと！」

實は見すぼらしい小屋同樣の所であつたが、彼女はそこで身の自由を感じたのであつた。

「掃除をしませうか。」と遂に彼女はいつた。

「いやお遊び。」とジャン・ヴァルジャンは云つた。

さういふ風にして一日は過ぎた。コゼットは、別に何にも聞きたがさうともせず、その人形と老人との間に在つてたゞもう無性に嬉しかつた。

三　二つの不幸集つて幸福をなす

翌日の曉方、ジャン・ヴァルジャンはまたコゼットの寢臺の側に居た。彼は其處で身動きもしないで待つてゐて、コゼットが眼を覺すのを見守つてゐた。

或る新らしいものが彼の心のうちにはひつて來てゐた。

ジャン・ヴァルジャンは嘗て何人をも愛したことはなかつた。二十五年前から彼は世に孤立

してゐた。彼は嘗て、父たり、愛人たり、夫たり、また友たることがなかつた。徒刑場に於ける彼は、意地悪く、陰鬱で、頑固で、無學で、また慓悍であつた。その老囚徒の心は全くわるずれてゐなかつた。頭に殘つてゐる姉と姉の子供等との記憶も漠然として杳かで、遂には全く消え失せてしまつた。彼はその人々を見出さんためにあらゆる手段をつくしたが、どうしても見出すことが出來なくて、遂には忘れてしまつた。人間の性質といふものはさうしたものである。其他の青春時代のやさしい情緒も、もしさういふものがあつたとしても、深淵のうちに消滅してしまつた。

彼がコゼットを見た時、コゼットを取り上げ連れ出し救ひ出した時、彼は自分の臓腑が動き出すのを感じた。彼のうちに在つた感情と愛情とは凡て眼覺め來つて、その子供の方へ動いていつた。彼は子供が眠つてゐる寢臺の近くに寄つていつて、喜びの情に震へてゐた。彼は母親のやうに或る内心の熱望を感じてゐた、そしてどうしてだか自ら知らなかつた。愛し初むる心の大なる不可思議な動きこそは、極めて理解し難いまた樂しいものなのである。

年老いたる憐れな而も極めて若々しい心よ！

たゞ、彼は五十五歳でありコゼットは八歳であつたから、彼が生涯のうちに持ち得た凡ての愛情は、一種の云ふ可らざる輝きのうちに溶け込んでしまつた。

それは彼が出逢つた第二の白光であつた。かのミリエル僧正は彼の心の地平線に德の曙を齎し、コゼットは其處に愛の曙を齎した。

初めの數日はその恍惚のうちに過ぎ去つた。

コゼットの方でもまた、自ら知らずして別人となつてしまつた。憐れなる幼き者よ！　母に別れた時はまだごく小さかつたので、もうそのことは頭に少しも殘つてゐなかつた。何にでも絡みつく葡萄の若芽のやうな子供の通性として、彼女も愛しようとつとめてゐた。然しそれはうまくゆかなかつた。皆が彼女を排斥した、テナルディエ夫婦も、その子供等も、また他の子供等も。で彼女は犬を愛したが、それも死んでしまつた。それからはもはや、何物も彼女を喜ぶ物はなくまた誰も彼女を喜ぶ者はゐなかつた。語るも悲しいことではあるが、そして前に述べておいたことではあるが、彼女は八歳にして既に冷かな心を持つてゐた。それは彼女の罪ではなかつた。彼女に缺けてゐたのは愛の能力では決してなかつた。悲しいかな彼女に缺けてゐたのは、愛する機會であつた。それ故初めての日からして、彼女のうちの凡ての感じと考へとは、そのお爺さんを愛しはじめたのであつた。彼女は嘗て知らなかつた氣持ちを覺えた、花が開くやうな一種の心地を。

お爺さんは、もはや彼女には年老いてゐるともまた貧しいとも思へなかつた。彼女の眼に

はジャン・ヴァルジャンは美しかつた、丁度その物置のやうな室が綺麗と思はれたやうに。

斯くの如きは實に、曙と幼年と青春と喜悅とから生れたものである。そして新らしき土地と新しき生活とは如何に貴いものであるか。その陋屋の上に映ずる美しき幸福の影ほど樂しいものは、世に何物もない。吾人は皆、樂しい幻の室を生涯に一度は持つてゐたのである。

自然は、五十年の歲月を距てゝ、ジャン・ヴァルジャンとコゼットとの間に深い溝渠を置いてゐた。然し運命はその溝渠を埋めてしまつた。年齡に於て異り不幸に於て相似たる二つの根こぎにされたる生涯は、運命のために俄に一つ所に持ち來され、抗す可らざる力を以て結合させられた。實にその二つは互に補ひ合つたのである。コゼットの本能は父を探し求め、ジャン・ヴァルジャンの本能は一の子供を探し求めてゐた。互に出逢つたことは、互に見出したことであつた。彼等の二つの手が相觸れた神祕な瞬間に、はやその二つは蠟着してしまつた。それら二つの魂が相見えた時、兩者は互に求め合つてゐたものであることを感じて、互に堅く抱き合つてしまつた。

最も廣いまた絕對的の意味に於て、云はゞ墳墓の壁によつて凡てのものから距てられて、ジャン・ヴァルジャンは鰥夫であり、コゼットは孤兒であつた。そしてさういふ境涯のために、天國的な意味に於て、ジャン・ヴァルジャンはコゼットの父となつた。

實際、シェルの森の中で、闇の中にジャン・ヴァルジャンの手がコゼットの手を取つた時、コゼットの受けた神祕な印象は、一の幻ではなくて現實であつた。その子供の運命のうちにその男がはひつて來たことは、實に神の出現であつた。

そしてまたジャン・ヴァルジャンは、隱れ家をよく選んでゐた。彼は殆んど缺くる所なき安全さを以て其處に居ることが出來たのである。

彼がコゼットと共に住んだ別室附きの室は、通りに面する窓のついてゐる室であつた。その窓は此の家に在る唯一つのものであつたから、前からも横からも人に見らるゝ恐れは少しもなかつた。

この五十――五十二番地の建物の一階は、荒廢した小屋同樣で、八百屋等の物置になつてゐて、二階とは何等の交渉もなかつた。一階と一階とを距てる床には、引戸も階段もなく、その破屋の横隔膜のやうな觀があつた。二階には、前に云つた通り、多くの室と數個の屋根部屋とがあつたが、たゞその一つに一人の婆さんが住んでゐるのみだつた。その婆さんがジャン・ヴァルジャンに一切の用をしてくれた。その他には誰も住んでゐなかつた。

婆さんは借家主といふ名義であつたが、實は門番の役目をしてゐるにすぎなかつた。クリスマスの日にジャン・ヴァルジャンに住居を借してくれたのは婆さんであつた、まだ定期收入は

持つてるが、スペインの公債に手を出して失敗したので、孫娘と共に住みに來るのだと、ジャン・ヴァルジャンは婆さんに云つて置いた。彼は六ケ月分の前拂ひをして、前に述べた通りの道具を備へるやうに婆さんに賴んで置いた。かの晩煖爐に火を焚き、二人が來る準備をすつかりしてくれたのは、その婆さんであつた。

數週間過ぎ去つていつた。二人はその慘めな室の中に、樂しい生活をしてゐた。

夜が明けるとから、コゼットは笑ひ戯れ歌つてゐた。小供といふものは小鳥と同じく、朝の歌を持つてるのである。

時とするとジャン・ヴァルジャンは、コゼットの皺のきれた眞赤な小さい手を取つて、それに脣をつけることもあつた。憐れな子供は、いつも打たれることばかりに馴れてゐたので、その意味が分らずに、恥かしがつて手を引込めた。

また時には、コゼットは眞面目になつて、自分の小さな黑服を眺めることもあつた。彼女はもう襤褸ではなく、喪服を着てゐた。彼女は困窮から出て普通の生活にはひつてゐた。

ジャン・ヴァルジャンは彼女に讀むことを敎へ初めた。彼はさうして子供に綴りを敎へながら、自分が徒刑場で讀方を學んだのは惡事をせんがための考へからであつたことを時々思ひ出した。その考へは今では子供に讀方を敎へることに變つてゐた。そしてその老囚徒は、天使のやうな思ひ沈んだ微笑を洩した。

其處に彼は、天の使命を感じ、人間以上の何かの意志を感じ、我を忘れて瞑想に耽るのであつた。善き考へも惡き考へと同じく、その深い淵を持つてゐるものである。

コゼットに讀むことを敎へ、また彼女を遊ばせること、其處に殆んどジャン・ヴァルジャンの全生命があつた。それからまた彼は、母親のことを語つてきかせ、神に祈りをさした。

コゼットは彼をお父さんと呼んでゐた。そして他の名を知らなかつた。

コゼットが人形に着物をきせたりぬがしたりするのを眺め、また彼女が歌ひさゞめくのに耳を傾けて、彼は幾時間もぢつとしてゐた。その時からして、人生は興味に滿ちたものゝやうに思はれ、人間は善良で正しいものゝやうに感ぜられて、もはや心のうちで何人をも咎めず、また子供に愛せられてる今となつては、遠く老年になるまで生き長らへてはいけないといふ理由は何等認められなかつた。宛も麗はしい光明によつて輝かされるがやうにコゼットによつて輝かされる未來を、彼は自分に見出してゐた。凡そ如何なる善人と雖も、全く私心を有しない者はない。彼も時としては、コゼットが美しくはなるまいと考へて、一種の滿足を感じてゐた。

これは一個の私見にすぎないが、然し吾人は考ふる所を凡て玆に云つてしまひたい。即ち

コゼットを愛し初めた頃のジャン・ヴァルジャンの狀態を見てみるに、なほ正しい道を續けて進まんがためには彼はその支持者を別に必要としなかつたであらうかどうかは、疑はしい所である。彼は、人間の惡意と社會の不幸とを新たなる方面より眼に見たのであつた。勿論それは不完全にしてたゞ眞理の一面觀にすぎないものではあつたが。そしてファンティーヌのうちに代表された女の運命と、ジャヴェルのうちに具現された官憲の權力とを、眼に見たのであつた。彼は徒刑場に歸つた。それも此の度は善を爲したがために。彼は新たなる苦しみを飲んだ。嫌惡と疲勞とにまた囚へられた。僧正の記憶さへも、後にまた勝利を得て輝き出しはするが兎に角一時は曇らんとすることもあつた。そしてまた實際その聖き記憶も遂には弱くなつてきた。恐らくジャン・ヴァルジャンは、落膽して再び墜落せんとする瀬戸際にあつたのかも知れない。然るに彼は愛を知つて、再び强くなつた、嗚呼彼も亦殆んどコゼットと同じくよろめいてゐたのである。が彼はコゼットを保護すると共に、コゼットは彼を强固にした。彼によつて、彼女は人生のうちに進むことが出來た。そして彼女によつて、彼は德の途を續けることが出來た。彼は少女の柱であつた、そして少女は彼の杖であつた。實に公正なる運命の測る可らざるまた犯す可らざる神祕よ！

四　借家主の眼に觸れしもの

ジャン・ヴァルジャンは用心して晝間は決して外へ出なかつた。そして毎日夕方に二三時間散歩をした、時には一人で、多くはコゼットと共に、その並木通りの最も寂しい横町を選み、また夜になると教會堂にはいつたりして。彼は一番近いサン・メダール會堂によく行つた。コゼットは連れて行かれない時は婆さんと一緒に留守をした。けれども老人と一緒に出かけるのを彼女は最も好んでゐた。人形のカテリーヌと樂しく差向ひでゐるよりも、老人と一緒に一時間の散歩をする方を好んでゐた。老人は彼女の手を引いて、歩きながらいろ〳〵面白いことを話してくれた。

コゼットはごく快活な兒になつた。

婆さんは部室を整へたり料理をしたり、食物を買ひに行つたりした。

彼等は、いつも少しの火は絶さなかつたが、ごく困つてる人のやうにして、質素に暮してゐた。ジャン・ヴァルジャンは室の道具をも初めのまゝにして置いた。たゞコゼットの寢室へ行く硝子のはまつた扉を、すつかり板の扉に變へたばかりだつた。

彼はやはりいつも、黄色いフロックと黑いズボンと古い帽子とを身につけてゐた。往來で

は貧乏人としか見られなかつた。親切な女達はふり向いて彼に一錢銅貨をくれたこともあつた。ジャン・ヴァルジャンはその銅貨を受取つて、低く身を屈めた。また時には、慈悲を求めてゐる乞食に出逢ふこともあつた。さういふ時彼はふり返つて誰か見てる者はないかを眺め、そつと乞食に近寄り、その手に貨幣を、大抵は銀貨を、握らしてやつて、足早に立ち去つた。それは彼に不利なことであつた。その一郭では、施しをする乞食といふ名前で彼は知られるやうになつた。

借家主の婆さんは、至つて無愛相で、近所の者のことなら鵜の目鷹の目で探り廻るやうな女であつたが、ひそかにジャン・ヴァルジャンの様子をも探つてゐた。少し耳が遠かつたが、きたそのために非常に饒舌であつた。歯は抜け落ちてしまつて、たゞ上と下とに一本づゝ殘つてゐたが、それを始終噛み合してゐた。彼女は種々コゼットに尋ねてみた。

然しコゼットは、モンフェルメイから來たのだといふことの外は、何にも知らず、何にも語るものが無かつた。見張りをしてる婆さんは或る朝、ジャン・ヴァルジャンがどうも變な様子をして、家の中の人の住んでゐない部室の一つにはひつてゆくのを見つけた。彼女は古猫のやうな足附で後をつけて行つて、身を隱しながら、正面の扉の隙間から彼を窺ふことが出來た。ジャン・ヴァルジャンは、勿論用心に用心をした故か、その扉に脊を向けてゐた。見てゐると、彼はポケットの中を探つて、針箱と鋏とを取出し、それからフロックの裾の裏をほどきはじめ、その口から黄色つぽい一片の紙を引出して、それを擴げた。婆さんはそれが千法の紙幣であるのを認めて喫驚してしまつた。千法の紙幣を見たのはそれが生れて二度目か三度目だつた。彼女は恐れて逃げて行つた。

それからすぐにジャン・ヴァルジャンは婆さんの所へ行つて、その千法の紙幣を細かいのに變へに行つて貰うやうに頼んだ。そして彼は、これは昨日受取つた半期分の定期收入だとつけ加へた。婆さんは考へた。「何處から受取つたんだらう。あの人は晩の六時までは出かけなかつた、そして銀行はそんな頃開いてる筈はない。」婆さんは紙幣を兩替に行きながら、種々想像をめぐらした。さうして、その千法の紙幣は、種々な尾鰭をつけられて、ヴィーニュ・サン・マルセル街の喫驚したお上さん達の間に、盛んな噂をまきちらした。

其後或る日のこと、ジャン・ヴァルジャンは胴衣一枚になつて、廊下で薪を挽いてゐた。婆さんは室の中で片附けものをしてゐた。彼女はたゞ一人であつた。コゼットは薪が鋸に挽かるのに見とれてゐた。婆さんは釘に懸つてゐるフロックを見て、檢べてみた。裏は元の通り縫ひつけられてゐた。婆さんは注意深くそれに觸つてみた。そして裾と袖附との中に、紙の厚みが感ぜられるやうに思つた。乾度千法紙幣が澤山はひつてゐたのであらう。

婆さんはその外、ポケットの中に種々なものがはいつてるのを認めた。前に見た針や鋏や糸ばかりでなく、大きな紙入れ、非常に大いナイフ、それから怪しむべきことには、種々な色の多くの髪。フロックのどのポケットも皆、何か意外の出來事に對する用意の品が一杯はひつてるやうであつた。

破家の人達は、多の終り頃までそのまゝ住んで居た。

五　床に落ちし五法の響き

サン・メダール會堂の近くに一人の貧しい男が居た。彼はいつも其處の廢れた共同井戸の縁に蹲つてゐたが、ジャン・ヴァルジャンはよく彼に施しをしてやつた。その前を通る時は、大抵幾錢かの金を惠んでゐた。時には言葉をかけることもあつた。その乞食を羨む者等は彼は警察の者に違ひないと云つてゐた。それはもう七十五歳にもなる年取つた寺男で、絶えずロの中で祈禱の文句を繰り返してゐた。

或る晩、コゼットを連れないで一人で其處を通つた時、ジャン・ヴァルジャンは、その乞食がいつもの場所に今ついたばかりの街燈の下に居るのを認めた。その男は例の通り、何か祈禱をしてゐるやうな風で身を屈めて居た。ジャン・ヴァルジャンは其處に歩み寄つて、いつもの施與を手に握らしてやつた。乞食は突然眼を上げて、ぢつとジャン・ヴァルジャンの顏を見つめ、それから急に頭を垂れた。その動作は雷光のやうであつた。ジャン・ヴァルジャンはぞつと身を震はした。街燈の光りでちらと見たその顏は、老寺男の平和な信心深い顏ではなくて、恐ろしい見知り越しの顏であるやうに彼には思へた。宛も突然暗闇の中で虎と顏を合したやうな感じを彼は受けた。彼は思はず縮み上り、恐怖して石のやうになり、息をすることも口を利くことも出來ず、其處に居ることもまた逃げ出すことも出來ず、その乞食をぢつと見守つた。乞食はぼろ〳〵の頭巾を被つた頭を垂れて、もう彼が其處に居ることをも知らないがやうであつた。その不思議な瞬間に、ジャン・ヴァルジャンが一言をも發しなかつたのは、本能のため、恐らく自己防禦の隱れた本能のためだつたであらう。乞食はいつもと同じやうな身體つきをし、同じやうな襤褸をまとひ、同じやうな樣子をしてゐた。「いや〳〵！」とジャン・ヴァルジャンは云つた、「俺は氣が狂つたんだ。夢を見たんだ。あり得べからざることだ！」そして彼はひどく心を亂されて家に歸つた。

ちらと見たその顏がジャヴェルの顏であつたとは、彼は殆んど自分自身にさへ云ひ得なかつた。

その夜、彼はそのことを考へ耽りながら、今一度顏を上げさせるために男に何か尋ねてみ

ればよかつたと思つた。

翌日夕暮に、彼はまた其處に行つた。乞食はいつもの場所に居た。「どうだね、爺さん、」とジャン・ヴァルジャンは彼に銅貨をやりながら思ひ切つて云つてみた。乞食は顏を上げた、そして悲しい聲で答へた。「ありがたうございます、親切な旦那様。」それは正しく老寺男であつた。

ジャン・ヴァルジャンはすつかり安心を覺えた。彼は笑ひ出した。「ジャヴェルだなんて、何を見違へたんだらう、」と彼は考へた、「俺ももう眼がぼけて來たのかな。」そして彼はそのことをもはや考へなかつた。

それから數日後のことであつた、晩の八時頃であつたらう、ジャン・ヴァルジャンは室の中に居て、大きい聲でコゼットに綴りを讀ましてゐた。その時彼は、家の戸が開かれてまた閉まるのを聞いた。それが彼には異樣に感ぜられた。彼と一緒にその家に住んでた只一人の婆さんは、蠟燭を儉約するためにいつも夜になるとすぐに寢てしまつてゐた。ジャン・ヴァルジャンは手眞似でコゼットを默らした。誰かゞ階段を上つてくる音が聞えた。或は婆さんが加減が惡くて、藥屋にでも行つたのかも知れない。ジャン・ヴァルジャンは耳を聳てた。足音は重々しく、男のやうな響きであつた。然し婆さんは大きな靴をはいてるし、また年取つた女の足音は男の足音によく似てるものである。それでもジャン・ヴァルジャンは蠟燭を吹き消した。

彼は低い聲で「ごく靜かに寢床におはひり」と囁いて、コゼットを寢かしにやつた。そして彼がコゼットの額に脣をあてゝる間、足音は止つてゐた。ジャン・ヴァルジャンは默つて身動きもせず、脊を扉の方へ向けて、そのまゝぢつと椅子に腰掛けて、暗闇のうちに息を凝らしてゐた。可なり暫くたつても、何の音も聞えなつたので、彼は音のしないように向きを變へた。そして室の入口の扉の方へ眼を上げると、鍵穴から光りが見えた。その光りは、扉と壁とに仕切られた闇黑のうちに、不吉な星のやうに見えてゐた。確かに其處には、誰かゞ手に蠟燭を持ち聞耳を聳てゝゐるのであつた。

數分過ぎて、光りは立ち去つた。たゞ何の足音も聞えなかつた。それでみると、扉の所へ來て立ち聞きしてゐた男は、靴を拔いだに違ひなかつた。

ジャン・ヴァルジャンは着物を着たまゝ寢床に身を投じた。そして終夜眼を閉ぢることが出來なかつた。

夜明け頃、彼は疲れたのでうと〳〵してゐると、廊下の奥にある屋根部屋の扉が開いて軋つたので眼を覺された。それから彼は、前夜階段を上つてきたのと同じ男の足音をきいた。その足音はだん〳〵近づいて來た。彼は寢臺から飛び下りて、鍵穴に眼をおし當てた。その

穴は可なり大きかつたので、前夜家の中にはひり込んできて、扉の所で立ち聞きした、其奴が通つてゆく所を、彼は見てやらうと思つたのである。果してそれは男であつた。然し此度は別に立ち止りもせずに室の前を通りすぎてしまつた。廊下の中はまだ薄暗かつたので、その顏はよく見分けられなかつた。然し男が階段の所まで行つた時、外から差し込む一條の光りが影繪のやうにその姿を浮き出さした。ジャン・ヴァルジャンはそれを後ろからすつかり見て取つた。脊の高い男で長いフロックを着、腕の下には太い杖を持つてゐた。それはジャヴルの恐ろしい後姿であつた。

ジャン・ヴァルジャンは、表通りに面する窓からも一度その男を見ることも出來るのであつた。然しそれには窓を開かなければならなかつた。彼はそれを敢てなし得なかつた。

明かにその男は、鍵を持つてゐて自分の家にでもはひるやうにしてはいつて來たに違ひなかつた。誰がその鍵を與へたのであらう？　一體どういふ譯なのであらう？

朝の七時に、婆さんが室を片附けに來た時、ジャン・ヴァルジャンは鋭い眼附でぢろりと彼女を眺めたが、何にも尋ねはしなかつた。婆さんはいつもの通りの樣子であつた。

掃除をしながら婆さんは彼に云つた。

「旦那は大方、昨夜誰かはひつて來たのを聞かれたでせう。」

その時分その並木通りでは、晩の八時と云へばもう眞暗な夜である。

「なるほど、さうでした。」と彼は極めて自然らしい調子で答へた。「一體どういふ人です。」

「新らしく部室を借りた人でございますよ、家に居ますのは。」と婆さんは云つた。

「そして名前は？」

「よくは存じませんが、デュモンとかドーモンとか、何でもそんな名前でございました。」

「そして何をする人です、そのデュモンさんといふのは。」

婆さんは猫のやうな狡猾な小さい眼で彼を見上げて、そして答へた。

「定期收入を持つてゐられる方でございますよ、旦那のやうに。」

彼女は多分別に何の考へもなくさう云つたのであらうが、ジャン・ヴァルジャンはそれに何かの意味が籠つてゐるやうに感じた。

婆さんが行つてしまつた時、彼は引出しの中に入れてゐた百法の貨幣を包み、それをポケットに入れた。さうするのにも金の音が他に聞えないやうにとよほど注意はしたが、五法の銀貨が一つ手から滑り落ちて、床の上に大きな音を立てゝ轉つた。

夕靄の下りる頃、彼は下りていつて、並木通りを注意深くあちこち見廻した。誰も見えなかつた。通りには全く人影も絶えてゐるやうに思はれた。尤も並木の後ろに隱れようとす

れば隱れることは出來たのである。

彼はまた上つていつた。

「おいで。」と彼はコゼットに云つた。

彼はコゼットの手を取り、そして二人は出て行つた。

第五編　暗がりの追跡に無言の一組

一　計略の稍妻形

讀者がこれから讀まんとする頁のために、またずつと後になつて讀者が出逢ふ頁のために、玆に或る注意をしておく必要がある。

本書の著者が、心ならずも自己の意見を主張してパリーを去つて以來、（譯者曰、ユーゴーがパリー外へ亡命したことを云ふ）既に多くの年月が過ぎ去つてゐる。そして著者が去つて以來パリーは次第に趣きを變へてきた。著者には多少不明なる新らしい町になつてきた。けれども著者がパリーを愛することは、玆にわざ〳〵云ふまでもないことである。パリーは著者の精神の故郷である。たゞ種々の破壞再造を經たので、著者の靑年時代のパリーは、著者が自分の記憶のうちに大切に持つて行つたかのパリーは、今では昔のパリーとなつてゐる。けれどもどうか、そのパリーが今なほ存在するかのやうに語ることを許して頂きたい。著者が讀者を導いて、「斯々の通りには斯々の家がある」と云ふ所にも、今日でははやさういふ通りも家も

無いやうなことがあるかも知れない。もし讀者が勞をいとはないならば、それを調べてみられるもいゝであらう。著者の方では、新らしいパリーを知らないので、眼前に昔のパリーを浮べつゝ貴い幻のまゝに筆を進めてゆくことにする。故國に在つた時に目擊したものゝいくらかを後に殘すことを思ひ、凡てが消え失せはしなかつたと思ふことは、著者にとつて樂しいことである。故國のうちに暮してゐる間は、その街路も自分に無關係なものであり、その窓も屋根も戸口もつまらぬものであり、その壁も他人のものであり、その樹木もありふれたものであり、自分がはひりもしないその家は何の役にも立ないものであり、辿りゆくその鋪道は單なる石くれであると、人は思ふのである。けれども後に至つてもはや故國に身を置かない時には、その街路は貴いものとなり、その屋根や窓や戸口は眼に見られぬものとなり、その壁がほしくなり、その樹木がなつかしくなり、はひりもしなかつたその家を毎日訪れ、その鋪道のうちには自分の內臟や血潮や心を殘してきたのであることを、人は感ずるものである。もはや見られぬそれらの場所、恐らく永久に再び見ることもないそれらの場所、而も心のうちに懷きしめてゐるそれらの場所、それは一種の愁はしい魅力を帶び、夢幻の憂愁を以て浮んでき、眼に見得る聖地の如き趣きを呈し、云はゞフランスそれ自身の形となるのである。そして人はそれらを愛し、その在るがまゝのまた在りしがまゝの姿を想ひ浮べ、それに固執してその何物をも變ずることを欲しない。何故ならば人は、母の面影に對するが如く祖國の姿に執着するものであるから。

それ故に、過去のことを現在のこととして語るを許して貰ひたい、それから次に、そのことを注意しておかるゝやう讀者に願つて、そして吾々は物語の筆を續けよう。

さてジャン・ヴァルジャンは、オピタル通りを離れて、裏通りのうちに進み入り、出來るだけ曲りくねつた方向を取り、追跡されてゐはしないかを確かめるために、時々は急にもと來た方へ戻つたりした。

そのやり方は、狩り立てられた鹿がよくやることである。足跡が殘るやうな場所では、そのやり方には種々の利益があるが、就中逆行路によつて狩人や犬を欺くの利益がある。獵犬を以てする狩の方で逆逃げと稱する所のものが卽ちそれである。

丁度滿月の夜であつた。然しジャン・ヴァルジャンはそのために少しも困りはしなかつた。まだ地平線に近い月は、影と光りとの大きな帶で街路を二つにくぎつてゐた。ジャン・ヴァルジャンは人家や壁に沿つて影のうちに身を潛め、光りの方を透し見ることが出來た。影の方は見ることが出來なかつたことを、彼は餘り念頭に置いてゐなかつたらしい。ポリヴォー街に續く寂しい小路を進みながら、誰も後ろから來る者はないと彼は信じてゐた。

コゼットは何も尋ねずに歩いてゐた。世に出て最初からの六年間の苦しみは、彼女の性質のうちに或る受動的なものを注込んでしまつてゐた。その上、これは吾々が何度もこれから認めることではあるが、彼女は自分でもはつきり知らないうちに、その老人の不思議な樣子とまた數奇な運命とに馴れてしまつてゐたのである。それからまた彼女は、その老人と一緒にされ居れば自分は安全だと思つてゐた。

ジャン・ヴァルジャンも、コゼットと同じく、實はどの方面へ今進んでゐるかを自ら知らなかつた。コゼットが彼に身を託してゐるやうに、彼は神に身を託してゐた。彼も亦、自分より偉大な何者かの手に縋つてゐるやうな氣がしてゐた。誰か眼に見えない者が自分を導いてゐてくれるやうに思つてゐた。それに彼は、何等はつきりした考へも、何等の計畫も考案も持つてはゐなかつた。かの男がジャヴェルであつたかどうかも確かでなければ、またジャヴェルであつたにしろ自分がジャン・ヴァルジャンであることを知つてたかどうかも確かでなかつた。彼は假面を被つてゐたではないか、そして彼は死んだと信じられてゐたではないか。けれども確かに、數日來變なことが起つてゐた。彼にはもうそれで十分であつた。もうゴルボー屋敷へは歸るまいと彼は決心してゐた。宛も巣窟から狩り出された獸のやうに、永住し得る場所を見出すまで一時身を隱す穴を彼は探してゐた。

ジャン・ヴァルジャンは、ムーフタールの一郭のうちに在る種々な入り組んだ小路を歩き廻つた。そのあたりは、中世紀の習慣を保ち消燈信號の規定の下に在るかのやうにもうすつかり寢靜まつてしまつてゐた。彼は種々の方法を併せ用ゐ、賢い策略を以てして、サンシェ街からコポー街へはひつたり、パトアール・サン・ヴィクトル街からプュイ・レルミット街へぬけたりした。そのあたりはいくらか木賃宿もあつたが、適當なものが見當らないので中にはひつてもみなかつた。そしてまた、よし誰か自分の跡をつけてゐた者があつたにしても、もうその男をまいてしまつたに違ひないと、彼は信じてゐた。

サン・テティエンヌ・デュ・モン會堂で十一時が鳴つた時、ポントアーズ街の十四番に在る警察派出所の前を彼は通つた。それから間もなく彼は、前に述べたやうな一種の本能からふり返つてみた。その時彼は、派出所の軒燈のために輝らし出された三人の男の姿をはつきりと認めた。彼等は可なり近く彼の後ろをつけてゐて、その軒燈の下を街路の影の方の側へ相次いで通つて行つた。その一人は派出所の門のうちへはひつて行つた。けれど先頭に立つてる男は明かに疑はしいと彼には思へた。

「早くおいで。」と彼はコゼットに云つた。そして足を早めてポントアーズ街を離れた。

彼は圓形を描いて、もう遲いので閉つてゐるパトリアルシュ館の通路を廻り、エペ・ドゥボ

ア街からアルバレート街へ進み、ポスト街へはひり込んだ。

其處に一つの十字街があつた。今日ロラン大學の在る所で、ヌーヴ・サント・ジュヌヴィエーヴ街が交差してる所である。

（云ふまでもなく此のヌーヴ・サント・ジュヌヴィエーヴ街は古い通りであつて、またポスト街の方は十年に一度も郵便馬車さへ通つたことの無い位寂しい通りである。ポスト街は十三世紀に瀬戸物屋等が住んでゐた所で、その本當の名前はポー街（瀬戸物街）といふのである。）

月はその十字街に強い光りを投げてゐた。ジャン・ヴァルジャンは其處の或る戸口に身を潜めた、そして、もしあの男等が自分の後をまだつけてゐるのなら、彼等がその明るみを通る時によく見ることが出來るに違ひないと思つてゐた。

果して三分たゞないうちに、彼等の姿が現はれた。四人になつてゐた。皆脊の高い男で長い褐色のフロックを着て、圓い帽子を被り、手には太い杖を持つてゐた。その大きな身體と大きな拳とは、闇暗の中の凄い歩き方と共に氣味惡いものであつた。四個の怪物が市人に化けたやうな有樣であつた。

彼等は十字街の直中に立ち止つて、何か相談するやうに一群になつた。決心のつかぬ樣子をしてゐた。彼等の首領とも思へる一人の男が、ふり返つて、ジャン・ヴァルジャンが身を隱した方向を右手で強くさし示した。も一人の男は頑強に反對の方向をさし示したらしかつた。第一の男がふり返つた瞬間に、月の光りがその顏をすつかり輝らし出した。ジャン・ヴァルジャンは十分にジャヴェルの顏を認めた。

二　オースターリッツ橋の荷車

ジャン・ヴァルジャンにとつてはもはや疑ふ餘地はなかつた。然し幸にも四人の男の方にはまだ疑念があつた。彼は四人が躊躇してるのを利用した。彼等には損失の時間であつたが、彼には儲けの時間であつた。彼は蹲つてゐた戸口から出て、ポスト街を動植物園の方へ進んでいつた。コゼットは疲れてきた。彼はコゼットを兩腕にとり上げて、抱いて歩いた。一人の通行人もなく、また月夜のために街燈もともされてゐなかつた。

彼は足を早めた。

數歩進むと、陶器製造業ゴブレの店の所に達した。その家の前には、次のやうな古い文句が月の光りではつきり見えてゐた。

ゴブレ息子の工場は此處ぢや、
甕、壜、花瓶、管、煉瓦、

何でも望んでおいでなされ。
お望み次第に賣りますぢや。

彼はクレー街を後ろにして、次にサン・ヴィクトルの泉の所を通り、動植物園に沿うて低い通りを進み、そして河岸まで達した。其處で彼はふり返つてみた。河岸にも通りにも人通りはなかつた。自分の後ろにも誰も居なかつた。彼は息をついた。

彼はオーステルリッツ橋にさしかゝつた。

當時はなほ橋錢の制度があつた。

彼は番人の所へ行つて一錢渡した。

「二錢だよ。」と橋番の老人は云つた。「歩ける位の子供を抱いてゐなさるから、二人分拂ひなさい。」

彼は、其處を通ることから手がつきはしないかと心配しながら、二錢拂つた。逃げるには後を殘さないやうにしなければいけないのである。

丁度その時一臺の大きな荷車が、彼と同じくセーヌ河を右岸の方へ渡つてゐた。それは彼に利益だつた。彼はその荷車の影に隱れて橋を通ることが出來た。

橋の中程に來た時、コゼットは足が麻痺(しびれ)たから歩きたいと云つた。彼はコゼットを下に下して、またその手を引いた。

橋を渡り終へると、前方に少し右手に當つて材木小屋が並んでゐた。彼は其處へ進んで行つた。其處へ行くには、月に輝らされたうち開けた場所を可なり歩かねばならなかつた。が彼は躊躇しなかつた。自分の後をつけてゐた者は確かに途を迷つて、自分はもう危險の外に脱してゐると、彼は信じてゐた。まだ探されてはゐるだらうが、もう後はつけられてゐない。

小さな通りが、シュマン・ヴェール・アン・タントアーヌ街が、壁に圍まれた二つの材木小屋の間に通じてゐた。その通りは、狹く薄暗くて、特に自分のために作られてるかのやうであつた。彼はそれにはひり込みながら、後ろをふり返つて眺めた。

其處から彼は、オーステルリッツ橋をすつかり見通すことが出來た。

四個の人影が橋にさしかゝつてゐる所であつた。

それらの人影は、動植物園を脊にして、右岸の方へ來ようとしてゐた。

その四つの人影こそ、かの四人の男であつた。

ジャン・ヴァルジャンは、再び捕へられた獸のやうに身を震はした。

たゞ一つの希望が殘つてゐた。卽ち自分がコゼットの手を引いて月に輝らされた空地を通

つた時には、多分四人の男はまだ橋にさしかゝつてゐず、自分の姿を認めなかつたであらう。

果してさうだとすれば、今前に在る小路に走り込み、材木小屋か沼地か野菜畑か建物の無い空地かにはひり込んで、逃げのびることも出來るに違ひない。

今はそのひつそりした小路に身を託することが出來るやうに彼には思へた。彼はその中に進んでいつた。

三　千七百二十七年のパリーの地圖

三百歩ばかり行つた時、ジャン・ヴァルジャンは通りが分れてる所に達した。孰れも斜に右と左とに二本になつてゐた。彼の前には丁度Yの二本の枝のやうな通りがあつた。何れを選ぶべきか？

彼は躊躇しなかつた、そして右を選んだ。

何故か？

左の枝は場末の方へ、云ひ換へれば人の住んでゐる場所の方へ通じてゐたが、右の枝は田舍の方へ、云ひ換へれば人の居ない場所の方へ通じてゐたからである。

けれども二人はもう早く歩いてはゐたかつた。コゼットの足はジャン・ヴァルジャンの歩みを後らして居た。

彼はまたコゼットを抱き上げた。コゼットは彼の肩の上に頭をつけて、一言も口を利かなかつた。

彼は時々ふり返つては眺めた。彼は常に注意して、街路の薄暗い方を辿つてゐた。街路は彼の後ろに眞直に見えてゐた。最初二三度ふり返つた時には何にも見えず、たゞひつそりとしてゐたので、彼は少し安心して歩行を續けた。それからまた暫くしてふり返つてみると、今自分が通つて來たばかりの街路に、遠く闇の中に何か動いてるものがふと眼についたやうな氣がした。

彼はたゞ前方へ、歩いて行つたといふよりも寧ろ突進して行つた。そして、或る横丁を見附けて、其處から逃げ出し、も一度後をくらまさうと思つてゐた。

彼は一つの壁に行き當つた。

けれどもその壁は行き止りにはなつてゐなかつた。それは今彼が歩いて來た街路が或る横通りになつてる所の向うの壁だつた。

此處でなほ彼は心を決めなければならなかつた、右へ行くか、左へ行くかに。

彼は右の方を眺めた。小路は小屋や物置きなどの建物の間に細長く續いてゐて、その向うは行き止まりになつてゐた。その袋町の底もはつきり見えてゐた、大きな白い壁が。

彼は左の方を眺めた。そちらの小路は開けてゐた。そして約二百歩ばかり向うには、その小路が通じてゐる一つの街路が見えてゐた。安全なのはその方であつた。

彼は、その小路の向うに見えてゐる街路に出ようと思つて、左へ曲らうとした。その時、今彼が出ようと思つてる街路とその小路との落合つてる角の所に、ぢつとして動かない黑い立像のやうなものが見えた。

それは誰か一人の男で、明かに其處に見張りにやつて來て、通りを塞いで待つてゐたのである。

ジャン・ヴァルジャンははつと後に退つた。

ジャン・ヴァルジャンが立つてゐたパリーのその一地點は、サン・タントアーヌ場末とラーペの一郭との間であつて、其後の工事のために今は全く有樣が變つてしまつた場所の一つである。或者はそれを醜化だと云ひ、或者はそれを變容だと云ふが、兎に角全く變つてしまつた。野菜畑や材木小屋や古い建物はもう無くなつてしまつてゐる。今日では、新らしい大通りがあり、芝居小屋や曲藝場や競馬場があり、停車場があり、マザスの監獄がある。その全體よりすればなるほど進歩である。

林翰院を昔の名前で四國院と呼びオペラ・コミック座をフェードー座と呼び續けてゐる半世紀前の傳統に滿ちた普通の俗語では、ジャン・ヴァルジャンが辿りついたその場所をなほプティー・ピクピュスと呼んでゐた。サン・ジャック門、パリー門、セルジャン門、ポルシュロン、ガリオト、セレスタン、カプュサン、マイ、ブールブ、アルブル・ドゥ・クラコヴィー、プティート・ボロンニュ、プティー・ピクプュス、さういふものが新らしいパリーのうちに殘つてゐる古いパリーの名前であつた。民衆の記憶はそれらの過去の殘物の上に漂つてゐた。

その上プティー・ピクプッスは漸く名前が殘つてるといふばかりで、辛うじて一郭をなしてるのみで、スペインの町の修道院みたいな面影を持つてゐた。道路には鋪石もよく敷いてなく街路には人家も粗らであつた。これから述べる二三の街路を除いては、凡て壁ばかりで寂莫たるものであつた。商店もなければ、馬車も通らなかつた。漸く所々に窓から蠟燭の光りが見えてるのみで、燈火は凡て十時には消されてしまつた。庭園に修道院に材木小屋に沼地、所々には低い家、それから人家と同じ高さの大きな壁。

十七世紀に於けるその一郭は先づそんな有樣であつた。が革命のためにだいぶ姿を變へられた。共和市參事會のために、破壞され貫かれ穴を開けられた。塵芥貯藏所も建てられ

た。三十年前には、新らしい建物のためにその一郭は殆んど塗りつぶされてしまつた。今日ではもう全くその姿が無くなつてしまつてゐる。今日ではどの地圖にもさの跡さへ止めてゐない。然しそのプティー・ピクプュスの一郭も、千七百二十七年の地圖には可なり明かに示されてゐた。即ち、パリーのプラートル街と向合つたザン・ジャック街のドゥニー・ティエリー書店と、リオンのプリュダンスのメルシエール街のジャン・ジラン書店と、兩方から發賣せられた地圖にはのつてゐた。プティー・ピクプュスの一郭のうちで吾々が街路のY形と呼んだ所のものは、シュマン・ヴェール・ザン・タントアーヌ街の二つの枝から出來てゐて、左の方のをピクプュス小路と云ひ、右の方のをボロンソー街と云つてゐた。Yの二本の枝はその頂が一つの棒で結ばれてゐた。その棒をドロア・ムュール街と云つてゐた。ボロンソー街は其處に終つてゐたが、ピクプュス小路は先まで通じてゐて、ルノアール市場の方へ上つてゐた。セーヌ河からやつて來た通りは、ボロンソー街の端に達し、ドロア・ムュール街を左にして急に折れ曲り、正面はドロア・ムュール街の壁となり、右にはその通りの一片が延びてゐて、其處は出口がなく、ジャンロー袋町と呼ばれてゐた。

ジャン・ヴァルジャンが居たのは、その所であつた。

前に云つた通り、ドロア・ムュール街とピクプュス小路との出合つた角に見張りをしてゐる黑い人影を認めた時、彼は後に退つた。何等疑ふ餘地はなかつた。彼はその男から待伏せされてゐたのである。

どうしたらいゝか？

もう後に戻るだけの時間はなかつた。先刻彼の後ろの方に離れて影の中に何か動くものが見えたのは、確かにジャヴェルとその手下の者であるのは疑ひなかつた。ジャヴェルは既に、ジャン・ヴァルジャンが通りすぎたその街路の入口に來てゐるに違ひなかつた。前後の事情から察してみると、ジャヴェルはその迷宮小路の地理をよく心得てゐて、手下の一人を出口に遣すだけの注意を取つたものと見える。それらの推測は的確な形を取つて、突然の風に一握の埃りがまひ上るやうに、ジャン・ヴァルジャンの痛ましい腦裡に俄に渦卷き上つた。彼はジャンロー袋町を覗いてみた。其處は行き止りになつてゐる。彼はピクプュス小路を覗いてみた。其處には見張りの男が居る。彼は、月の光りに白く輝いてゐる鋪道の上に黑く浮出してゐるその陰慘な人影を眺めた。前に進めば、その男の手に落つる。後ろに退けば、ジャヴェルの手中に身を投ずることになる。ジャン・ヴァルジャンは、次第に狹まつてくる網のうちに囚へられてるやうな氣がした。彼は絶望して天を仰いだ。

四　逃げ道の暗中模索

次のことをよく理解せんには、ドロア・ムュール街の正確な觀念を得ておかなくてはいけない、そして特に、ボロンソー街からドロア ムュール街へはひつてゆく左手の角をよく知つておかなくてはならない。ドロア・ムュールの小路は、ビクプュス小路に出るまで右側には殆んど凡て貧しい外見の人家が並んでゐた。左側には、何軒にも分れてゐる嚴めしい線の一つの長屋が立つてゐて、ビクプュス小路に近づくに隨つて一階二階と次第に高くなつてゐた。それでその長屋は、ビクプュス小路の方では極めて高くなつてゐたが、ボロンソー街の方では可なり低かつた。そして前に云つたその角の所では、たゞ一つの壁だけの高さにまで低くなつてゐた。その壁は四角に街路についてゐなくて、どく引込んだ一斷面をなしてゐたので、ボロンソー街とドロア・ムュール街と兩方から見る者があつても、その二つの角に遮られて見えないやうになつてゐた。

その切取られた斷面の兩方の角から出ると、ボロンソー街の方では四十九番地といふ表札のある一軒の人家まで壁が續いて居り、ドロア・ムュール街の方では、壁は少し短くて、前に云つた薄暗い長屋の所まで行つてゐて、その切妻壁を切り取り、さうして通りにまた新たな引込んだ角を拵へてゐた。その切妻壁は陰氣な有樣をしてゐて、たゞ一つの窓、云ひ換へれば亞鉛板を着せた二枚の扉きりついてゐないで、それも常に閉められてゐた。

玆に吾人が描き出すその場所の有樣は、嚴密に正確であつて、その一郭に昔住んでゐた者の頭には必ずやどくはつきりした記憶を呼び起すであらう。

壁の切り取られた斷面は、その全部が一種の大きな見すぼらしい門みたいになつてゐた。それは縱に多くの板をよせ集めた不恰好なもので、上の方の板は下の方のものより廣く、皆横に打ちつけた長い鐵の箍で止めてあつた。その横の方に、普通の大きさの正門があつて、またつけられてから明かに五十年とはたつてゐないらしかつた。

一本の菩提樹の木がその切り取られた壁の斷面の上から枝を擴げて居り、またボロンソー街の方では壁の上に蔦が一杯絡みついてゐた。

さし迫つた危險のうちに在ることを感じたジャン・ヴァルジャンは、その薄暗い長屋が何となく人氣なくひつそりしてゐるのに心惹かれた。彼は急にその長屋を見廻した。そしてもしその中にはひることが出來たら、恐らく助かるであらうと思つた。彼は先づさういふ考へと希望とを得た。

ドロア・ムュール街に面するその建物の正面の中ほどには、鉛の古い漏斗形の鉢がどの階の

窓にもついてゐた。そして中央の管から分れてその鉢の各へ通じてゐる種々な管の枝が、建物の正面に木の枝のやうに浮出てゐた。その澤山の節を持つた管の枝は、昔の百姓家の正面に捩れ絡んでゐる古い刈り込まれた葡萄の蔓を眞似たものであつた。

鋲力や鐵などの枝のついたその可笑しな壁果樹が、最初にジャン・ヴァルジャンの眼にとまつた。彼はコゼットを車除石に脊をもたして坐らせ、默つてゐるやうに命じて、それから管が地面についてる所へ走つていつた。多分其處から上つて家の中にはひり込む方法があるだらうと思つたのである。然し管は古くなつてゐて役に立たず、殆んど壁から離れてぐら〳〵になつてゐた。その上靜まり返つた建物の窓はどれも皆、屋根裏の窓でさへ、大きな鐵の格子がはまつてゐた。それからまた、月の光りはその正面に一杯さしてゐて、其處を乘り越えようとすれば通りの端で見張りをしてゐる男に見附かる恐れがあつた。それからまたコゼットをどうすればい〳〵か？　四階の高さの家までどうして彼女を引上げられよう。

彼は管についてよぢ上る考へを止めて、ボロンソー街の方へ戻るために壁に身を寄せて匐つて來た。

コゼットを殘しておいた壁の斷面の所まで來た時、其處は誰からも見られないことに彼は氣附いた。前に說明した通り、其處はどちらから見ても見えないやうになつてゐた。その上其處は影になつてゐた。また二つの門があつた。或はそれを押し開けられるかも知れなかつた。壁の上から菩提樹の木と蔦とが見えてる所をみると、中は明かに庭になつてるらしかつた。樹木にはまだ葉は出てゐなかつたが、少くとも其處に身を隱して夜が明けるまでは潛んでゐることが出來るかも知れなかつた。

時は過ぎ去つてゆく。早くしなければならなかつた。

彼は門に觸つてみた、そしてすぐに、その戸は內外兩方から閉め切つてあることを知つた。

彼はなほ多くの希望を懷いて、も一つの大きな門に近づいていつた。それは恐ろしく老い朽ちてゐて、大きいので一層弱さうで、板は腐つて居り、三つしかない鐵の箍は錆びきつてゐた。その錆び朽ちた戸を押し破ることは出來さうに思へた。

所がよく見ると、それは實は門ではなかつた。肱金も蝶番も錠前もまた眞中に合せ目もなかつた。鐵の平板は一方から他方へ續け樣にうちつけてあつた。板の裂け目から彼は、い加減にセメントで固めた素石や切石を覗き見ることが出來た。今から十年前まではなほ其處を通る者はそれらのものを見ることが出來たのである。その戸みたいなものはたゞ壁の上につけられた木の覆ひにすぎないことを、彼は狼狽しながらも自ら認めざるを得なかつ